

# 梶 海 渡 遺 跡

県営ほ場整備事業豊科南部地区に係る  
埋蔵文化財発掘調査報告書

1993.3

豊科町教育委員会

# 梶 海 渡 遺 跡

県営ほ場整備事業豊科南部地区に係る  
埋蔵文化財発掘調査報告書

1993.3

豊科町教育委員会



調査地全景（東上空より）



I + II 地区（西上空より）



I 地区全景



II・III地区全景



墨書き土器 (1)



白磁 (70)



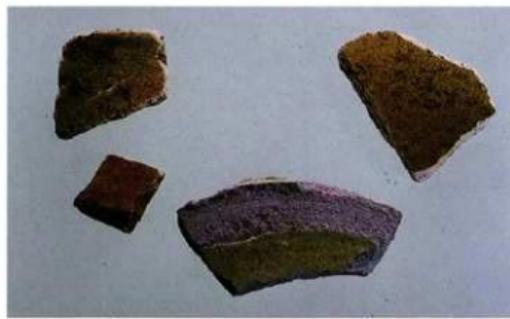
染付 (青花磁)



墨書き土器 (87)



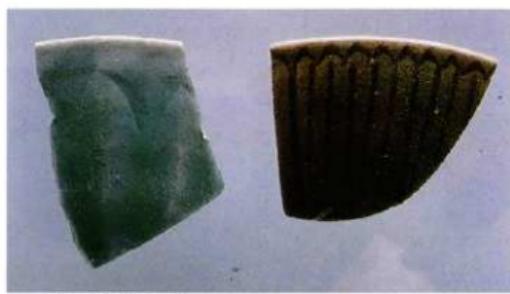
染付 (107)



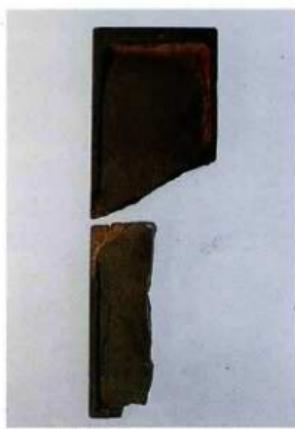
緑釉陶器



水滴 (117)



青磁 (71-55)



碗 (114)

# 序

梶海渡遺跡は吉野地区の北にあり、古代の焼き物が出土することで、また、現在新田にある法藏寺の故地として知られていました。私たちの郷土を築いてきたそれら先人の生活の跡は、その後土に埋まり、やがて水田へと姿を変え、そして今またほ場整備事業によってその景観を大きく変えようとしています。

今回、この県営ほ場整備事業にさきがけ、長野県松本地方事務所より豊科町教育委員会が委託を受け、発掘調査を実施いたしました。調査は平成3年10月から12月にかけて実施され、本書はその後の整理作業とあわせて結果を報告するものであります。残念ながら、私たちの先人の生活の跡は、土に埋まってからというもの、後にも先にもかかわった私たちだけしか目にすることができます。その内容を紹介する本書が多くの方に活用され、また、今後の文化財保護と郷土の歴史の解明に役立つことを期待いたします。

ここに調査にご理解とご協力をいただきました松本地方事務所をはじめとする関係機関、また吉野地区の皆様に対し、深甚の敬意と感謝を申し上げ序といたします。

平成5年3月

豊科町教育委員会

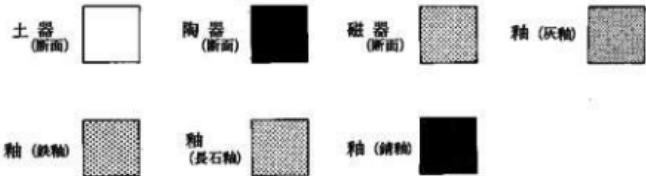
教育長 小幡正行

## 例　　言

- 1 本書は平成3年10月15日から12月25日に実施した、長野県南安曇郡豊科町大字豊科3774番地他 梶海渡遺跡の緊急発掘調査の報告書である。
- 2 本調査は松本地方事務所より委託を受け、豊科町教育委員会が実施した。
- 3 調査の記録にあたっては、株式会社 朝日計測に委託して設定した、新平面座標系裡による測量座標を用いた。
- 4 本書の作成にかかる図面、遺物整理等の作業の分担は第1章に記した。
- 5 本書の編集は、事務局が行った。執筆は第2章第2節を森義直が、他は山田真一が担当した。
- 6 訂、引用文献、参考文献等は各章末に一括掲載した。
- 7 遺物実測図のうち、古代土器の種類は次のように表した。



また、中世以降の陶磁器については次のように表した。



- 8 調査地の航空写真は、写真測図研究所に委託して撮影した。
- 9 出土遺物及び図類は豊科町教育委員会が保管している。

## 目 次

第1章 調査の経緯と方法	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	2
第3節 調査の方法	3
第4節 調査経過	5
第2章 遺跡の立地と歴史的環境	9
第1節 遺跡の位置	9
第2節 地形と地質	9
第3節 歴史的環境	11
第3章 調査の結果	15
第1節 調査の概要	15
第2節 遺構	15
1 竪穴住居	15
2 土坑・柱穴	17
3 溝	42
4 不明遺構	46
第3節 遺物	47
1 土器・陶磁器	47
(1) 古代の土器	47
(2) 中世以降の土器・陶磁器	49
(3) 遺構出土の土器	51
2 石器・石製品	51
3 金属製品	52
4 銭貨	52
5 その他	52
第4章 調査の成果と課題	53
第5章 結語	56

## 挿図目次

挿図 1	工事の範囲と調査地の位置	3
挿図 2	遺跡(調査地)の位置	8
挿図 3	周辺の遺跡	12
挿図 4	桜海渡遺跡既出遺物実測図	13
挿図 5	遺構位置区画図	14
挿図 6	SB1 実測図	16
挿図 7	SK1 実測図	17
挿図 8	SK2 ~12実測図	19
挿図 9	SK13~20実測図	20
挿図10	SK21~26実測図	24
挿図11	SK27~29実測図	25
挿図12	SK30~32実測図	27
挿図13	SK33~39実測図	29
挿図14	SK40~45実測図	31
挿図15	SK46~48実測図	33
挿図16	SK49~58実測図	35
挿図17	SK59~64実測図	37
挿図18	SK65~69実測図	39
挿図19	SK70~75実測図	41
挿図20	不明遺構断面図	46
挿図21	かわらけ法量図	49
挿図22	かわらけ体部形態図	49
挿図23	擂鉢・土釜実測図	50
挿図24	墨書き器	51
挿図25	調査地周辺界図	54

## 表 目 次

表 1 骨を出土した遺構	53
付表 1 柱穴一覧表	59
付表 2 出土土器・陶磁器観察表	67
付表 3 出土錢貨一覧表	73

## 図版目次

卷頭図版1 調査地全景（東上空より）	
卷頭図版2 I・II地区（西上空より）・I地区全景	
卷頭図版3 II・III地区全景	
卷頭図版4 墨書き器、綠釉陶器、青磁、白磁、染付、水滴、硯	
図版 1 I地区全体図	
図版 2 II地区全体図	
図版 3 III地区全体図	
図版 4 遺構図（1）	
図版 5 遺構図（2）	
図版 6 遺構図（3）	
図版 7 遺構図（4）	
図版 8 遺構図（5）	
図版 9 遺構図（6）	
図版10 遺構図（7）	
図版11 遺構図（8）	
図版12 遺構図（9）	
図版13 遺構図（10）	
図版14 遺構図（11）	
図版15 遺構図（12）	
図版16 遺構図（13）	
図版17 遺構図（14）	
図版18 遺構図（15）	

- 図版19 遺構図（16）
- 図版20 遺構図（17）
- 図版21 遺構図（18）
- 図版22 遺構図（19）
- 図版23 遺構図（20）
- 図版24 遺物実測図（土器：S B 1）
- 図版25 遺物実測図（土器・陶磁器：S K15、S K26、S K27、S K33、S K34、S K36、S K39、  
S K41、S K42、S K43、S K48、S K60、S K61、S K63、P203）
- 図版26 遺物実測図（土器・陶磁器：S D11、S D13、S D16、S D18、遺構外）
- 図版27 遺物実測図（土器・陶磁器：遺構外、石製品、金属製品）
- 図版28 遺物実測図（金属製品・錢貨）
- 図版29 遺物実測図（錢貨）
- 図版30 S B 1 遺物等出土状況・S B 1
- 図版31 S K1（南より）・S K1（西より）
- 図版32 S K20・S K21・S K27・S K31
- 図版33 S K30・S K41・42・S K43
- 図版34 S K48・S K53・S K60・61
- 図版35 S D1・2・7・S D3～6・自然流路
- 図版36 S D11・S D14・I 地区柵列
- 図版37 S B 1出土土器
- 図版38 土坑・溝 出土土器・陶磁器
- 図版39 溝・遺構外 出土土器・陶磁器、石器
- 図版40 出土錢貨
- 図版41 調査スナップ

## 第1章 調査の経緯と方法

### 第1節 調査に至る経緯

本調査は県営は場整備事業豊科南部地区に伴う緊急発掘調査で、事業の主体者は長野県松本地方事務所である。事業は豊科町の中南部に位置し一級河川梓川及び犀川左岸に展開する水田地帯においては場整備を計画し、高性能農業機械の有効利用、水田の汎用化、農地の集団化を図り、労力の節減、作物の品質向上等、総合的改善を期することを目的としている。事業総面積は387.8haで平成2年度から着手された。

区域内の埋蔵文化財の保護については、事業者・長野県教育委員会・豊科町役場耕地課・豊科町教育委員会が参加して協議がもたれ、平成3年度は梶海渡遺跡に工事の影響が及ぶため、その発掘調査を実施することとなった。調査は平成3年1月から2月の試掘調査を経て、平成3年10月から12月にかけて実施された。翌年1月から整理作業を本格的に開始し、平成4年度にその報告書を作成した。

なお、本調査は平成3年度及び4年度の国宝重要文化財等保存整備費補助事業(国庫)、文化財保護事業(県費)として行われた。その文書記録は以下のとおりである。

平成2年 9月13日	平成3年度県営は場整備事業豊科南部地区に係る埋蔵文化財保護協議を豊科町公民館及び現地にて開催
12月10日	埋蔵文化財(梶海渡遺跡他)保護協議を豊科町公民館及び現地にて開催
12月25日	平成3年度文化財関係補助事業計画書提出
平成3年1月～3月	梶海渡遺跡他の試掘調査を実施(豊科町教育委員会)
平成3年 4月15日	平成3年度国宝重要文化財等保存整備費補助事業計画内定(通知)
5月10日	平成3年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書提出
5月20日	平成3年度県営は場整備事業に伴う埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約を結ぶ
9月11日	平成3年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付決定(通知)
9月 6日	埋蔵文化財(梶海渡遺跡)発掘調査の通知提出
9月17日	平成3年度文化財保護事業県費補助金の内示(通知)

- 9月26日 平成3年度文化財保護事業県費補助金交付申請書提出  
 10月15日 平成3年度文化財保護事業県費補助金交付決定（通知）  
 12月25日 埋蔵文化財（梶海渡遺跡）発掘調査終了届・埋蔵文化財拾得届・同保管証提出
- 平成4年 1月 6日 平成4年度文化財関係補助事業計画書提出  
 2月14日 梶海渡遺跡埋蔵物の文化財認定通知  
 3月25日 平成3年度県営は場整備事業に伴う埋蔵文化財包蔵地発掘調査実績報告書提出  
 3月25日 平成3年度国宝重要文化財等保存整備費補助事業・平成3年度文化財保護事業（県費）実績報告書提出  
 3月31日 平成3年度文化財保護事業県費補助金額の確定  
 3月31日 平成3年度国宝重要文化財等保存整備費補助金額の確定  
 5月20日 平成4年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書提出  
 5月20日 平成4年度県営は場整備事業に伴う埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約を結ぶ  
 平成4年度事業着手  
 5月27日 平成4年度国宝重要文化財等保存整備費補助事業計画内定（通知）  
 7月15日 平成4年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付決定（通知）  
 7月 9日 平成4年度文化財保護事業県費補助事業計画内定（通知）  
 7月15日 平成4年文化財保護事業県費補助金交付申請書提出  
 9月 7日 平成4年度文化財保護事業県費補助金交付決定（通知）  
 9月24日 平成4年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付決定（通知）

## 第2節 調査体制

**調査主体** 豊科町教育委員会

**調査担当** 山田真一（豊科町教育委員会社会教育課）

**調査員** 森 義直（大町高等学校）

百瀬新治（豊科東小学校）

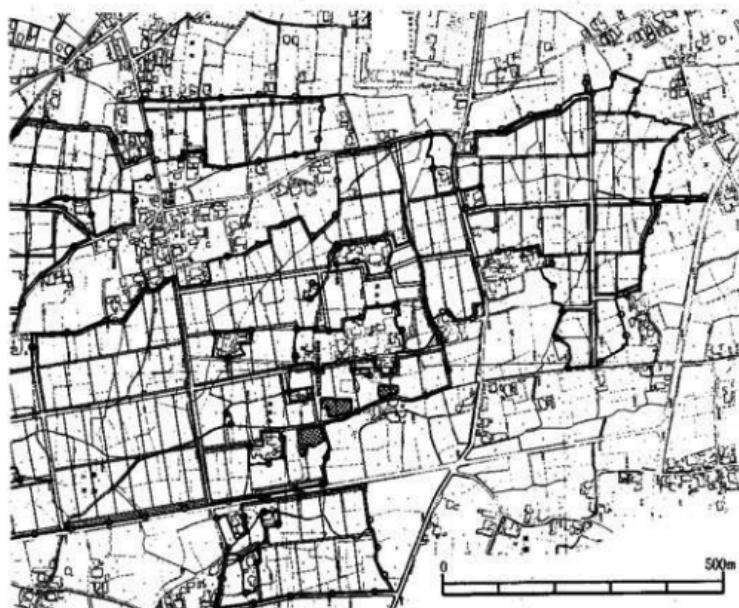
**作業参加者** 赤羽征子 上松宗一 鮎沼定計 稲田節子 今井清子 太田穎子 大野 勉

大野登美子 岡村光雄 奥村隆雄 奥村美栄子 河島竜夫 熊井かつ江 熊  
井孝子 小林武夫 田尻知江子 手塚秀子 長谷川あけよし 長谷川今朝木  
福田明男 丸山藤清 山水美知子

事務局 豊科町教育委員会社会教育課社会教育係 二木義照(社会教育課長～H3.6.  
30) 丸山幸安(社会教育課長 H3.7.1～) 等々力政文(社会教育係長～H4.  
3.31) 浅川秀明(社会教育係長 H4.4.1～) 赤沢重輝 宮沢佐多子 丸山  
千枝美 宮沢万茂留 野本岳洋 浅川 登 小川正弘

### 第3節 調査の方法

『南安曇都誌』(1968年)には、櫛海廻遺跡から土師器の出土のあったことが記されている。  
しかし、その出土地点及び遺物の所在も現在では不明で、遺跡の範囲・性格等は不明確な



挿図1 工事の範囲と調査地の位置

ままであった。

今回、工事が遺跡周辺に及ぶにあたり、まず、分布踏査を実施した。調査地が水田のため成果は少なかったが、発掘地周辺で土師器の小片が少量得られた。この結果を基に、遺物の採集された地点を中心に試掘調査を実施した。(平成2年1月～2月) その結果、遺構こそ確認できなかったものの少量の遺物が得られ、また基盤の礫層までは深浅があることを確認した。

本調査は稲の刈取りを待って開始した。調査区は工事で切土となった部分で基盤の礫層まで浅い地点を選びI～III区を設定した。

試掘調査の際、礫層まで安定した面が存在しないことが確認されていたのでその直上を検出面ととらえた。表土は重機で剥ぎ、検出は人力で行った。

遺構には検出順に竪穴住居址にSB、土坑にはSKの記号を冠し通し番号を付けていった。SKを付した中には掘立柱建物を構成する柱穴とみられるものがあり、これらはまとめてSTの記号を付し、個々の柱穴は整理作業の過程でPの記号を付した。遺構名は現場での調査終了後に整理し、変更したり追加したものもある。遺構の掘り下げは四分割し、その土手で土層を観察する方法を基本に、適宜応用して実施した。

測量は委託設定した国土座標に基づき1/20で行い、必要に応じて1/10等大縮尺で行った。写真はモノクロネガとリバーサルを使用し、その他にカラーネガでも撮影をしている。

調査記録は主に次の者が担当した。

遺構測量 赤羽征子 大野登美子 奥村美栄子 熊井かつ江 田尻知江子

手塚秀子 山水美知子 山田真一

遺物復元 飯沼定計 奥村美栄子 熊井かつ江 小林武夫 山水美知子

遺物実測 熊井かつ江 田尻知江子 山田真一

遺構トレース 熊井かつ江 田尻知江子 山水美知子 山田真一

遺物トレース 熊井かつ江 田尻知江子 山田真一

遺構・遺物写真 山田真一

調査中は以下の方々、ならびに諸機関からご指導、ご協力いただいた。記して謝意を表したい。

会田進 市川隆之 伊藤和明 小穴喜一 小穴芳実 大沢哲 大沢法樹 大沢法我

岡村タカ子 岡村政近 河西克造 神沢昌二郎 桐原健 鷺谷康治 小林富雄 小松望  
島田哲男 関沢聰 竹内靖長 田尻年幸 烏羽嘉彦 直井雅尚 中野次男 中野正實  
野村一寿 橋口昇一 平林彰 廣田和徳 降旗和夫 降旗俊行 丸山毅一 丸山邦次郎  
丸山藤清 丸山文子 丸山聰太郎 三村竜一 望月和栄 山下泰永 周岳山法藏寺

#### 第4節 調査経過

調査の経過は以下の作業日誌に記したとおりである。

平成2年10月15日(火) 曇 調査前現状写真撮影。

10月21日(月) 晴 業者と現場打ち合わせ。I地区調査区設定。

10月22日(火) 晴 I地区、バックホー・ブルドーザーにより水田耕土移動。

10月23日(水) 晴 I地区、バックホー・ブルドーザーによる表土剥ぎを行う。

10月24日(木) 晴 II・III地区調査区設定。プレハブ・トイレ等設置。作業説明会・調査員会議開催。

10月25日(金) 雨／晴 I地区、バックホー・ブルドーザーによる表土剥ぎ継続。III地区水田耕土移動。

10月26日(土) 晴 プレハブへ機材等搬入。

10月28日(月) 晴 本日より作業開始。I地区より検出を行う。北西隅から中央にかけて柱穴群を検出。III地区バックホー・ブルドーザーによる表土剥ぎ継続。

10月29日(火) 晴 I地区検出継続。III地区バックホー・ブルドーザーによる表土剥ぎ継続。

10月31日(木) 曙 II地区バックホー・ブルドーザーにより水田耕土移動。I地区検出継続。

11月1日(金) 晴 III地区検出。II地区バックホー・ブルドーザーにより表土剥ぎ。I地区遺構検出状況略測図作成。

11月5日(火) 晴 II地区バックホー・ブルドーザーにより表土剥ぎ。I・III地区遺構検出状況略測図、III地区北壁セクション図作成。

11月6日(水) 晴 II地区遺構検出。I地区南壁セクション図作成。

11月7日(木) 晴 II地区遺構検出継続。I地区南壁セクション図作成。II地区遺構検出状況略測図作成。

- 11月8日(金) 曇／雨 II地区遺構検出継続。II地区遺構検出状況略測図作成。午後、雨のため作業中止。
- 11月11日(月) 晴 II地区遺構検出継続。II地区遺構検出状況略測図作成。午後よりI地区遺構掘り下げ開始。SB1の全容を明らかにするため調査区拡張。SK1より骨片出土。
- 11月12日(火) 晴 I地区遺構掘り下げ継続。SB1掘り下げ開始、カマド近辺から遺物出土。土坑セクション図作成。
- 11月13日(水) 晴 I地区遺構掘り下げ、遺構セクション図作成。SB1床面を出す。
- 11月14日(木) 曇 II地区遺構掘り下げ、I地区遺構セクション図作成。SB1カマド掘り下げ。
- 11月15日(金) 曇 II地区遺構掘り下げ、セクション図作成。SB1セクション図作成。SK27より銭・硯出土。土坑セクション図作成。
- 11月16日(土) 晴 遺構セクション図作成。
- 11月18日(月) 晴 II地区遺構掘り下げ、セクション図作成。SB1遺物出土状況写真撮影。
- 11月19日(火) 晴 I地区SK1完掘。II地区遺構掘り下げ、セクション図作成。
- 11月20日(水) 曇／雨 II地区遺構掘り下げ、セクション図作成。P142より銭まとまって出土。自然流路掘り下げ。
- 11月21日(木) 晴 II地区遺構掘り下げ継続。
- 11月22日(金) 晴 II地区遺構掘り下げ、セクション図作成。
- 11月25日(月) 晴 SB1遺物出土状況図作成。II地区遺構平面図作成。SK48疊出土状況図作成。
- 11月26日(火) 曙／晴 II地区遺構掘り下げ、遺構平面図作成。文化財調査委員会。
- 11月27日(水) 曙 II地区遺構・自然流路掘り下げ。
- 12月2日(月) 晴 II地区遺構・自然流路掘り下げ。
- 12月3日(火) 晴 II地区自然流路・構掘り下げ。遺構セクション図作成。
- 12月4日(水) 晴 I地区遺構清掃。10時30分よりラジコンヘリコプターを利用し空撮を行う(写真測図研究所)。II地区遺構・自然流路掘り下げ、セクション図作成。SK33より銭まとまって出土。
- 12月5日(木) 晴 II地区自然流路掘り下げ。III地区遺構掘り下げ。(株)朝日計測により

基準杭設定。

- 12月6日(金) 晴 III地区遺構掘り下げ。II・III地区遺構セクション図作成。
- 12月7日(土) 晴 遺構清掃。午後現地説明会を開催する。
- 12月9日(月) 曇 II地区自然流路掘り下げ。III地区平面図作成。
- 12月10日(火) 晴 II地区自然流路掘り下げ継続。I・III地区平面図作成。
- 12月11日(水) 曇／雨 II地区自然流路掘り下げ継続。セクション図作成。I地区平面図作成。
- 12月13日(金) 晴 II地区自然流路掘り下げ継続。I・II・III地区平面図作成。
- 12月16日(月) 晴 II地区自然流路掘り下げ継続。I・II・III地区平面図作成。
- 12月17日(火) 晴 遺構平面図作成。遺構清掃。
- 12月18日(水) 曇／雨 遺構平面図作成。遺構清掃。
- 12月19日(木) 晴 遺構清掃。写真測図研究所により空撮。遺構平面図作成。機材撤収。
- 12月20日(金) 晴 遺構平面図作成。S B 1 カマド断ち割り、セクション図作成。
- 12月21日(土) 晴 遺構平面図作成。機材撤収。
- 12月25日(水) プレハブ・トイレ等撤収。

以後、教育委員会事務局別室で整理作業を継続。平成4年度報告書(本書)作成。



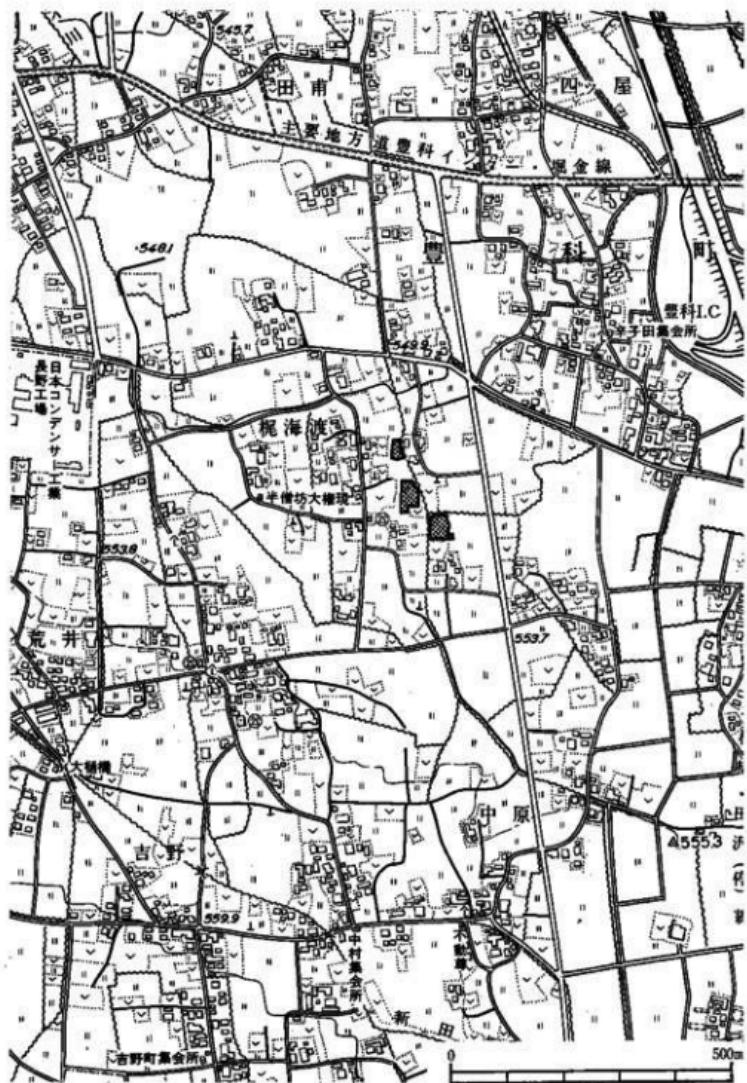


図2 遺跡(調査地)の位置

## 第2章 遺跡の立地と歴史的環境

### 第1節 遺跡の位置

梶海渡遺跡は豊科町のはば中央、吉野地区に所在する。周辺はほぼ平坦な地形で、地目は水田あるいは畠地となっている。遺跡の範囲・内容とも不明確であるが、南は荒井の集落境から北・西は寺所・成相地区境まで、微高地上に展開されていたと推定されている。

### 第2節 地形と地質

**地形・地質の概説** 本遺跡は、南北約50km、東西10~15kmにかけて広がる松本盆地の中央やや北寄り、安曇野の標高約550mの地点に位置する。松本盆地に流入する主要河川の一つである梓川により形成された大扇状地の沖積地で、梓川と奈良井川が合流して犀川となる合流点の北西約2km付近にある。

松本盆地は、更新世の中頃（およそ70万年前）の造盆地運動により、西は山麓線に沿い東もほほ東山の山麓線に沿って南北方向に走るそれぞれ複数の大断層で陥没し、この陥没地に南から奈良井川、南西から梓川、北からは高瀬川をはじめとする大小の河川が流入し、大量の土砂を厚く堆積させ現在に至っている。盆地の西部山地は飛騨山脈の東端にあたり、地質学上は美濃帯と呼ばれる中・古生層と中生代末の花こう岩類より成り、上記断層の他、それに雁行する幾本かの断層により、急傾斜をなして盆地と接している。これらの山地を侵食して運ばれた沢や河川の礫は、供給源である山地の地質により、硬砂岩・粘板岩・チャート・花こう岩などが主である。梓川水系ではこの他に、乗鞍・焼岳の安山岩や穂高連峰の火成岩も混入している。

東部山地はフォッサマグナの堆積物で、新生代の第三紀層と火成岩より成る。古女鳥羽川が城山付近に流下し厚く疊層を堆積させているが、本遺跡付近には及んでいない。したがって本遺跡付近は主として梓川水系による扇状地堆積物より成り、土砂の厚さはおよそ400mとされている。その堆積物の上に烏川系の古い扇状地の扇端付近が重なり、その南端は吉野～梶海渡にまで及んでいるものとみられる。なお、吉野付近については昨年の報告書を参照されたい。

**遺跡付近について** 上述したように、吉野～梶海渡地区の大部分は、新世代第四紀更新

世の比較的怪の大きな梓川礫層（波田礫層）の上に、氾濫原堆積物として沖積層が10~30mの厚さで堆積しており、部分的に本遺跡付近は微高地として旧烏川扇状地（洪積世末の堆積？）の削り残された部分ではないかとみられる硬く締まった褐色礫土が存在している。この付近での梓川系の沖積層は一般に比較的細粒の堆積物が多く、シルト質をはさんでいるのが特徴である。

梓川左岸には三つの段丘が存在し、上段からロームの載った更新世の上野面、次のロームの載らない完新世の丸田面、その下の現梓川の氾濫原である岩岡面となっている。梓川は丸田面の堆積が終わるところから流路を北から東へと向きを変え、その結果、広い岩岡面が形成されるに至った。このうち直接本遺跡と関係が深い丸田面と岩岡面の境界である段丘は、梓川丸田から下立田～大妻を通り、上真々部から下鳥羽の太子村付近で消滅している。したがってその延長上にある本遺跡は梓川系の洪水時の流路と旧烏川扇状地端の接点に当たっている。今回発掘した範囲の土層を見てもそのことがはっきりわかり、I地区の西半分とII・III地区は烏川系の旧扇状地堆積物が所々切れたり梓川系の侵食を受けた跡を残しながらも薄く残っており、平安時代から中世にかけての地山となっている。一方、I地区の東部は旧扇状地端を梓川系の水路により切られており、新期の砂礫層となっている。これらの土層を記録に残っている洪水の堆積物や自然堆積による細粒の堆積物が35~60cmの厚さで覆い、平坦な現地表面を形成している。

一般に松本盆地の中央付近は、年平均1mmの速さで自然堆積が行われているにもかかわらず、本遺跡のII地区では平安面と中世の面はほぼ同じ深さ（約35cm）である。これは、長い間旧烏川扇状地が部分的に残って微高地となっていたためと推定される。このような地形は昨年発掘した吉野町館跡遺跡でも確認されており、当時は現在ほど平坦ではなく緩い起伏が続く地形であったことが推定される。

**I地区の土層** 西側は旧烏川系扇状地堆積物で、ふるい分けの悪い硬く締まった褐色礫土層であり、その最上部は洪水で洗われて10cm前後の礫が露出し、その上に平均35cm程の自然堆積による土層が載っている。この土層は二層（表土：15~20cm、暗褐色土：10~20cm）に分けられる。この暗褐色土は表土と同質であり、表土から溶脱した赤褐色の金属酸化物により着色されている。

**II・III地区の土層** 基本的にはI地区の西側と同じであるが、地表から25~70cmのところにある旧扇状地堆積物には、平安時代や中世の遺構が検出されており、それらは1~2回の洪水を受けていることが確認された。この検出面には水路が二種類あり、一つは蛇行す

る洪水または自然の浅い流路で、今一つは直線的な人工の溝である。II・III地区の西端は込み入った深い自然の凹地となっており、堆積物の様子から水路や湿地となった時期のあつたことが推定できる。中世には中程まで埋まって湿地となっており、当時の遺物が見つかっている。遺構面までの深さは、部分的に微高地であったため変化が激しく、深いところは70cmに達している。二層の溶脱物沈殿層が見られ、水田または湿地面の安定期が二回存在したことを示している。

各地区的検出面は、当時微高地で洪水時には低部以外は堆積せずに上部が多少削られているとみられるものである。したがって、当時の生活面そのものではないと推定される。

なお、II地区の西端には、地表から10~20cmの間に、人工の礫による幾本かの区画（幅約180cm、礫幅約20cm）が検出されたが、表土最下部の黒色土内であるので、近世における使途不明の遺構と推定される。

### 第3節 歴史的環境

**周辺の遺跡** 肥沃な水田地帯で、しかも各所に100cm以上の深い耕土帯と砂礫の厚い堆積がみられることから、町内の遺跡については、広がり・性格等が不明なものが多い。限られた資料であるが、古代~近世にかけてを中心概観してみたい。

成相遺跡の打製石斧、吉野町遺跡の石鐵等、縄文時代に溯る遺物の出土も若干知られているが、この地域の開発が進んだのは平安時代になってからと考えられる。宮前遺跡・小海渡遺跡・真々部巾下遺跡・荒井遺跡・吉野町遺跡・柳原遺跡・本村遺跡・大海渡遺跡・姥ヶ池遺跡等から須恵器・土師器が出土しており、古代の安曇郡高家郷に比定されている。このうち、1991年に発掘調査が行われた吉野町遺跡では平安時代（9世紀）と考えられる竪穴住居址8軒が検出されている。また、荒井遺跡でも住居址らしい遺構があったと報告されている。

中世~近世には殿村館跡（細萱氏館跡）・真々部氏館跡・吉野町館跡をはじめ多くの城館が築かれる。とりわけ殿村館跡の築造は中世前期にさかのばるとされており、安曇野の開発の拠点として果たした役割は大きい。他は戦国期以降の築造とされている。いずれも松本から安曇への交通の要衝に築かれ、以後集落の中心として現在に至っている。このうち、吉野町館跡遺跡は1991年に発掘調査が実施され、本郭の様相が明らかになっている。一方、この時代の集落址には上手木戸遺跡がある。1986年、中央自動車道長野線の工事に



- |          |            |                  |           |
|----------|------------|------------------|-----------|
| 1 宮前遺跡   | 11 成相遺跡    | 21 上ノ山北遺跡        | 31 篠倉氏館跡  |
| 2 熊倉遺跡   | 12 菖蒲平窓跡群  | 22 殿村館跡 (細萱氏館跡)  | 32 町田館跡   |
| 3 小海渡遺跡  | 13 上ノ山窓跡群  | 23 法藏寺館跡         | 33 田沢城跡   |
| 4 上手木戸遺跡 | 14 町田遺跡    | 24 柳えの墓館跡        | 34 光城跡    |
| 5 荒井遺跡   | 15 光通跡     | 25 中村堀屋敷跡        | 35 上ノ山城跡  |
| 6 桐原遺跡   | 16 原村遺跡    | 26 古野町館跡 (古野町遺跡) | 36 推定日光寺址 |
| 7 柳原遺跡   | 17 坂田古宮遺跡  | 27 成相氏館跡         | 37 推定法藏寺址 |
| 8 本村遺跡   | 18 真々部市下遺跡 | 28 鳥羽館跡          |           |
| 9 大海渡遺跡  | 19 町村遺跡    | 29 坂田砦跡          |           |
| 10 姥ヶ池遺跡 | 20 小瀬幅遺跡   | 30 真々部氏館跡        |           |

図3 周辺の遺跡

先立ち発掘調査が行われ、内耳土器を伴う竪穴状遺構、掘立柱建物址等が検出されている。なお、今回の調査地周辺は現在新田にある法藏寺（浄土宗 知恩院末）があった場所とされている。同寺縁起によると永正3年（1506年）、松本市平瀬の養老坂上から梶海渡に移り、成相新田の宿場建設に伴い慶長16年（1611年）に現在地へ移転したという。開山は知恩院の承蓮社傳音上人で、開基は、武田氏と抗戦した平瀬氏に支え、吉野中村に居を構えていた丸山丹後守と言われている。

**梶海渡遺跡既出遺物** 1989年にI地区北側100mで沙利採取が行われ、その際、古代の遺物が若干出土している。175～177は灰釉陶器碗で、175には弱い輪花が施されている。178は灰釉陶器皿、179は灰釉陶器瓶、180は黒色土器の鉢あるいは大形の碗である。181・182は土師器の壺であるが、181は中世まで下る可能性がある。183～186は土師器の腰で、小形のものにはロクロで、大形のものには胴部外面にハケ目、口縁部内面にカキ目で調整を施している。

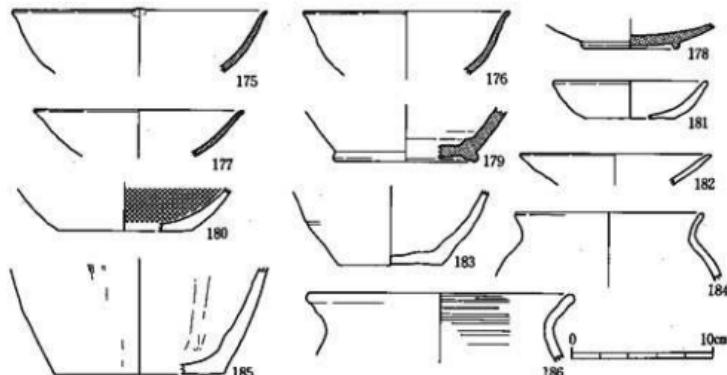
参考文献 「豊科町誌」（1955年）

「南安曇郡誌」第二巻上（1968年）

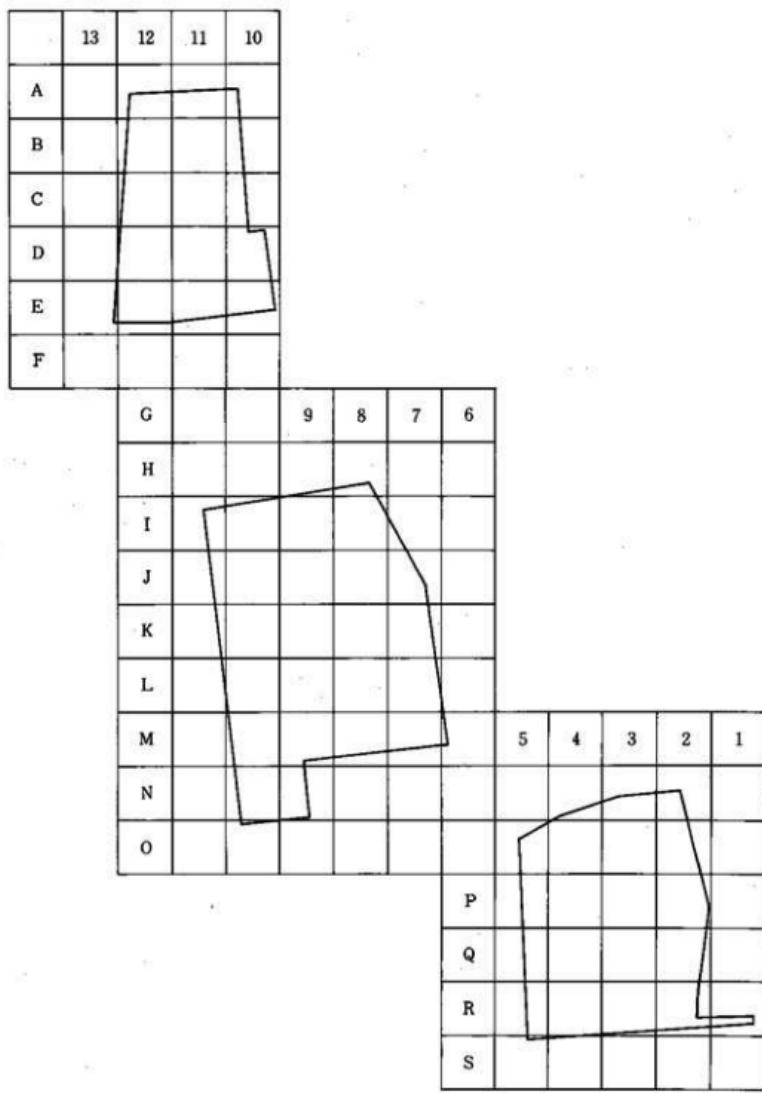
長野県教育委員会「上手木戸遺跡」（「中央自動車道長野線埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書10—豊科町内一」、1989年）

豊科町教育委員会「豊科町の土地に刻まれた歴史」（1991年）

豊科町教育委員会「吉野町梶海渡跡」（1992年）



插図4 梶海渡遺跡既出遺物実測図



擇図 5 造構位置区画図

## 第3章 調査の結果

### 第1節 調査の概要

調査は試掘調査の結果と工事の切り盛りを勘案し、I～IIIの調査区を設けて実施した。調査面積は4,500 m<sup>2</sup>である。遺構では平安時代の竪穴住居址をはじめ、多くの土坑・柱穴が検出された。これらは遺物からみると概ね9世紀代・16～17世紀前葉に位置づけられそうである。その分布は、I地区では中央の微高地を中心、II地区では南東から北西に統く低地を除いてほぼ全面に分布している。一方、III地区では希薄であった。

平安時代の竪穴住居址はI地区西端に1軒検出された。遺物には土師器・須恵器・黒色土器等がある。また、遺構外からではあるが綠釉陶器が出土している。これら古代の遺物はSD11・自然流路内にも多く含まれており、調査地周辺に住居址の存在が想定できる。

中世の遺構では、規模・平面形態ともさまざまな多数の土坑が検出された。その中では骨片が出土し、墓址ととらえられそうなものがあった。SK1・SK27等がそれである。しかし、他の多くは性格がはっきりしないものが多い。同様に柱穴も多く検出されたが、I地区の櫛列、II地区北側・南側を除いて建物等に組めたのは少ない。今後さらに検討する必要がある。遺物では在地産の土器・国内外の陶磁器・鐵貨等多く出土している。

また、この他に溝が多数検出された。これらは自然流路と密接な関係をもちながら遺跡内を縦横に走っており、本遺跡を特徴づける遺構と言える。

### 第2節 遺構

#### 1 竪穴住居址

平安時代に属する竪穴住居址を取り上げる。中世以降のもので、規模からその範疇に入ると考えられるものがあるが、それらは土坑の項で取り上げる。

**SB1** I地区西端P-5に位置する。西向きに緩やかな傾斜をもつ礫混じりの黄褐色土を掘り込んで構築されている。平面形は西壁が水路による擾乱で確認できなかったが、残存する辺が3.91mを測る方形で、主軸方向はN-89°-Eを指す。壁は斜めに掘り込まれ、床面は礫が混じるが概ね平坦であった。また、その南北側は自然流によって被水していた

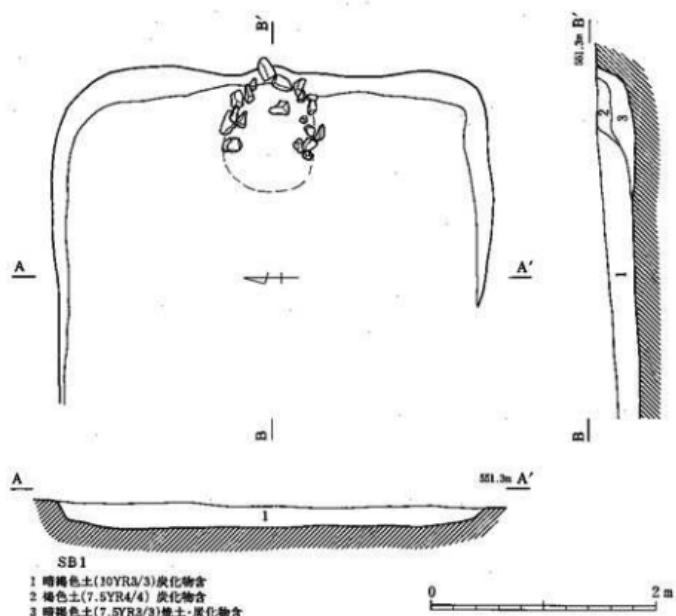


図6 SB1実測図

ことが窺えた。

カマドは東壁中央に設けられている。15~20cm大の比較的小形の礫を芯材に用いて構築されている。火床は薄く、焼土の散布も少なかった。貯蔵穴・柱穴等の施設は検出されなかった。

覆土は暗褐色土の単層でカマドの部位では焼土・炭化物が混じる。

遺物には須恵器壺・長頸壺・短頸壺・甕、黑色土器壺・壺・鉢、灰釉陶器皿・壺・瓶、土師器小形甕・甕・鍋がある。北東隅の灰釉陶器瓶(3)、西側の灰釉皿(1)、中央の壺底部(9)の他はカマド前からの出土である。特に須恵器大甕の胴部片がまとまって出土している。また、この他に南西側より鐵滓の出土がある。

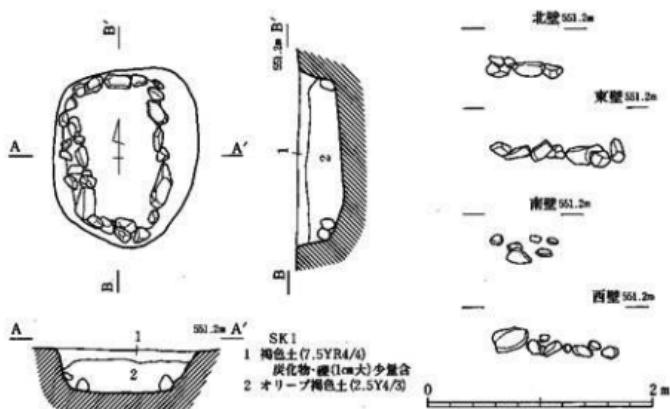
## 2 土坑・柱穴

あわせて312基検出された。平面形態・規模・出土遺物等さまざままで、調査終了後、基本的に規模の大きいものを土坑、小さく円形のものを柱穴として整理した。しかし、小さいものでも柱穴とは考え難いもの等があり、柱組みの問題や性格等を含めてさらに検討する必要がある。本項では土坑を取り上げ、柱穴については表により提示（付表）をする。

**SK1** I地区中央P-4に位置する。平面形は $1.55 \times 1.01\text{m}$ の隅丸長方形で、礫混じりの褐色土中にはば直に掘り込まれて構築されている。長軸方向はN-1°-Eを指している。底面はほぼ平坦で、その四隅には20-40cm大の礫を並べている。覆土は二層に分かれ、1層には炭化物を含み、2層はきめが細かくさらさらとした感じのものであった。2層中、底面より10-20cm程浮いた位置にまとまった骨片が確認できた。遺存状況が悪いが、その範囲はおおよそ南北100cm、東西60cmで、北側には頭蓋骨らしいものも確認できた。

遺物は1層中より黒色土器の小片が、また、中央床面近くからは漆の膜が出土している。黒色土器は流れ込みと考えられる。

本址は墓址と考えられよう。



插図7 SK1実測図

**SK 2** I 地区北西 0-4 に位置し、東に SK 3・4 が近接する。平面形は  $0.96 \times 0.95$  m の円形で、礫混じりの褐色土中に掘り込まれて構築されている。深さ 8 cm と浅い遺構で、底面は平坦である。覆土は暗灰黄色土の単層で全面に 3~5 cm 大の礫が含まれている。遺物の出土はなかった。

**SK 3** I 地区北西 0-4 に位置し、SK 2・4 に近接する。平面形は  $0.95 \times 0.75$  m の円形で、深さは 30 cm を測る。礫混じりの褐色土中に斜めに掘り込まれて構築されており、覆土は 5~10 cm 大の礫を多く含んだ灰黄褐色土の単層であった。遺物の出土はない。

**SK 4** I 地区北西 0-4 に位置し、西に SK 2・3 が近接する。平面形は  $0.97 \times 0.93$  m の円形で、浅いが壁は斜めにしっかりと掘り込まれている。底面はやや傾斜をもっている。覆土は暗オリーブ褐色土の単層で、10~20 cm 大の礫が南東側を中心に含まれている。

遺物には須恵器(軟質)坏、かわらけ(Ⅲ)、内耳土器、瀬戸美濃系の鉄粋塙がある。

**SK 5** I 地区西側中央 Q-4 に位置する。平面形は  $1.80 \times 1.02$  m の長方形を呈し、ほぼ垂直に掘り込まれている。遺構の大半を西側の自然流路の堆積土に覆われており、本址の覆土(にふい黄褐色土)は東側にわずかに残るだけである。底面、特に西側には自然流路に由来する礫がまとまって見られ、遺構が洗われていることが窺える。

遺物は黒色土器坏・土師器表・須恵器表が出土している。

**SK 6** I 地区西側中央 Q-4 に位置する。南北に並ぶ柵列の南端にあたり、平面形は  $0.69 \times 0.54$  m の楕円形を呈し、壁高は 5 cm と浅い。覆土は灰白色土の単層で柱穴のものとはやや異なる。礫が全面に含まれている。遺物の出土はなかった。

**SK 7** I 地区北側中央 0-3 に位置し SK 8 に近接する。平面形は  $0.65 \times 0.60$  m の円形で、壁はほぼ直に深く掘り込まれている。覆土は二層に分かれ、うち 2 層の黒褐色土は砂質であった。遺物の出土はない。

**SK 8** I 地区北側中央 0-3 に位置し、SK 7・9 に近接する。礫混じりの褐色土中に掘り込まれており、平面形は  $1.40 \times 1.10$  m の不整長方形、最大壁高は 10 cm と深い。壁はは

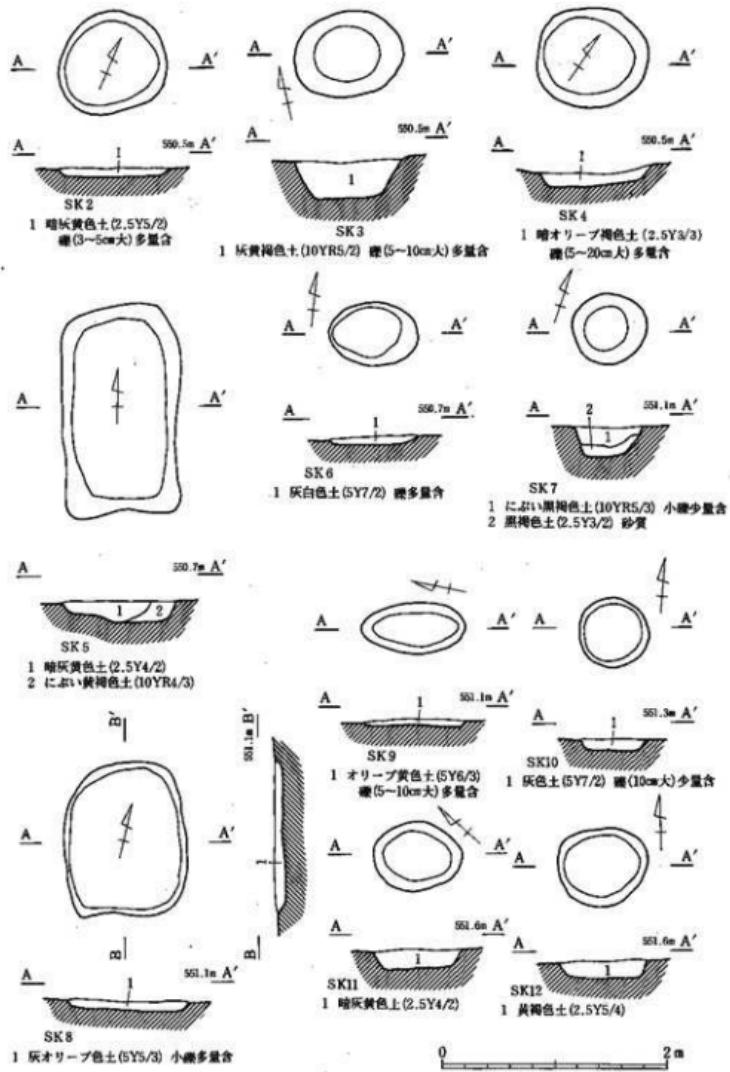
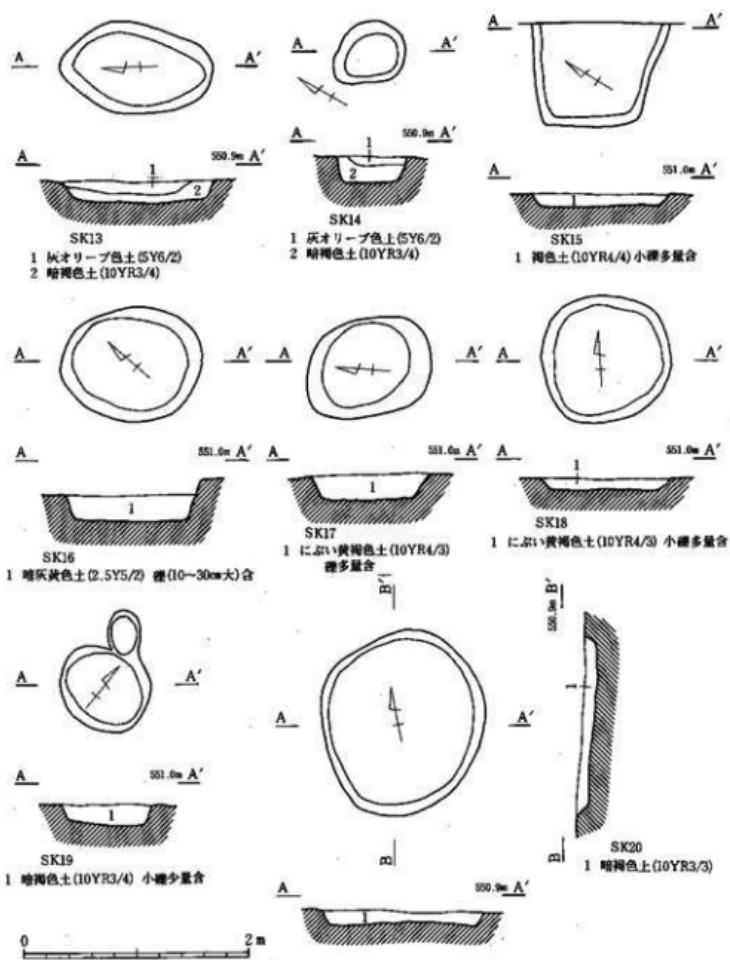


図8 SK 2~12実測図



擇図9 SK13~20実測図

は垂直で、底面は平坦である。覆土は灰オリーブ色土の単層で礫を全面に含んでいる。遺物の出土はなかった。

**SK9** I地区北側中央O-3に位置し、SK8に近接する。0.91×0.45mの楕円形を呈す、浅い造構である。底面は平坦、覆土はオリーブ黄色土の単層で5~10cm大の礫を含んでいる。遺物の出土はなかった。

**SK10** I地区北東隅N-2に位置し、SD4を切って構築されている。平面形は0.61×0.60mの円形で、浅い造構である。覆土は灰色土の単層で、10cm大の礫を少量含んでいる。

遺物には須恵器壺の小片がある。

**SK11** I地区の中ではやや高まった南側中央R-3に位置し、SK12に近接する。平面形は0.77×0.60mの楕円形で疎混じりの褐色土中に掘り込まれている。壁は斜めで、底面はほぼ平坦であった。遺物の出土はない。

**SK12** I地区南側中央R-3に位置し、SK11に近接する。平面形は0.80×0.70mの円形で、壁は斜めに掘り込まれている。最大壁高は15cmを測る。覆土は黄褐色土の単層であった。遺物の出土はない。

**SK13** II地区北東隅I-7に位置し、SK14・15に近接する。自然流路の堆積土を切って構築されており、平面形は1.35×0.85mの楕円形を呈す。壁はほぼ直に掘り込まれており、底面は平坦である。覆土は二層に分かれ、2層中に10cm大の礫が少量含まれている。

遺物には須恵器壺(軟質)・甕、黑色土器、灰陶陶器、磁器(染付)があるが、いずれも小片であった。

**SK14** II地区北東隅I-7に位置し、SK13・15に近接する。0.70×0.55mの不整円形を呈し、最大壁高は22cmを測る。壁はほぼ直に掘り込まれ、底面はほぼ平坦である。覆土は二層に分かれ、SK13同様、上層に灰オリーブ色土が載る。

遺物には黑色土器の小片がある。

**SK15** II地区北東隅I-7に位置し、SK13・14・22に近接する。東半が調査区外へ統くため平面形は明らかではないが、残存部は方形を呈すやや大形の遺構である。壁はほぼ直に掘り込まれているが、最大壁高は10cmと浅い。底面は平坦である。覆土は褐色土の単層で、全体に小礫を含み、しまりのないものであった。

遺物には須恵器壺(軟質)・長頸壺・甕、黒色土器、灰釉陶器壺・瓶、土師器甕がある。

**SK16** II地区北東J-8に位置し、SD11を切って構築されている。平面形は1.25×1.00mの橢円形を呈す。壁は直に掘り込まれ、底面はほぼ平坦である。覆土は暗灰黄色土の単層で、10~30cm大の礫を含んでいる。遺物の出土はなかった。

**SK17** II地区北東J-8に位置する。平面形は1.10×0.85mの円形を呈し、壁高は25cmを測る。壁は斜めに掘り込まれており、底面は平坦である。覆土はにぶい黄褐色土の単層で、礫を多量含んでいる。

遺物には須恵器壺(軟質)、灰釉陶器の小片がある。

**SK18** II地区北東側J-8に位置する。平面形は1.15×1.13mの円形を呈す浅い遺構である。礫混じりの褐色土中に、壁を斜めに掘り込んで構築されており、底面は平坦であった。覆土はにぶい黄褐色土の単層で、小礫を多量に含んでいる。遺物の出土はなかった。

**SK19** II地区北東側J-8に位置する。北側をP162に切られ、SK16・20に近接する。平面形は0.80×0.70mの円形で、最大壁高は20cmを測る。壁はほぼ直に掘り込まれ、底面は平坦である。覆土は暗褐色土の単層で小礫が含まれている。遺物の出土はなかった。

**SK20** II地区北東側J-8に位置し、SK19・21に近接する。平面形は1.60×1.50mの円形で、最大壁高は14cmと浅い。壁はほぼ直に掘り込まれており、底面は北に向かってやや傾斜をもっている。覆土は暗褐色土の単層で、鉄分が全体に見られる。

遺物には黒色土器壺、須恵器甕、内耳土器がある。

**SK21** II地区東側J-7に位置する。平面形は2.35×1.30mのやや不整の隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-3°-Eを指す。壁はやや崩落しているところもあるが、ほぼ直に

掘り込まれており、最大壁高は30cmを測る。覆土は二層に分かれ、1層中には小礫が多量に含まれていた。また、2層中には炭化物が少量見られた。

遺物には須恵器壺(軟質)・甕、黒色土器鉢、灰釉陶器壺、かわらけ(皿)がある。また、銭貨(洪武通宝)も出土している。

**SK22** II地区東端J-7に位置する。東半が調査区外へ統くため平面形は明らかでないが、不整形をした大形の遺構である。壁高は15cmを測り、底面から壁にかけては斜めに立ち上がっている。覆土は粘質を帯びた灰オーリーブ色土の単層で、あるいは調査区外東側の堰を構築した際の攪乱かとも思われた。

遺物には須恵器甕、灰釉陶器、かわらけ(皿)、瀬戸美濃系の灰釉丸皿がある。

**SK23** II地区東端J-7に位置し、北にSK22が近接する。東半が調査区外へ統くため平面形は明らかでないが、短径が0.9mを測る長方形の遺構である。壁は直に掘り込まれており、底面は東に向かって緩やかに傾斜している。覆土はしまりのないぶい黄褐色土の単層で、小礫をやや多く含んでいる。

遺物には磁器の小片がある。

**SK24** II地区中央東寄りK-8に位置する。平面形は1.25×0.90mの格円形で、壁高は21cmを測る。壁は斜めに掘り込まれており、底面はやや傾斜をもっている。覆土は暗褐色土の単層で、その中央部上面を中心に10~20cm大の礫を多量に含んでいる。遺物の出土はなかった。

**SK25** II地区中央東側K-7にSD11を切って構築されている。平面形は1.28×1.15mの円形で、垂直に掘り込まれた壁の高さは46cmを測る。底面には大形の礫が見られ、やや凹凸がある。覆土は三層に分かれる。全体的にしまりのない層で、3層中には炭化物も少量含まれていた。また、中央の3層中位から下位にかけて骨片も出土している。

遺物には灰釉陶器、土師器甕、かわらけ(皿)、瀬戸美濃系灰釉菊皿と銭貨5枚がある。灰釉陶器は1層中からの出土、銭貨のうち、判読できた元祐通宝を含む3枚が2層中、2枚は底面からの出土であった。

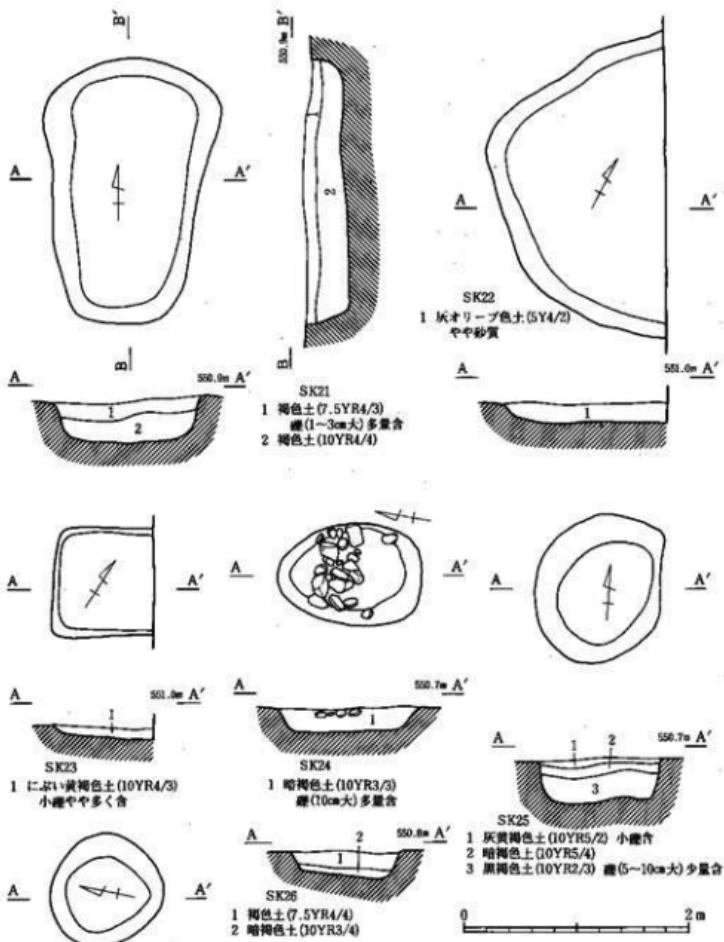


図10 SK21~26実測図

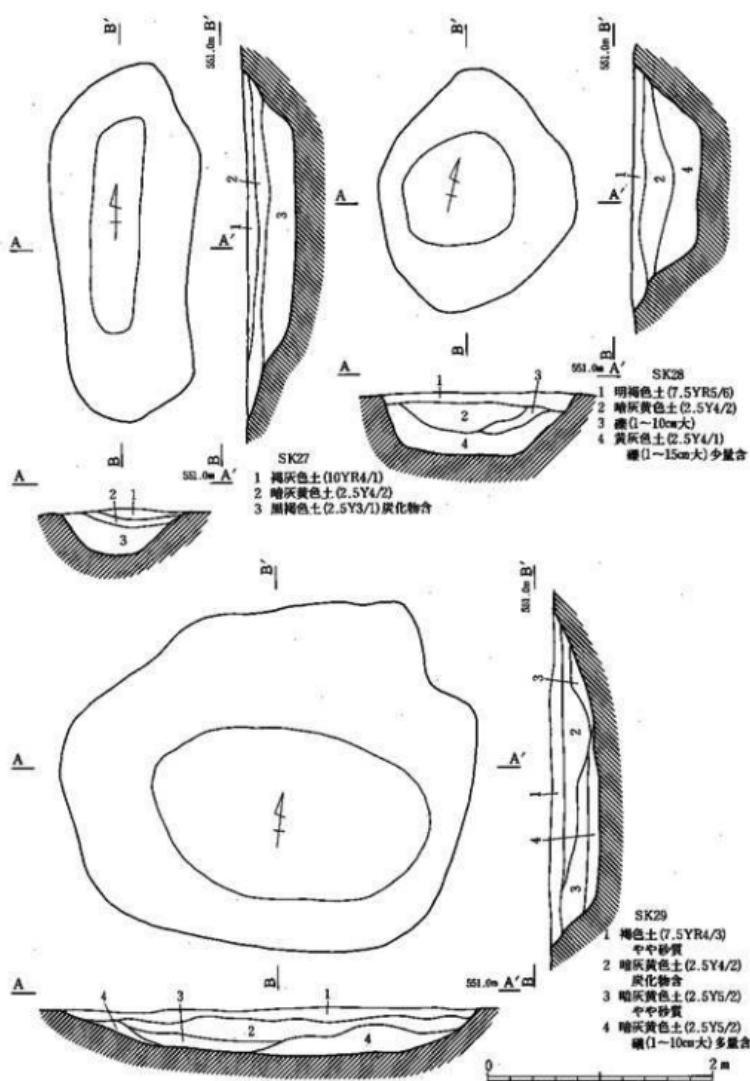


插圖11 SK27~29測測圖

**SK26** II地区東端中央 K-7に位置し、周囲に柱穴群が近接する。平面形は $1.02 \times 0.95$ mの円形で、壁はやや崩落しているが、ほぼ直に掘り込まれている。底面にはやや凹凸がある。覆土は二層に分かれる。1層中に20cm大のものがわずかに見られたが、礫はほとんど含まれない。

遺物にはかわらけ（皿）と瀬戸美濃系の灰釉丸皿がある。

**SK27** II地区中央やや東側 K-8に位置する。平面形は $3.20 \times 1.25$ mの長楕円形で、主軸方向はN-2°-Wを指す。壁は、東西が斜めに掘り込まれ断面三角形を呈し、南北は底面から緩やかに立ち上がっている。底面は北側が深く、弱く傾斜している。覆土は三層に分かれる。このうち、3層中に炭化物と骨を含んでいる。

遺物は1層から須恵器甕、灰釉陶器、黒色土器环、3層中からかわらけ（皿）、内耳土器、銅製水滴、錢貨（政和通宝）、漆膜が出土している。このうち、銅製水滴は北東壁際に逆位で出土し、その下には稻穀、周囲には漆膜が見られた。また、北側底面には漆膜が楕状に残っていた。

**SK28** II地区中央東側 K-8に位置する。平面形は $2.20 \times 1.72$ mのやや不整の楕円形を呈す。壁は特に南北で崩落しているがほぼ直に掘り込まれたものと考えられ、もともとは円形の遺構であろう。底面はほぼ平坦で、最大壁高は56cmを測る。覆土は四層に分かれる。うち、3層は1~10cm大の礫で隙間ができるほど入り込んでいた。

遺物には須恵器环・甕、黒色土器环・塊、灰釉陶器塊、瀬戸美濃系の灰釉小片がある。また、この他に錢貨が西側底面から出土している。

**SK29** II地区中央東側 K-7に位置する。平面形は $3.70 \times 3.00$ mの不整形を呈す大形の遺構である。壁は崩落が著しいが斜めに掘り込まれていたと考えられ、もともとは楕円形の遺構でSD11との切り合い関係もなかったものと考えられる。底面は緩やかな傾斜をもっているがほぼ平坦である。覆土は四層に分かれる。2層に炭化物を含むものの1・3は砂質の層でSD11との関連も窺える。

遺物には須恵器环（軟質）・甕、土師器甕、灰釉陶器、黒色土器、かわらけ（皿）、内耳土器、土師質の擂鉢、瀬戸美濃系の灰釉皿・鐵釉塊、磁器小片がある。この他に、北西隅1層中より銅製品、南側1層中より錢貨（洪武通宝）、また、漆膜も出土している。

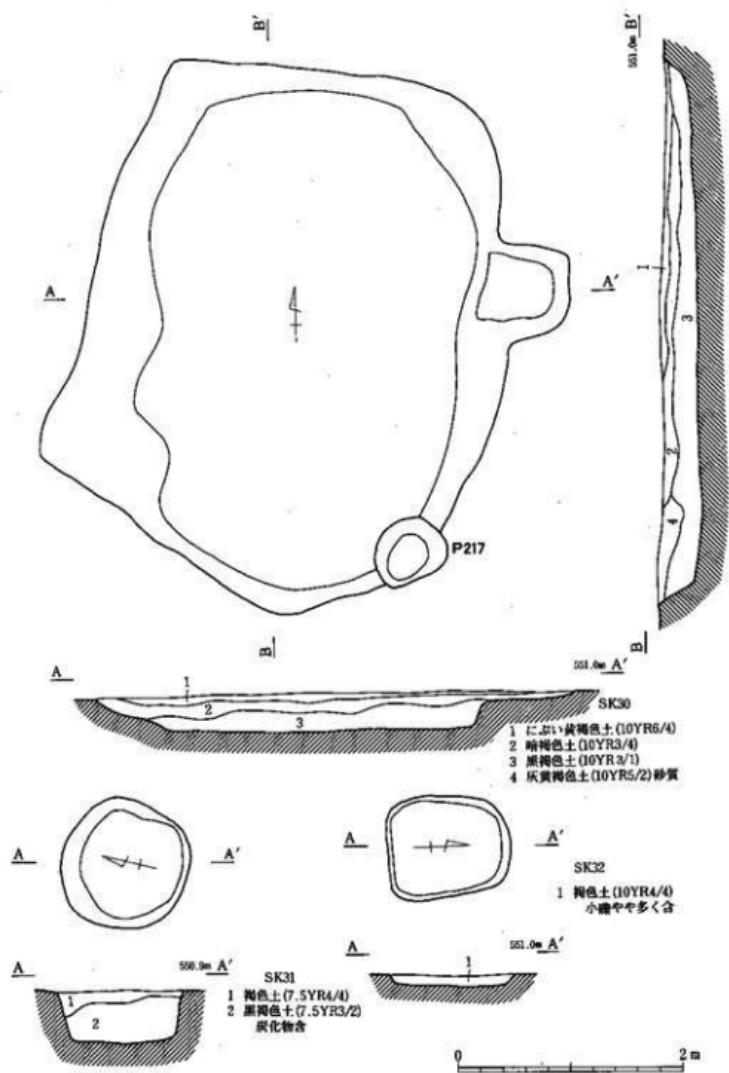


插圖12 SK30~32測測圖

SK30 II地区南東側 L-7に位置し、SD11を切って構築し、南東隅でP217に切られている。平面形は東壁側中央に突出部を有する不整形で、規模は4.90×3.80mを測る。壁は南側ではほぼ直に残っており、もともとは隅丸長方形の遺構の壁が崩落し不整形になったと理解できる。底面はほぼ平坦であった。覆土は四層に分かれ。上位に礫が多く、また、4層は砂質であった。

遺物には須恵器壺(軟質)・甕、黒色土器壺・塊、灰釉陶器塊・瓶、内耳土器、かわらけ(皿)、磁器(青花磁)・フイゴ片・錢貨がある。いずれも小片であった。

SK31 II地区中央南東側 L-8に位置する。平面形は1.10×1.08mの円形を呈し、壁高は46cmを測る。底面は中央がやや窪むが平坦で、壁は垂直である。覆土は二層に分かれ、2層中に炭化物が多く含まれていた。

遺物には須恵器壺(軟質)・壺、灰釉陶器皿・塊、黒色土器とかわらけ(皿)の小片がある。また、漆膜も出土している。

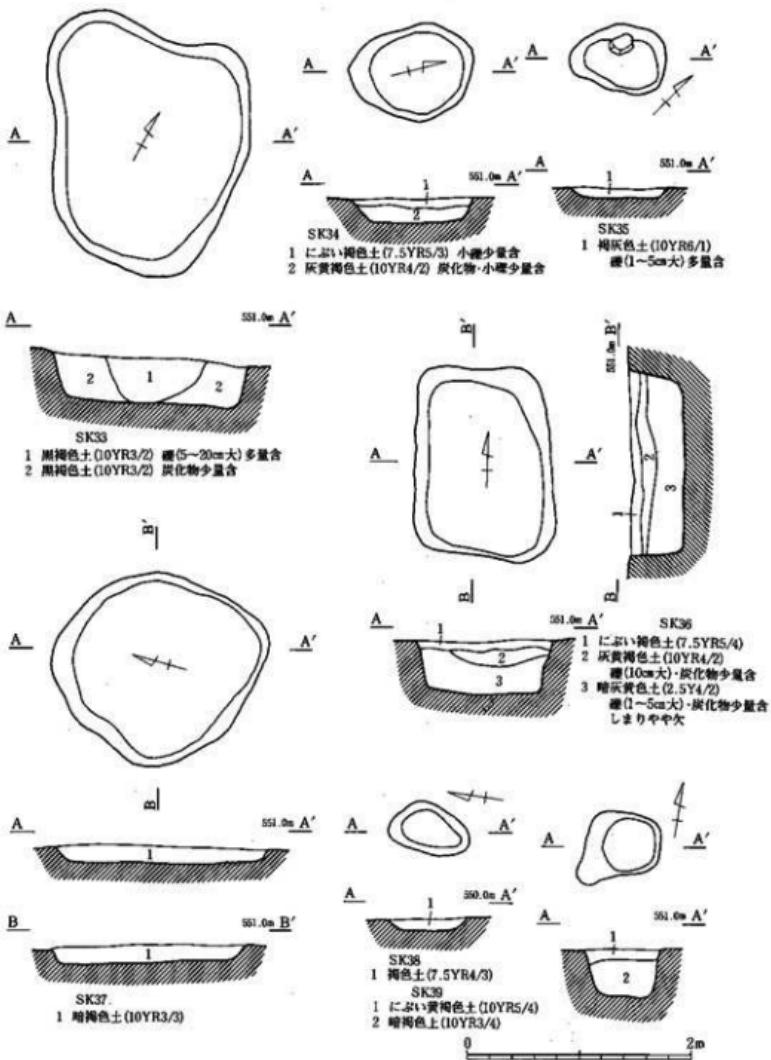
SK32 II地区南東側 L-8に位置し、平面形は1.10×0.87mの隅丸長方形を呈す。浅い遺構で、平坦な底面から壁が斜めに立ち上がっている。覆土は褐色土の単層で全体に礫が含まれている。

遺物には内耳土器がある。

SK33 II地区南東 L-7に位置し、SD11を切って構築している。平面形は2.25×1.75mの不整形を呈し、深さは40cmを測る。壁はほぼ直に掘り込まれており、底面は平坦であった。覆土は二層に分かれ、1層中には20~30cm大の礫が多量に含まれていた。また、2層中には炭化物が多く見られた。

遺物にはかわらけ(皿)と錢貨21枚がある。錢貨は東側1層中位からまとまって出土したもので、繩紐状のものがみられることから結ばれていたことが窺われる。最も新しいものは後柏原天皇1577年に初鋳造された天正通宝である。

SK34 II地区南東 L-7に位置する。平面形は1.10×0.85mの椭円形を呈す。壁は南側が斜めになっているが、他はほぼ直に掘り込まれている。底面は南側が深く緩やかな傾斜をもっている。覆土中には小礫が少量含まれ、また、2層中には炭化物も認められた。



擇図13 SK33~39実測図

遺物は灰釉陶器・磁器の小片とかわらけ(皿)がある。かわらけ(34)は2層上位からの出土である。

**SK35** II地区南東の東壁際L-7に位置する。平面形は0.84×0.60mの楕円形で、深さは10cmほどの浅い遺構である。壁は斜めに掘り込んでおり、底面は平坦である。覆土は褐灰色土の単層で、小礫が多く含まれていた。遺物の出土はない。

**SK36** II地区南東の東壁際L-7に位置する。礫混ヒリの褐色土中に掘り込まれており、平面形は1.68×1.23mの南北に長い隅丸長方形を呈す。壁は直に掘り込まれており、最大壁高は45cmを測る。底面はほぼ平坦である。覆土は三層に分かれれる。うち、2・3層中に小礫と炭化物を含んでいる。また、3層はしまりのない土であった。

遺物には須恵器壺・甕、黒色土器塊、灰釉陶器、かわらけ(皿)、内耳土器と磁器の小片がある。また、北西側底面近くから漆膜・骨片が出土している。須恵器壺・甕、黒色土器塊、灰釉陶器は流れ込みであろう。

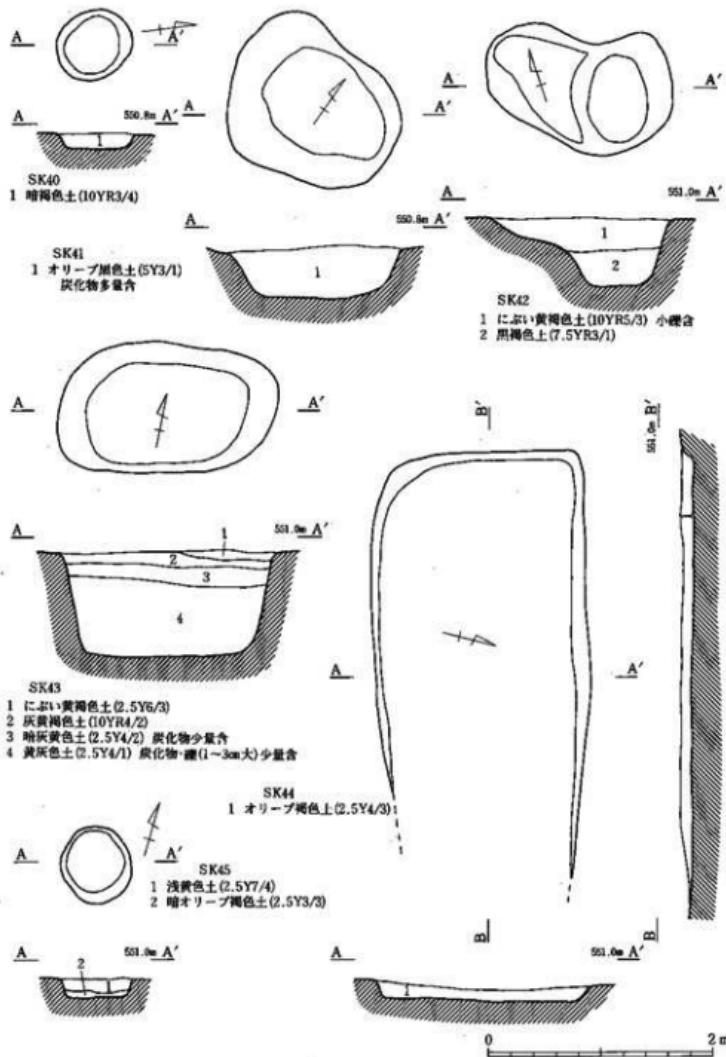
**SK37** II地区南東L-7に位置し、平面形は1.85×1.70mの不整形を呈す。底面はほぼ平坦で、壁はほぼ直に掘り込まれている。覆土は暗褐色土の単層で炭化物を少量含んでいる。

遺物は須恵器壺(軟質)・壺・甕、黒色土器環が出土している。

**SK38** II地区南東L-7に位置し、SK37・39に近接する。平面形は0.74×0.45mの不整形で、残存する深さは10cmと浅い遺構である。壁は斜めで、底面はほぼ平坦である。覆土は褐色土の単層で鉄分が沈殿している。遺物の出土はなかった。

**SK39** II地区南東L-7に位置し、SK37・38に近接する。南西側の壁が崩落し0.70×0.55mの不整形となっているが、もとは隅丸方形であったと考えられる。底面は平坦で、20~30cm大の礫が載っている。また、壁はほぼ直に掘り込まれ、壁高は42cmを測る。覆土は二層に分かれ、炭化物が少量含まれる。

遺物には灰釉陶器塊がある。



摺図14 SK40～45実測図

**SK40** II地区南東側 L-8 に位置し、平面形は $0.67 \times 0.60$ m の円形を呈す。底面は平坦で、壁はほぼ直に掘り込まれている。壁高は12cmを測る。覆土は暗褐色土の単層で10cm 大の礫を少量含んでいる。遺物の出土はなかった。

**SK41** II地区南東隅 M-7 に位置し、SD11を切って構築されている。平面形は $1.62 \times 1.20$ m の不整楕円形で、深さは54cmを測る。壁は直に近く掘り込まれており、底面は中央に向かって緩く傾斜している。覆土中には炭化物が多量に含まれていた。

遺物には須恵器壺・甕、黒色土器壺、灰釉陶器段皿・塊・瓶、かわらけ(皿)、瀬戸美濃系の灰釉丸皿等がある。覆土上位から下位にかけて偏りなく出土している。このうち、45 の瀬戸美濃系灰釉丸皿の下には漆膜がついて出土している。

**SK42** II地区南東隅 M-7 に位置し、SD11を切って構築されている。平面形は $1.70 \times 0.90$ m の不整形で、深さは56cmある。壁は崩落している部分もあるが、東側ではほぼ直に、西側では斜めに立ち上がっている。覆土は二層に分かれ、うち、1層には小蝶が含まれていた。本址は一つの土坑として取り上げたが、覆土・平面形態から二つの造構の切り合いによるものとも考えられる。

遺物は2層から須恵器壺(軟質)、灰釉陶器、瀬戸美濃系の灰釉丸皿、磁器小片が出土している。

**SK43** II地区南東隅 M-7 に位置し、平面形は $1.90 \times 1.15$ m のやや不整の隅丸長方形を呈す。壁は直に掘り込まれ、底面は平坦であった。深さは85cmを測る。覆土は四層に分かれ、うち、3・4層には炭化物が含まれていた。

遺物には須恵器壺(軟質)・甕、黒色土器塊、内耳土器、かわらけ(皿)、古瀬戸の瓶子、瀬戸美濃系灰釉丸皿、磁器小片と錢貨・硯がある。錢貨・硯はいずれも4層上位からの出土であった。また、底面近くからは漆膜が出土している。

**SK44** II地区南東隅 M-7 に位置し、P226・227に切られる。平面形は東側が不明確だが、およそ $4.50 \times 1.85$ m の長方形を呈す。壁はほぼ直で、底面は礫混じりだが平坦であった。覆土はオリーブ褐色土の単層である。

遺物には須恵器壺(軟質)、黒色土器、かわらけ(皿)がある。

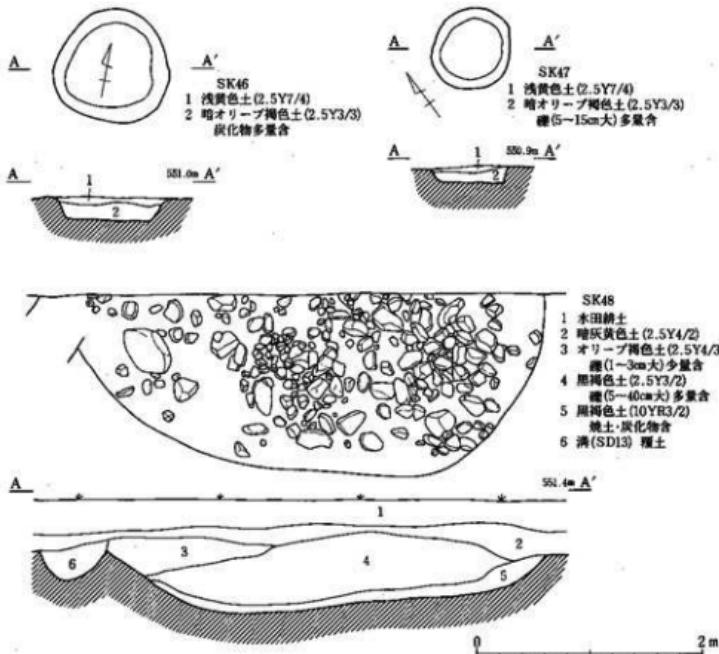


図15 SK46~48実測図

**SK45** II地区南側中央 M-8に位置し、SK46・47に近接する。平面形は $0.78 \times 0.58$ mの橢円形で、深さは15cmと浅い。壁は直に掘り込まれ、底面は平坦であった。覆土は二層に分かれる。遺物の出土はなかった。

**SK46** II地区南側中央 M-8に位置し、SK45・47に近接する。平面形は $1.00 \times 0.98$ mの円形を呈す。壁は斜めに掘り込まれており、底面は平坦であった。覆土は二層に分かれ、うち、2層中には炭化物が多量に含まれていた。

遺物には須恵器壺(軟質)、黒色土器、灰陶器、かわらけ(皿)があるが、いずれも小片であった。

**SK47** II地区南側中央 M-8に位置し、SK45・46と並ぶ。平面形は $0.75 \times 0.70$ mの円形を呈す。壁は直に掘り込まれ、底面は平坦である。覆土下層には5~15cm大の礫が多量に含まれていた。

遺物にはかわらけ（皿）がある。

**SK48** II地区北端 H-9に位置し、北半が調査区外へ続く。円形を呈する大形の遺構で、底面から壁はゆるやかに立ち上がっている。覆土は最下層に焼土・炭化物を含んだ黒褐色土があり、その上に5~40cm大の礫が間隙のないほど多量に載る。礫には被熱した様子が認められないので、遺構を埋めるために用いられたとも考えられる。そして、その礫はII地区東西にそれぞれある自然流路を結ぶSD13との関連が考えられよう。

遺物は礫中より須恵器甕、灰釉陶器、東海系の無釉捏鉢が出土している。

**SK49** II地区北側中央 I-9に位置する。平面形は $1.00 \times 0.55$ mの楕円形を呈す。壁は斜めに掘り込まれ、底面は基盤の礫が顔を出しやや傾斜をもっている。覆土は褐色土の単層で、小礫を含んでいる。遺物の出土はなかった。

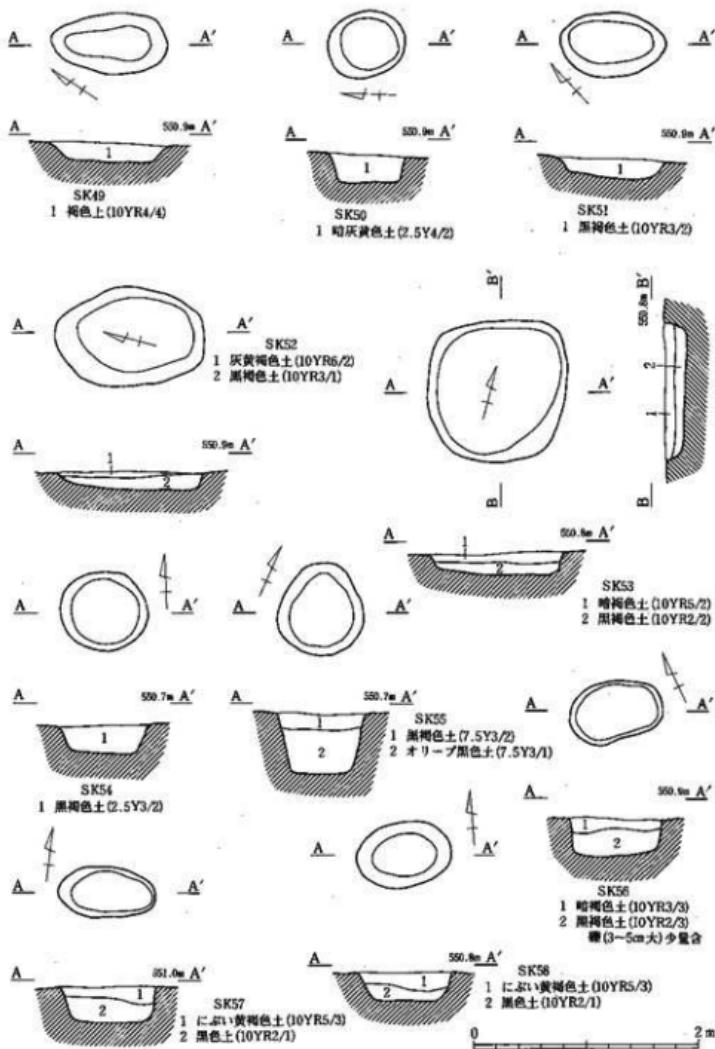
**SK50** II地区中央北寄り J-8に位置し、SK52・SD15に近接する。平面形は $0.70 \times 0.58$ mの楕円形で、ほぼ直に掘り込まれた壁高は25cmを測る。底面はほぼ平坦である。覆土は暗灰黄色土の単層で遺物の出土はない。

**SK51** II地区北側中央 J-9に位置し、平面形は $0.90 \times 0.55$ mの楕円形を呈す。壁はほぼ直に掘り込まれており、底面は東側が深く緩やかな傾斜となっている。覆土は黒褐色土の単層であった。遺物の出土はない。

**SK52** II地区中央やや北側J-8に位置する。平面形は $1.33 \times 0.90$ mの楕円形を呈し、深さは15cmを測る。南側が深く底面は傾斜をもっており、壁は南側が直に、北側は底面から緩やかに立ち上がっている。覆土は二層に分かれる。

遺物には須恵器甕、かわらけ（皿）がある。

**SK53** II地区中央やや北側 J-9に位置し、西側を自然流路が覆う。平面形は $1.22 \times$



插図16 SK49~58実測図

1.20mの隅丸方形を呈す。底面は概ね平坦で、壁は西側でやや斜めだが、他は直に掘り込まれている。覆土は二層に分かれる。遺物の出土はなかった。

**SK54** II地区中央やや南側 L-9に位置し、自然流路の堆積土の下に検出された。平面形は $0.77 \times 0.70$ mの円形で、深さは25cmを測る。底面は東側がやや深いもののはば平坦で、壁は直に掘り込まれている。覆土は黒褐色土の単層で、遺物の出土はなかった。

**SK55** II地区南側中央 M-9に位置する。自然流路に挟まれた微高地で、SK56・57・58・59が近接する。平面形は $0.85 \times 0.75$ mの円形で、壁が直に深く掘り込まれている。底面は平坦であった。覆土は二層に分かれる。遺物の出土はなかった。

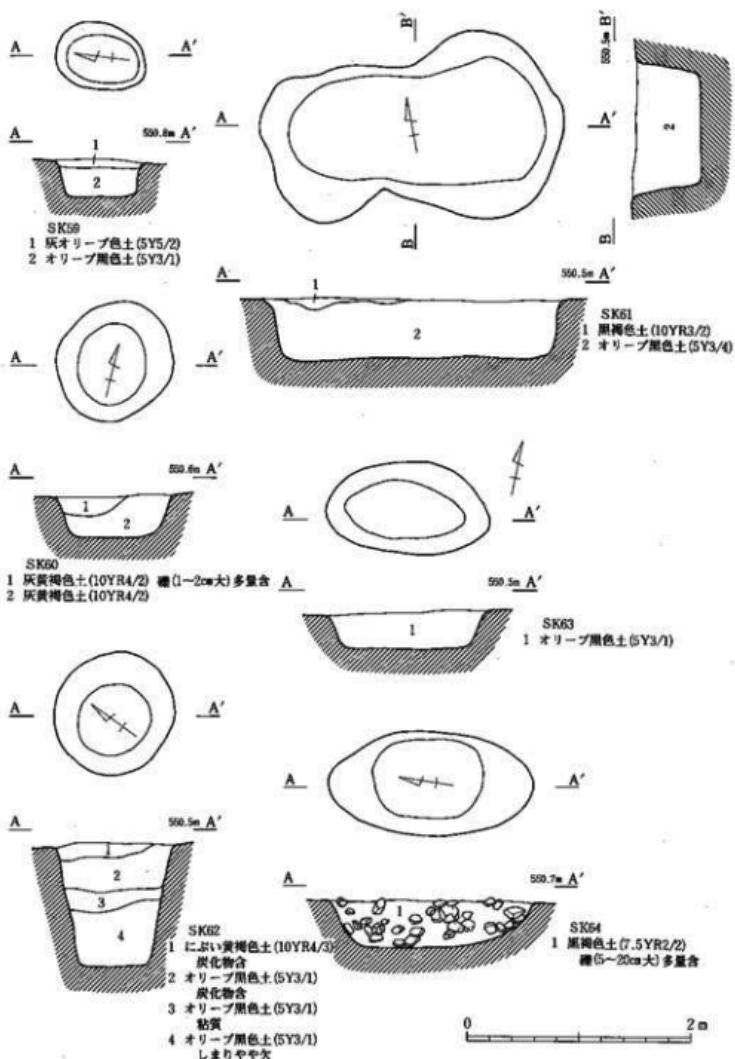
**SK56** II地区南側中央 L-9に位置する。自然流路に挟まれた微高地で、SK55・57・58・59が近接する。平面形は $0.80 \times 0.50$ mの楕円形を呈す。壁が直に掘り込まれており、底面は平坦であった。覆土は二層に分かれ、うち、2層に小礫が少量含まれていた。遺物の出土はなかった。

**SK57** II地区南側中央 L-9に位置する。自然流路に挟まれた微高地で、SK55・56・58・59が近接する。平面形は $0.89 \times 0.45$ mの楕円形を呈す。西側でやや崩落しているものの壁は直に掘り込まれており、底面は平坦であった。覆土は二層に分かれる。  
遺物には須恵器甕、黒色土器があった。

**SK58** II地区南側中央 M-8に位置する。自然流路に挟まれた微高地で、SK55・56・57・59が近接する。平面形は $0.85 \times 0.58$ mの楕円形を呈す。壁ははば直に掘り込まれており、底面は平坦であった。覆土はSK57と共通するものであった。遺物の出土はなかった。

**SK59** II地区南側中央 M-9に位置する。自然流路に挟まれた微高地で、SK55・56・57・58が近接する。平面形は $0.79 \times 0.55$ mの楕円形を呈し、壁は直に掘り込まれている。底面は平坦であった。覆土は近接する四つとは様相が異なる。遺物の出土はなかった。

**SK60** II地区中央南西側 L-9に位置し、自然流路の堆積土の下に検出された。平面



插図17 SK59~64実測図

形は $1.10 \times 1.05$ mの円形を呈し、壁は直に掘り込まれている。底面は平坦であった。覆土は二層に分かれる。うち、1層中には自然流路に由来すると考えられる小礫が多量含まれていた。

遺物には須恵器壺(軟質)・甕、灰釉陶器塊、かわらけ(皿)、内耳土器、瀬戸美濃系灰釉丸皿がある。

**SK61** II地区中央南西寄り L-10に位置し、自然流路の堆積土の下に検出された。壁の崩落により、平面形は $2.60 \times 1.25$ mの不整形を呈す。もともとは楕円形の遺構であったと考えられよう。壁は直に深く掘り込まれ、底面は平坦であった。覆土はオリーブ黒色土で、上位に黒褐色土がわずかに載る。

遺物は黒色土器、灰釉陶器蓋、細蓮弁文を施す青磁碗、かわらけ(皿)、内耳土器、瀬戸美濃系灰釉丸皿・鉄釉塊とフイゴ片が出土している。

**SK62** II地区南西側 M-10に位置し、自然流路の堆積土の下に検出された。平面形は $1.10 \times 1.04$ mの円形を呈す。壁は斜めに深く掘り込まれ、底面は平坦であった。覆土は四層に分かれる。1・2・4層に炭化物を少量含んでいる。また、3層は粘質のものであった。

遺物には須恵器壺(軟質)、かわらけ(皿)、内耳土器があるが、いずれも小片であった。また、鉄滓の出土がある。

**SK63** II地区南西側 L-10に位置し、自然流路の堆積土の下に検出された。平面形は $1.45 \times 0.81$ mの楕円形を呈す。壁は直に掘り込まれ、深さ30cmを測る。底面は平坦であった。覆土はオリーブ黒色土の単層で炭化物を少量含んでいた。

遺物には灰釉陶器塊、かわらけ(皿)、内耳土器、土師質擂鉢と鉄滓がある。

**SK64** II地区南西 L-10に位置し、自然流路の堆積土の下に検出された。平面形は $1.85 \times 0.91$ mの楕円形を呈す。壁は南北が斜めに、東西が直に掘り込まれている。底面は概ね平坦であった。覆土は黒褐色土の単層で5~20cm大の礫を多量に含んでいる。

遺物には須恵器甕と内耳土器、かわらけ(皿)がある。

**SK65** II地区南西端 L-10に位置する。西半が調査区外へ続くため全容は明らかでな

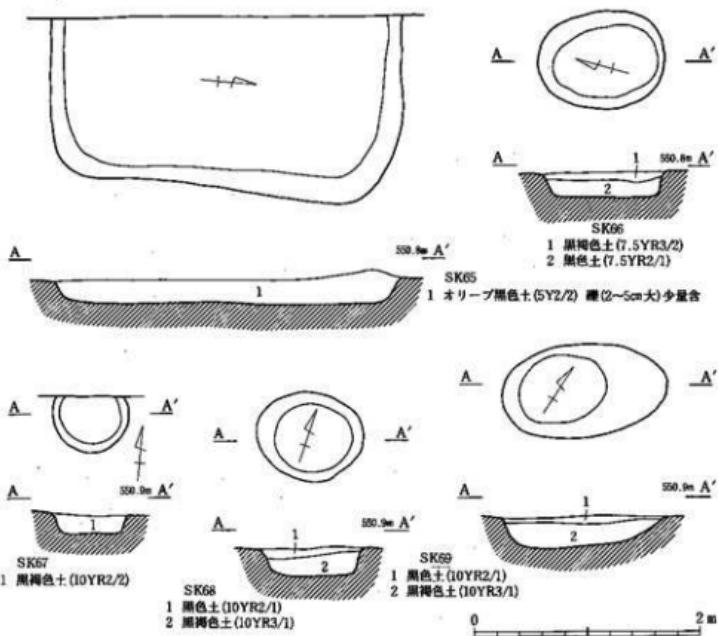


図18 SK65~69実測図

いが、残存する辺が2.48mを測る大形で方形の造構である。壁は斜めに掘り込まれており、底面は南側がやや高いが概ね平坦であった。覆土はオリーブ黒色土の単層で小砾を少量含んでいる。

遺物は灰釉陶器と内耳土器があるが、いずれも小片であった。

**SK66** II地区南西端 L-10に位置し、平面形は $1.11 \times 0.85$ mの橢円形を呈す。壁は斜めに掘り込まれ、底面は概ね平坦である。覆土は二層に分かれ、うち、2層中に砾を少量含んでいる。遺物の出土はない。

**SK67** II地区北西端 I-10に位置し、SK68・69・柱穴群に近接する。北半が調査区外へ続くが、径0.65mの円形を呈すものであろう。壁は斜めにしっかりと掘り込まれ、底面は平坦であった。覆土は黒褐色土の単層で遺物の出土はなかった。

**SK68** II地区北西端 I-10に位置し、SK67・69・柱穴群に近接する。平面形は0.95×0.80mの円形を呈す。壁は西側で斜めになっているが、他は直に掘り込まれている。底面は平坦であった。覆土は二層に分かれる。遺物の出土はなかった。

**SK69** II地区北西端 I-10に位置し、SK67・68・柱穴群に近接する。平面形は1.45×0.72mの楕円形を呈す。壁は崩落のためか西側で斜めになっているが、他はほぼ直に掘り込まれている。底面は平坦であった。遺物の出土はなかった。

**SK70** II地区北西隅 I-10に位置し、柱穴群に近接する。平面形は0.79×0.72mの円形で最大壁高は20cmを測る。壁は斜めに掘り込まれ、底面は平坦であった。覆土は黒褐色土の単層で、遺物の出土はなかった。

**SK71** III地区中央東側 C-11に位置する。平面形は2.81×1.70mのやや不整の長方形で、残存する壁高は5cm前後と非常に浅い。底面はほぼ平坦で壁は斜めに立ち上がっている。覆土はやや粘質の暗褐色土の単層で、遺物の出土はなかった。

人为的な遺構でなく、方形の浅い窪みに暗褐色土が堆積したものと考えられる。

**SK72** III地区中央やや東側 C-11に位置する。平面形は1.87×0.85mの長方形で、残存する壁高は5cm前後と非常に浅い。底面はほぼ平坦で壁は斜めに立ち上がっている。覆土は灰黄褐色土の単層で礫を多量に含んでいる。遺物の出土はなかった。

本址も人为的な遺構でなく、方形の浅い窪みに灰黄褐色土が堆積したものと考えられよう。

**SK73** III地区北側中央 B-11に位置し、礫が多量に混じる褐色土中に掘り込まれて構築されている。平面形は1.16×0.80mの楕円形を呈す。壁はほぼ直に掘り込まれ、底面にはやや凹凸がある。覆土は暗灰褐色土の単層で礫を少量含んでいる。遺物の出土はない。

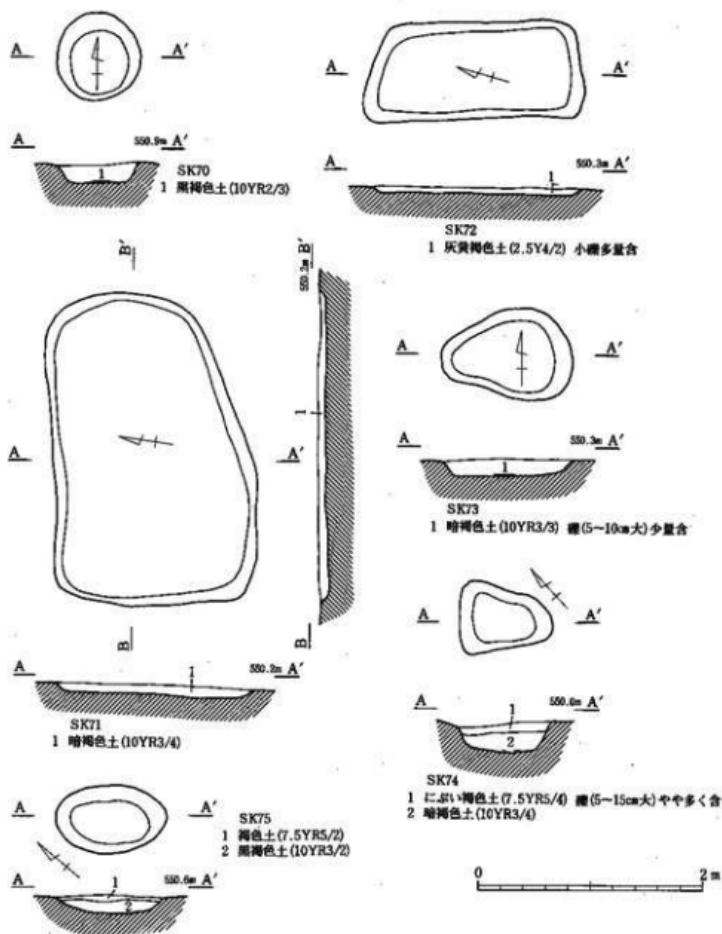


図19 SK70~75実測図

**SK74** III地区南西側 D-12に位置する。平面形は $0.80 \times 0.60\text{m}$ の不整橢円形を呈し、壁から底面にかけては緩やかに傾斜をもっている。覆土は二層に分かれ、うち1層中に礫が多量に含まれている。遺物の出土はなかった。

**SK75** III地区南西側 E-12に位置し、平面形は $1.00 \times 0.60\text{m}$ の橢円形を呈す。壁は斜めに掘り込まれ、底面はやや傾斜をもっている。覆土は二層に分かれる。遺物の出土はなかった。

### 3 溝

24本検出された。また、この他に南から北に向けて数条の自然流路が見られる。溝として取り上げた中には明確な掘り込みがなく帯状の低地に土砂が堆積したもの、明らかに後世の所産と考えられるものもあり、用途・流れの方向等を含め今後さらに検討が必要である。

**SD 1** I地区北西側に位置する。P29・30・43・44・45に切られ、南西側は自然流路とつながる。幅は20~25cmで断面形は台形、覆土は暗褐色(10YR3/4)からオリーブ黒色(5Y3/1)を呈し、礫が含まれていた。レベルからは自然流路より取水し、北西側に流下していたと考えられる。遺物の出土はなかった。

**SD 2** I地区中央西側に位置する。P32・33・34に切られ、南西側は自然流路とつながる。幅は20~25cmで断面は台形、覆土は黄褐色(7.5YR3/3)を呈す。レベルは自然流路側がやや低くなっている。遺物の出土はなかった。

**SD 3** I地区東側に、SD4・5・6と並んで検出された。南から北へいくに従い幅が広くなり、途中からその東側が一段と深くなっている。幅は30~130cmで、覆土はにぶい黄褐色(10YR4/3)を呈している。

遺物には須恵器壺、土師器甕、灰釉陶器小片がある。

大きくカーブする自然流路から取水していたと考えられるが、溢水により形成されたとも考えられる。

**SD 4** I 地区東側に位置し、SK 10、P57・58に切られる。幅は40~90cmで、掘り込みははっきりとせず、壁がなだらかである。覆土は褐色(7.5YR4/3)から黄褐色(10YR6/5)を呈す。

遺物には黒色土器の小片と陶器甕がある。

SD3同様、自然流路から取水、または溢水により形成されたと考えられる。

**SD 5** I 地区東側に、SD3・4・6と並んで検出された。幅は10~25cmで、覆土はにぶい褐色(7.5YR5/3)から褐色(10YR4/4)であった。遺物の出土はなかった。自然流路から取水、または溢水により形成されたものと考えられる。

**SD 6** I 地区東側に、SD3・4・5と並んで検出された。幅は15~25cmで、覆土はにぶい黄褐色(10YR5/3)であった。遺物の出土はなかった。SD3・4・5同様、自然流路から取水、または溢水により形成されたものと考えられる。

**SD 7** I 地区中央に位置する。向きは東西、幅は20cmである。覆土はオリーブ褐色土(2.5Y4/3)で、小礫を少量含んでいる。遺物の出土はなかった。

**SD 8** I 地区中央や東側に位置する。遺存状況が悪く全容は不明であるが、幅15cmで南から北に向かっている。覆土はにぶい黄褐色(10YR5/3)で、遺物の出土はなかった。

**SD 9** I 地区中央南側に位置する。向きは東西、幅は20cmで、覆土は黄褐色土(2.5Y5/3)であった。遺物の出土はない。

**SD 10** I 地区中央南側を南から北に向けてある。微高地上に構築されており、幅は20cm、断面は台形であった。覆土はオリーブ褐色(2.5Y4/3)から黄褐色(2.5Y5/3)を呈し、小礫を少量含んでいる。遺物の出土はなかった。

**SD 11** II 地区東側を南から北に向けて蛇行し、自然流路につながる。幅は80~150cmで、SK 25・29・30・33・41・42等と切り合う。覆土は上層が黒褐色(10YR3/2)、下層が褐色(7.5YR4/4)から黄灰色(2.5Y4/1)を呈す。

遺物の出土量は多い。須恵器壺(軟質)・甕、黒色土器壺・皿・壺、灰陶陶器壺・瓶、土師器盤等、古代の土器が主体で、その他に白磁碗、染付(青花磁)、かわらけ(皿)、内耳土器、瀬戸美濃系灰釉丸皿がある。また、錢貨も出土している。下層は古代末～中世に、上層は近世になって自然流が堆積したものと考えられよう。

**SD12** II地区北西側に位置し、SD13から別れて北へ向かう。幅は30～40cmで、覆土はにぶい黄褐色土(10YR5/3)であった。遺物の出土はない。

**SD13** II地区北側に位置し、東西の自然流路を結ぶ。幅は35～60cmで断面は台形、覆土は暗褐色土(10YR3/4)であった。

遺物には須恵器壺、龍泉窯系青磁、かわらけ(皿)、内耳土器、瀬戸美濃系灰釉丸皿と磁器の小片がある。

**SD14** II地区中央北側に位置し、東西の自然流路を結ぶ。幅は20～25cmで断面は台形、覆土は褐色(7.5YR4/3)から暗褐色(10YR3/3)を呈す。西側の自然流路との境には窪で口を設け、また、向きを変えている。レベルはその部分がやや低くなっているものの、形状等から西から東へと流れがあったものと理解したい。

遺物には須恵器甕、黒色土器壺・壺、灰陶陶器瓶、内耳土器、瀬戸美濃系灰釉丸皿がある。

**SD15** II地区中央やや東側を南北にあり、東西の自然流路を結ぶ。幅は40～50cmで、北でいったん東に折れて自然流路とつながる。覆土は上層が灰黄褐色(10YR6/2)から浅黄色(2.5Y7/3)、下層が黒褐色(10YR3/1)を呈している。

遺物には黒色土器と灰陶陶器の小片がある。

**SD16** II地区南側を東西にあり、自然流路を結ぶ。長さ180cm幅15cmで、断面は台形であった。覆土は黒褐色(10YR3/2～2/2)を呈す。

遺物には灰釉陶器と龍泉窯系青磁・かわらけ(皿)の小片がある。

**SD17** III地区中央西側にあり SD18につながる。幅は35～60cmで、覆土は暗褐色(10Y

R3/4)から褐色(10YR4/4)を呈す。明確な掘り込みがなく、壁がだらだらしていることから帯状の低地に土砂が堆積したものとも考えられる。

遺物には灰釉陶器壺がある。

**SD18** III地区中央を南から北に向かってある。幅は130~200cmで、覆土は褐色(10YR4/4)から暗灰黄褐色(2.5Y4/2)を呈す。SD17同様、明確な掘り込みがなく、壁がだらだらしていることから帯状の低地に土砂が堆積したものとも考えられる。

遺物には須恵器壺、黒色土器壺・碗、かわらけ(皿)がある。

**SD19** III地区北西隅に位置し、自然流路とSD18を結ぶ。幅は30~70cmでSD18に近づくにつれて狭くなる。覆土は灰黄褐色(10YR4/2)で、遺物の出土はなかった。

**SD20** III地区中央を南から北へ向かう。途中で掘り込みが確認できなかったが、幅は30cm前後、断面は台形を呈している。覆土はにぶい黄褐色土(10YR4/3)で砾を少量含んでいた。

遺物には黒色土器壺がある。

**SD21** III地区東側を南から北へ向かう。幅はその中央では25cm前後で一定しているが、南北では広くなり、掘り込みもはっきりしない。覆土は水田耕土に近い暗灰黄色(5YR4/2)を呈し、後世の所産と考えられる。遺物の出土はなかった。

**SD22** III地区東側を南から北へ向かう。幅は30cm前後で、覆土はにぶい黄褐色土(10YR4/3)であった。遺物の出土はない。

**SD23** III地区南側を東から西へ向かう。幅は西側で40cm、東側で140cmを測る。覆土は灰黄褐色(10YR5/2)で、後世の所産と考えられる。

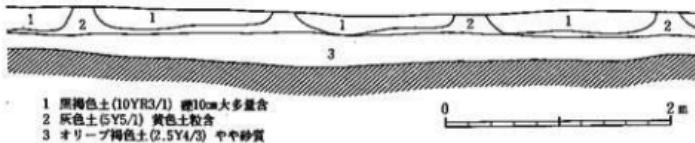
遺物には須恵器壺と瀬戸美濃系灰陶鉢・鉄釉鉢、磁器の小片がある。

**SD24** III地区東側に位置し、SD22につながる。幅は40cmで、覆土は黒褐色(10YR3/2)を呈す。遺物の出土はなかった。

#### 4 不明遺構

II地区西側 自然流路の堆積土の上に検出された。南北20mにわたって10cmの大礫を140cmの幅で等間隔に敷き詰めているものである(挿図)。近世以降のものと考えられるが、性格・時期とも明らかでない。その南端で礫の観察をする限り、構築された以後も自然流が押し寄せていたことが窺える。吉野町館跡遺跡の堀埋土中に見られたものと類似していることから、低湿地を利用する際の工夫と考えられよう。(註)

(註) 大町市教育委員会島田哲男氏より、1992年調査の大町市常盤須沼氏居館跡Ⅰでも同様の遺構が検出されていることをご教示いただいた。



挿図20 不明遺構断面図

### 第3節 遺 物

#### 1 土器・陶磁器

##### (1) 古代の土器

SB1・SD11と自然流路の堆積土内を中心に多量に出土している。概ね平安時代(9世紀代)に属するものである。

土器の種類には須恵器・土師器・黑色土器・灰釉陶器・綠釉陶器がある。

##### 須恵器

器形の種類には壺・長頸壺・短頸壺・甕等がある。

**壺** すべて無台のものである。灰白色～黄褐色を呈す軟質のもので、多くに黒斑が残る。口径は11.9～14.1cm、器高は3.4～4.1cmに分布する。定形化しており、口径13.3cm、器高3.5cmに集中する。

**長頸壺** 出土量は少なく、器形が窺えるものはSB1出土の9だけである。口頸部が強く外反し、肩部との接合は二段になっている。

**短頸壺** 出土量は非常に少なく、図示できたものはSB1出土の10だけである。10は大形の肩部が強く張っている。

**甕** 出土量は多いが、体部の破片がほとんどで図示できるものは非常に少ない。頸部には波状文を施すもの(93)と施さないものがある。SB1出土のものは、赤灰色の色調が特徴的な大形のものであった。また、当地方で一般的に「凸帯付四耳甕」と呼称される甕の破片もある。

##### 土師器

器形の種類には盤・甕・小形甕・鍋がある。

**盤** 出土量は少ない。68の1点が図示できるだけである。大形で体部が斜めに立ち上がり、口縁端部は下方へ小さく引き出している。

**甕** SB1出土のものは、長胴形で胴部外面にハケ目とカキ目で調整を施すものである。この他にもハケ目調整を施す破片が観察できるが、ヘラ削りを施す器壁が薄いものの出土はなかった。

**小形甕** ロクロを使用し、胴部外面をカキ目で調整する。甕同様、ヘラ削りを施す器壁

が薄いものの出土はなかった。

**鍋** 器形を窺えるのは1点のみ、SB1から出土した。体部が大きく外反し、口縁部がさらに「く」字状に弱く外反する。

#### 黒色土器

器形の種類には壺・塙・鉢がある。この他に皿と思われる破片もある。内面をヘラ磨き・黒色処理するもののみで、外面を黒色処理するものはなかった。

**壺** 体部は膨らみをもちながら立ち上がり底部内面に明瞭な境を作らないもので、底部外面には回転糸切り痕を残す。口径12.5cm、器高4cm前後のものと口径15cm以上の大形のものの2法量がある。89は銅鏡に近い形態をしている。

**塙** 壺に高台を付した形態で、法量は口径13.5cm前後を示している。

**鉢** 壺を大形にした形態をとり、口径は20cmをこえる。SB1出土の20は口縁端部を弱く外反させている。

#### 灰釉陶器

器形の種類には蓋・皿・塙・瓶がある。

**蓋** 1点のみSK61から出土した。輪状のつまみをもつもので、端部はまっすぐ下方へ折り返す。

**皿** 体部に段を持つものと持たないものとがある。法量には大小がある。輪花が施されるものもある。

**塙** 体部にわずかに丸味をもち直線的に開く形態で、台形あるいは三日月様の高台が付される。輪花が施されるものもある。

**瓶** 小瓶(3)、広口瓶と考えられるものの胴部下半(86)、図示できなかつたが平瓶の肩部の小片等がある。3は口頸部が欠損後、その部位を磨いてさらに利用している。

#### 擦釉陶器

SD11とI地区遺構外から小片が出土した。胎土は灰白色で、軟質のものと硬質のものとがある。釉は透明に近い淡黄緑色を呈す。

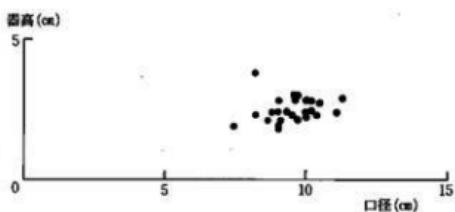
## (2) 中世以降の土器・陶磁器

土坑及び遺構外から多く出土している。(1)

土器にはかわらけ(皿)・内耳土器(鍋・はうろく)・擂鉢・土釜がある。いずれも在地産と考えられるものである。陶器には東海系の捏鉢が2個体あるが、主体を占めるのは瀬戸美濃系の塊・皿・鉢等である。灰釉を施釉するもの、鐵釉を施釉するもの、長石釉を施釉する志野等がある。磁器は小片が多く詳細は不明であるが、中国産の白磁と青磁・明代の染付(青花磁)が確認できる。これら陶磁器は概ね13世紀と16世紀~17世紀前葉に位置づけられる。主体は16世紀~17世紀前葉で、用途別では食器が主体で調理具がこれに続く。產地別では在地産の土器を中心に、瀬戸美濃系の陶器と中国産の磁器が加わる図式となる。これら組成の数量的把握は、後日、稿を改めて検討したい。

### 土器

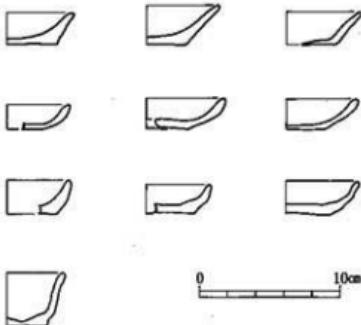
かわらけ(皿) 出土量が多く、図示できたもので28点ある。いずれもロクロ成形され、底部は回転糸切りで切り離されている。法量は挿図21のとおりで、口径9cm・器高2cmと口径10cm・



挿図21 かわらけ法量図

器高2.5cm前後に大きなまとまりがある。体部の形態には、厚さを減じながら直線的あるいは外反しながら立ち上がるものの丸みをもって立ち上がり、中位もしくは口縁下で厚みを増すもの。いったん開いてから、中位で棱をなして立ち上がるもの。31のように身の深いもの等があり、細分が可能である。

多くに煤・焦げが観察され、灯明皿として利用されたものであろう。100は底部中央が穿孔されている。

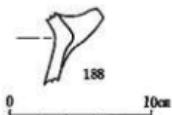


挿図22 かわらけ体部形態図

**内耳土器** (鍋・ほうろく) 出土量は多いが、全体を復元できるものは少ない。口径は28cm前後に集中しそうである。体部がまっすぐ上に立ち上がるものが多い。

**擂鉢** SK29・63から出土している。SK29出土のもの(挿図23)は綾杉状に卸目を入れるものである。また、109は瓦質のものである。

**土蓋** 1点のみ遺構外(II地区西側自然流路)より出土した。体部に小さな板状の取っ手を付するものである。



挿図23  
擂鉢・土蓋実測図

#### 陶器

**擂鉢** 灰白色の緻密な胎土をもつもので、SK48とP230から出土している。SK48出土のもの(50)の口縁端部は、面を作り弱い稜が観察できる。13世紀に位置づけられよう。

**瀬戸美濃系製品** 陶器の主体を占める。鉄釉を施釉するものには塊・鉢・擂鉢等がある。SK43出土の49は古瀬戸の瓶子で15世紀に位置づけられる。塊(天目)には大小がある。高台を削り出し、底部端がしっかりした棱をなす。16世紀後半から17世紀前半のものがある。

灰釉を施釉するものには丸皿・菊皿・塊・香炉がある。大窯の製品で16世紀中～後葉に位置付けられる。陰花をスタンプするもの(47)もある。

鎌釉を施釉する108の擂鉢は大窯の製品で16世紀に位置づけられる。

長石釉を施す志野には丸皿がある。出土量は少ない。底部に小さい高台を削り出し、口径は11cm前後に集中しそうである。17世紀前半に位置づけられる。

#### 磁器

**白磁** 小片で識別が困難だが2点確認できた。SD11出土の70は12世紀に、もう1点(遺構外出土)は15・16世紀に位置づけられよう。

**青磁** 6点出土している。遺構内からはSK61・SD13・SD16・SD23から出土している。細蓮弁文を施す55(SK61出土)は15世紀末～16世紀前葉に、他は龍泉窯系の碗で13

～14世紀に位置づけられよう。

**染付** 15世紀末～16世紀に位置づけられる明の青花磁の小片2点（SK30・SD11）が確認できた。107も中国産と考えられるが時期は不明である。また、この他に伊万里系の小片（18世紀以降）が少量採集されている。

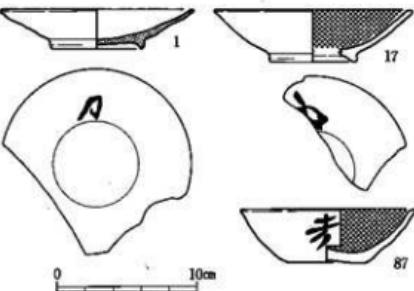
### （3）遺構出土の土器

古代と中世以降の二時期がほぼ同じ生活面で、しかも自然流路の影響等によって、多くの遺構では二時期の遺物が混在している。ここでは、まとまった量の遺物が出土した竪穴住居址について取り上げてみる。

**S B 1** 須恵器壺・長頸壺・短頸壺・甕、土師器小形甕・甕・鍋、黒色土器壺・鉢・塊、灰釉陶器皿・塊・甕がある。須恵器の壺はすべて軟質のものであった。食器の主体は須恵器壺と黒色土器の壺・塊で、ほぼ同量ある。灰釉陶器は皿・塊とも1個体だけであった。煮炊具では甕が3個体、小形甕が4個体、鍋が1個体識別できた。3は口頸部が欠損後、その部位を磨いてさらに利用しているものである。1と17の体部外面には墨書きが施されている。

## 2 石器・石製品

硯1点（114）と砥石2点（115・116）がある。114はSK43から出土したもので、2脚が付く長方硯である。幅45mm・厚さ7mmで石質は粘板岩である。115は長さ103mm・幅38mm・厚さ8mmで、硯から転用されたことが窺われる。116は幅35mm・厚さ15mmで、面状の砥痕に加え線状の砥痕が観察できる。石質は115が粘板岩、116が砂質泥岩である。



插図24 墨書き土器

### 3 金属製品

図示できなかったもの、形状が不明のものも含め、遺構内外から30点ほど出土している。銅製品には水滴（117）・煙管（118・119）等がある。117の水滴は円形のもので、注口は中央に一か所ある。法量は口径0.7cm・底径3.4cm・器高1.1cmである。120～121は刀装具と考えられる。122～124は厚さ0.2mmと非常に薄いもので用途は不明である。

鉄製品は鎧が著しく形状が明らかでないものが多い。125・126は刀子、127は鎌、129は鎌、130～134は釘である。

117と132がSK27、118がSK22、126がP224からの出土で、他はすべて遺構外であった。また、この他に鐵滓の出土もある。

### 4 銭貨

遺構内外から59点出土した。特にSK33とP142からは、葉紐状のものに結ばれてまとまって出土している。43点の銭名が判読できた。初鑄造年が古い順に、唐の開元通宝（621年）1点、宋の太平通宝（976年）1点、景德元宝（1004年）3点、祥符元宝（1008年）1点、天聖元宝（1023年）3点、皇宋通宝（1039年）6点、嘉祐元宝（1056年）1点、嘉祐通宝（1056年）2点、治平元宝（1064年）1点、熙寧元宝（1068年）1点、元豐通宝（1078年）2点、元祐通宝（1086年）4点、紹聖元宝（1094年）5点、聖宋元宝（1101年）2点、政和通宝（1111年）2点、明の洪武通宝（1368年）5点、琉球の世高通宝（1461～1469年）1点、日本の天正通宝（1577年）1点である。寛永通宝（1636年）は見られなかった。書体、背文、範型等による分類と模鋳銭の識別は今後の課題としたい。

### 5 その他

複数の遺構から漆膜が出土している。特にSK27には椀状の形態で残っており、漆器の椀類の存在が予想される。また、図示できたものはなかったが、SK30・SK61・P204でフイゴのかけらが確認できた。

註 (1) 中・近世陶磁器については、(財)長野県埋蔵文化センター 市川隆之氏・野村一寿氏、松本市教育委員会 竹内清長氏にご教示、鑑定していただいた。

担当者の力量不足により、それらを十分に生かしきれなかったこと、分類及び呼称等についてやや混亂が生じていることをお詫びしておきたい。

## 第4章 調査の成果と課題

### 1 古代集落について

I 地区から平安時代の堅穴住居址が1軒検出された(SB1)。また、自然流路を中心に多量の該期遺物が出土し、周辺に集落が広がっていたことが予想された。調査地は平坦な現地形からは想像もつかないほど微妙に起伏があり、これらの微高地を選んで集落が立地し、低位は生産域(水田)として利用されていたのであろう。1軒調査されただけで、集落構造まで明らかとならないが、墨書き土器・縁輪陶器等注目すべき遺物の出土もあり、それらを手懸かりに、また今後の調査によりその構造が解明されることを期待したい。

ところで、豊科町の南部地域は古代の安曇郡高家郷に比定される地域の一画で、各地から土師器・須恵器の小片が採集されている。しかし、その様相は全く不明であった。そのような中、前年の吉野町遺跡の8軒に次いで古代の住居址が発掘された意義は大きい。出土土器より、それらはいずれも9世紀後半に位置づけられる。豊科町内では、それ以前に瀕する遺物の出土がまだ確認されておらず、この時期を画期として沖積地の開発が進んだことか窺える。しかし、いまだ安定した生活域とはならなかったようで、吉野町遺跡・桜海波遺跡とも集落は継続されず、その後、13世紀ころわずかに生活の痕跡が認められるだけで中世末を迎えている。それを裏づけるように、今回の調査地内でも多量の遺物を飲み込んだ自然流路が検出されている。広大な沖積地が生産域として確立されたのは、江戸時代、多くの堰が開削されてからだったのであろう。今後、古地形の復元・町内外他遺跡での調査結果をふまえ、沖積地での開発過程と古代集落構造を明らかにしていく必要がある。その中で、古代の安曇郡高家郷の存在も明らかになっていくであろう。

### 2 中世の遺構と遺物について

II 地区を中心に、中世末に属する多くの土坑が検出された。そのうち、SK1・25・27・36の4基から骨片が出土している(表1)。それらは規模・平面形態こそ異なるものの、埋

遺構	規 模 (cm)	平 面 形	主軸方向	埋 土 の 特 徴	出 土 遺 物
SK1	155	101	41	隅丸長方形 N-1'-E	しまりなし、炭化物を含む、底面四隅に櫛
SK25	128	115	46	円 形 —	しまりなし、炭化物を含む
SK27	320	125	44	N-2'-W 炭化物を含む	かわらけ、瀬戸美濃系灰釉青磁、瓦質1点
SK36	168	123	45	隅丸長方形 N-2'-W しまりなし、炭化物を含む	かわらけ、内耳土器、木炭、瓦質1点、漆器

表1 骨を出土した遺構



挿図25 調査地周辺字界図  
(豊科町地方史同好会作成字界図より)

土・出土遺物等、似た様相を呈している。まとまった骨片が出土したSK1のあり方から、これらはいずれも墓址としてさしつかえないであろう。また、骨片の出土が確認されていなくても同様な土坑が多い。それらも墓址の可能性が高いと考えられよう。その中ではSK1が、構造・櫛列に囲まれた立地が他と異なり注意されよう。

一方、多くの柱穴（古代に属するものもあるうが）も検出されている。建物として提示することができなかったが、多くの建物・施設があったことが予想され、単に墓域として隔離した空間ではなかったことが窺える。

これら土坑及び自然流路から出土する陶磁器は16～17世紀前半の様相を呈している。また、出土銭貨のうち最も新しいものが1577年初鋸の天正通宝（日本）で、1636年初鋸で、その後、広く流通したと考えられる寛永通宝はみられない。この年代は、現在新田にある法藏寺がこの梶海渡に所在したという永正3年（1506）～慶長16年（1611）と合致する。十分に分析ができず、寺の造構と認められるものの検出はなかったが、墓址を含めこれら土

坑群・柱穴群が法藏寺に関連する遺構ととらえてよいであろう。

今回の調査はは場整備の影響が及ぶ地点のみの調査であったが、今後の調査により空間的復元が可能となってこよう。また、これらから多出したかわらけ・内耳土器等の在地の土器にも同じ年代観が付与されることから、今後の在地の土器研究にも果たす役割が大きいであろう。

### 3 溝について

明らかに後世の所産と考えられるもの、帯状の低地に土砂が堆積したと考えられるものもあるが、24本という多数の溝が検出された。時期は、SD1・2・4を除いて、土坑・柱穴等との切り合いが全く見られないことから多くが中世のものであろう。

これら溝は自然流路と密接に関わりながら調査地内を縦横に走っている。区画溝というよりは通水し利用していたことが窺える。今回の調査では多くを知ることはできなかったが、生活に不可欠であった“水”的管理に費やした先人の苦労が十分に偲ばれよう。しかし、古代集落も中世の遺構もともにその“水”に飲み込まれてしまったことも、また確認された事実である。

溝（用水堀）は水田とともに豊科町の田園風景の重要な部分を担っている。古代に開発の手が入ってから、は場整備の行われている現在まで、生活に密接して変遷してきた溝（用水堀）と水田を評価し位置づけることも大切であろう。

## 第5章 結語

多くの城館跡と点在する集落。肥沃な水田地帯を横断する堰、辻の道祖神。豊科町の歴史を語る時、これらは不可欠のものとして取り上げられてきた。一方、遺跡はその存在こそ知られていたものの、範囲・性格等は不明確で、発掘調査は1986年の上手木戸遺跡、1977年・1987年の上ノ山窯跡群と菖蒲平窯跡群、1990年の吉野町館跡遺跡しか行われていない。考古学の面からの歴史復元は緒についたばかりといえよう。

そのような中で行われた今回の発掘では、9世紀後半に位置づけられる集落の一画と、16～17世紀前半に位置づけられる墓塚等の遺構が調査された。前年の吉野町遺跡の調査に次いで、豊科町に広がる沖積地の開発が古代に開拓することを明らかにしたこと。この桜海渡に1506～1611年に所在したといわれる、法藏寺に関連する遺構を明らかにしたことは大きな成果である。特に法藏寺跡については、今後、考古学の成果と文献史学等とを突き合わせていくなかで、その様相がより具体的になっていくであろう。

このように多くの成果をあげながら、本書では考察をすることができず、郷土の歴史を復元するには至らなかった。既に各章節でふれたように今後検討すべき課題が多い。幸い、今年度、県営ほ場整備事業に伴い実施した鳥羽館跡遺跡の発掘調査でも、竪跡の他に古代の堅穴住居址が検出されている。今回の調査で明らかになった課題はその報告の中であらためて検討することとしたい。特に16世紀から17世紀という激動の時期、ここ豊科町域でも多くの城館の建設、武田氏の進攻等があった時期であるが、その時期の上手木戸遺跡・吉野町館跡遺跡・鳥羽館跡遺跡そして桜海渡遺跡と、集落・居館・寺院関連それぞれの遺跡の発掘調査が行われることになる。来年度の報告ではこれらの成果をふまえ、考古学の面から歴史を叙述できるようにしたい。

最後になりましたが、多くの皆様から貴重なご教示をいただきながら担当者の力量不足でそれらを十分に生かせなかったことを深くおわび申し上げ、また、調査にご理解とご協力をいただいた多くの皆様に感謝申し上げ、結語といたします。

# 付 表

- 1 柱穴一覽表
- 2 出土土器・陶磁器觀察表
- 3 出土錢貨一覽表



## 柱穴一覧表

番号	位置	机 械 通 径(cm)	掘 進 距 隔	掘 進 距 隔	平面形	土	層		出 土 遺 物	備考
							横円形	楕円形		
P 1	0~5	27	20	9	楕円形	暗灰褐色土(2.5Y4/2)				
2	0~5	25	24	6	円 形	暗褐色土(10YR3/4)				
3	0~5	31	25	7	楕円形	暗褐色土(10YR3/3)				
4	0~5	30	27	9	円 形	暗灰褐色土(2.5Y4/2)				
5	0~5	30	26	5	円 形	暗褐色土(10YR3/3)				
6	0~5	40	33	14	不整形	黑褐色土(10YR2/3)				
7	0~5	30	29	6	円 形	オリーブ褐色土(2.5Y4/6)				
8	0~5	35	35	14	円 形	暗褐色土(7.5YR3/4)				
9	0~5	30	29	12	円 形	褐色土(7.5YR4/6)				
10	0~5	35	33	25	円 形	オリーブ褐色土(2.5Y4/3)				
11	0~5	35	35	6	円 形	黄褐色土(2.5Y5/6)				
12	0~4	36	33	19	円 形	暗褐色土(10YR3/3)				
13	0~4	40	40	23	円 形	暗褐色土(10YR3/4)				
14	0~5	48	37	11	椭円形	褐色土(7.5YR4/4)				
15	0~4	27	25	8	円 形	褐色土(10YR4/4)				
16	0~5	28	25	13	円 形	オリーブ褐色土(2.5Y4/4)				
17	0~4	47	36	19	椭円形	褐色土(7.5YR3/4)				
18	0~5	34	31	15	円 形	オリーブ褐色土(2.5Y4/4)				
19	0~4	38	36	20	円 形	黑褐色土(2.5Y3/2)				
20	P~4	40	38	20	円 形	オリーブ褐色土(2.5Y4/4)				
21	P~4	40	36	25	円 形	1:オリーブ褐色土(2.5Y4/6)2: 黑褐色土(2.5Y3/2)				
22	P~4	50	34	22	椭円形	1: 暗褐色土(2.5Y4/4), 2: 褐灰褐色土(2.5Y4/2)				
23	P~4	35	35	30	円 形	1:褐色土(7.5YR4/4), 2: 暗褐色土(7.5YR2/3)				
24	P~4	32	23	10	椭円形	褐色土(10YR4/4)				
25	P~4	37	34	23	円 形	暗褐色土(10YR2/3)				
26	P~4	41	32	16	椭円形	1: 深褐色土(10YR4/3)				
27	P~4	45	45	9	円 形	暗褐色土(2.5Y4/4)				
28	P~4	38	36	20	円 形	黑褐色土(2.5Y3/2)				
29	P~4	51	29	9	円 形	オリーブ褐色土(2.5Y4/3)				
										>SD1

番号	位	測	規	規(㎝)	土			層	出	土	透	物	備考	
					長	径	深							
P 30	P-4	32	28	18	円 形	オリーブ褐色土(2.5Y 4/3)								>SD1
31	P-4	30	26	17	円 形	オリーブ褐色土(2.5Y 4/4)								>SD2
32	P-4	37	37	8	円 形	灰オリーブ褐色土(5Y 5/2)								>SD2
33	P-4	37	35	10	円 形	暗オリーブ褐色土(2.5Y 3/3)								>SD2
34	P-4	34	32	15	円 形	灰オリーブ褐色土(5Y 3/3)								>SD2
35	P-4	50	35	11	楕円形	灰オリーブ褐色土(7.5Y 6/2)								
36	P-4	46	45	20	円 形	灰オリーブ褐色土(5Y 6/2)								
37	P-4	30	30	12	円 形	灰オリーブ褐色土(5Y 6/2)								
38	0-4	24	24	15	円 形	暗褐色土(10YR 3/3)								
39	0-4	35	30	16	円 形	暗褐色土(10YR 3/3)								
40	0-4	27	26	10	円 形	にぶい黃褐色土(2.5Y 6/4)								
41	0-4	38	35	14	円 形	灰オリーブ褐色土(5Y 4/2)								
42	P-4	37	32	15	円 形	灰オリーブ褐色土(5Y 4/2)								>SD1
43	P-4	23	18	14	円 形	暗黃褐色土(2.5Y 4/2)								>SD1
44	P-4	30	21	10	楕円形	灰オリーブ褐色土(5Y 4/2)								>SD1
45	P-4	30	29	18	円 形	暗黃褐色土(2.5Y 4/2)								>SD1
46	P-4	60	35	13	楕円形	黑褐色土(10YR 2/2)								
47	0-4	30	20	5	楕円形	暗オリーブ褐色土(2.5Y 3/3)								
48	0-4	38	28	15	楕円形	暗オリーブ褐色土(2.5Y 3/3)								
49	N-3	27	25	6	円 形	にぶい青褐色土(2.5Y 5/3)								
50	N-3	34	32	5	円 形	にぶい青褐色土(2.5Y 6/3)								
51	0-3	35	23	11	楕円形	灰オリーブ褐色土(5Y 5/2)								
52	0-3	54	32	4	楕円形	にぶい青褐色土(10YR 4/4)								
53	0-3	33	30	15	円 形	にぶい青褐色土(10YR 5/3)								
54	0-3	45	40	12	円 形	深褐色土(2.5Y 5/3)								
55	N-2	12	8	12	円 形	褐色土(10YR 4/4)								根乱?
56	N-2	16	16	12	円 形	褐色土(10YR 4/4)								塊混?
57	0-2	25	21	5	円 形	灰色土(5Y 6/1)								
58	0-2	20	18	11	円 形	1:灰褐色土(5Y 6/1), 2:にぶい青褐色土(2.5Y 6/3)								
59	P-2	38	37	16	円 形	黑褐色土(7.5YR 3/1)								

番号	位位置	規格(cm)	土			層	出土地	備考
			長	幅	深さ			
P 60	P-3	31	27	4	円形	1; 深色±(10 YR 7/1), 2; 黒褐色土(5 YR 3/1)		
61	Q-4	43	41	20	円形	暗褐色土(10 YR 3/3)		
62	Q-4	31	30	30	円形	暗褐色土(7.5 YR 4/3)		
63	Q-4	38	26	27	橢円形	暗褐色土(10 TR 3/3)		
64	Q-3	45	35	30	橢円形	暗褐色土(10 YR 3/4)		
65	Q-4	31	30	4	円形	灰質褐色土(10 YR 5/2)		
66	Q-3	29	25	10	円形	灰質褐色土(10 YR 5/2)		
67	Q-3	39	38	10	円形	にぶい黒褐色土(10 YR 5/3)		
68	Q-3	26	15	5	橢円形	灰オリーブ色土(5 YR 6/2)		
69	Q-3	47	30	6	橢円形	にぶい黒褐色土(2.5 Y 6/3)		
70	Q-3	26	25	8	円形	にぶい褐色土(2.5 Y 4/3)		
71	Q-3	29	26	9	円形	にぶい褐色土(2.5 Y 4/3)		
72	Q-3	28	28	15	円形	にぶい褐色土(2.5 Y 4/3)		
73	Q-3	32	30	14	円形	にぶい黒褐色土(10 TR 4/3)		
74	Q-3	39	34	6	円形	灰質褐色土(10 YR 5/2)		
75	Q-4	46	41	10	円形	オリーブ褐色土(2.5 Y 4/6)		
76	Q-4	54	46	10	円形	にぶい黒褐色土(2.5 Y 6/3)		
77	Q-4	25	24	13	円形	暗褐色土(2.5 Y 5/3)	林賀	
78	Q-4	40	31	10	橢円形	暗褐色土(2.5 Y 5/3)		
79	Q-4	33	32	24	円形	暗オリーブ褐色土(2.5 Y 3/3)		
80	Q-4	25	25	15	円形	暗灰褐色土(2.5 Y 5/2)		
81	Q-4	35	35	10	円形	灰質褐色土(5 Y 7/2)		
82	R-5	35	30	6	円形	暗灰褐色土(2.5 Y 4/2)		
83	R-5	31	25	11	円形	黑褐色土(2.5 Y 3/1)		
84	R-5	30	30	19	円形	黑褐色土(2.5 Y 3/2)		
85	R-5	32	22	26	橢円形	暗オリーブ褐色土(2.5 Y 3/3)		
86	R-5	30	26	13	円形	灰オリーブ色土(5 Y 4/2)		
87	R-4	36	34	28	円形	暗オリーブ褐色土(2.5 Y 3/3)		
88	R-4	30	23	15	円形	暗灰褐色土(2.5 Y 5/2)		
89	R-4	35	29	11	円形	暗灰褐色土(2.5 Y 4/2)		

番号	位置	長さ(cm)	規格	短径(cm)	深さ(cm)	平面形	土	層	出	土	港	物	備考
P 90	R-4	43	39	19	円 形	灰オリーブ色土(5Y5/2)							
91	R-4	34	32	19	円 形	灰實色土(2.5Y6/3)							
92	R-4	26	25	20	橢円形	にぶい黃色土(2.5Y6/3)							
93	R-4	30	28	14	円 形	暗灰黃色土(2.5Y5/2)							
94	Q-3	27	25	6	円 形	にぶい黃褐色土(10YR5/3)							
95	R-3	25	25	9	円 形	にぶい實褐色土(10YR4/3)							
96	R-3	30	26	19	円 形	黑褐色土(2.5Y3/2)							
97	R-3	31	29	9	円 形	にぶい黃褐色土(10YR5/4)							
98	R-3	31	30	16	円 形	1:Rオリーブ色土(5Y6/2)、2:黒褐色土(2.5Y3/2)							
99	R-3	30	30	7	円 形	灰實褐色土(10YR6/2)							
100	R-3	40	35	10	円 形	灰黃褐色土(2.5Y6/2)							
101	Q-3	35	30	13	円 形	暗灰黃色土(2.5Y4/2)							
102	Q-3	29	27	8	円 形	黑褐色土(10YR3/2)							
103	Q-3	54	42	15	橢円形	暗褐色土(10YR3/3)							
104	R-3	35	31	5	円 形	灰白色土(5Y7/2)							
105	R-3	34	30	12	円 形	黃褐色土(2.5Y5/3)							
106	R-3	36	34	7	円 形	灰オリーブ色土(5Y4/2)							
107	R-3	50	45	11	円 形	灰白色土(2.5Y7/2)							
108	I-11	51	44	20	円 形	黑褐色土(10YR3/2)							
109	I-10	45	45	16	円 形	黑褐色土(10YR3/2)							
110	I-10	52	52	12	円 形	灰黃褐色土(10YR4/2)							
111	I-10	32	28	9	円 形	灰黃褐色土(10YR5/2)							
112	I-10	30	30	5	橢円形	にぶい黃褐色土(10YR4/3)							
113	I-10	36	36	15	円 形	オリーブ褐色土(2.5Y4/3)							
114	I-10	45	40	47	円 形	にぶい實褐色土(10YR4/3)							
115	I-10	47	31	11	橢円形	灰實褐色土(10YR5/3)							
116	I-10	46	38	16	円 形	暗褐色土(10YR3/3)							
117	I-10	45	45	13	円 形	黑褐色土(10YR3/1)							
118	I-10	49	40	18	長方形	黑褐色土(10YR3/2)							
119	I-10	36	35	14	円 形	にぶい實褐色土(10YR4/3)							

番号	位置	規格(㎝)	土			層	出土遺物	備考
			長径	短径	深さ			
P 120	1-10	47	40	8	円 形	にぶい黄褐色土(10YR 4/3)		
121	1-10	55	52	28	円 形	にぶい黄褐色土(10YR 4/3), 2:灰オリーブ色土(7.5Y 5/2)		
122	1-10	41	40	30	円 形	にぶい黄褐色土(10YR 4/3), 2:灰オリーブ色土(7.5Y 5/2)		
123	1-10	55	42	24	楕円形	にぶい黄褐色土(10YR 4/3), 2:灰オリーブ色土(7.5Y 5/2)		
124	1-10	38	35	30	楕円形	にぶい黄褐色土(10YR 4/3), 2:灰オリーブ色土(7.5Y 5/2)		
125	1-10	50	40	24	楕円形	にぶい黄褐色土(10YR 4/3), 2:灰オリーブ色土(7.5Y 5/2)		
126	J-10	40	38	14	円 形	海色土(10YR 4/4)		
127	1-10	37	30	8	楕円形	所堀色土(10TR 3/4)		
128	1-9	35	35	20	円 形	所堀色土(10TR 3/4)		
129	H-9	38	35	13	円 形	黑褐色土(10YR 3/2)		
130	1-9	36	34	23	円 形	暗オリーブ褐色土(2.5Y 3/3)		
131	1-9	40	36	24	円 形	黒褐色土(10YR 3/2)		
132	1-9	39	35	13	円 形	暗オリーブ色土(2.5Y 3/3)		
133	1-9	50	40	15	楕円形	暗オリーブ色土(2.5Y 3/3)		
134	1-9	45	40	22	円 形	暗褐色土(10YR 3/3)		
135	1-9	40	35	15	円 形	暗褐色土(10TR 3/3)		
136	1-9	30	30	15	円 形	黑褐色土(10TR 2/3)		
137	1-9	40	38	14	円 形	暗褐色土(10TR 3/4)		
138	1-9	36	30	19	円 形	暗褐色土(10TR 3/3)		
139	1-9	40	36	21	円 形	黑褐色土(10TR 3/2)		
140	1-9	45	43	30	円 形	にぶい黄褐色土(10YR 4/3), 2:黒色土(10YR 2/1)	須恵器	
141	1-9	41	37	10	円 形	にぶい黄褐色土(10YR 4/3)		
142	1-9	46	45	35	円 形	にぶい黄褐色土(10YR 4/3), 2:黒色土(10YR 2/1)		
143	1-9	36	34	7	円 形	暗褐色土(7.5YR 2/3)		
144	1-9	60	45	21	楕円形	オリーブ褐色土(2.5Y 3/4)		
145	1-9	33	25	5	楕円形	オリーブ褐色土(2.5Y 4/3)		
146	1-9	33	25	10	楕円形	黒褐色土(2.5Y 5/3)		
147	1-8	30	30	8	円 形	黒褐色土(10YR 2/2)		
148	1-9	38	35	13	円 形	にぶい黄褐色土(10YR 4/3)		
149	J-9	40	35	13	円 形	にぶい黄褐色土(10YR 5/4)		

番号	位置	規 模 (cm)	土			層	出 土 遺 物	備考
			長	幅	深さ			
P 160	I-9	56	30	11	焼円形	灰黒褐色土(10YR5/2)		
151	J-9	41	31	10	焼円形	灰オリーブ色土(5Y5/2)		
152	J-9	41	40	14	円 形	灰オリーブ褐色土(2.5Y3/3)		
153	J-8	25	24	8	円 形	灰オリーブ色土(5Y5/2)		
154	J-9	62	35	22	焼円形	暗灰褐色土(2.5Y5/2)		
155	J-9	40	36	8	円 形	灰黒褐色土(2.5Y6/2)		
156	J-8	50	40	13	焼円形	オリーブ褐色土(2.5Y4/3)		
157	I-8	64	50	30	焼円形	暗褐色土(10YR4/4)		
158	I-8	38	33	9	円 形	黄褐色土(2.5Y5/3)		
159	J-8	55	50	8	円 形	褐色土(7.5YR4/3)		
160	J-8	60	50	5	焼円形	褐色土(10YR4/4)		
161	J-8	40	40	12	円 形	暗灰褐色土(2.5Y4/3)		
162	J-8	43	30	11	焼円形	オリーブ褐色土(2.5Y4/3)		
163	L-10	60	60	45	円 形	オリーブ褐色土(5Y3/1)		
164	J-9	54	46	19	円 形	灰黒褐色土(2.5Y6/2)		
165	J-9	54	50	15	円 形	灰黒褐色土(10YR6/2)		
166	K-9	38	35	15	円 形	褐色土(10YR2/2)		
167	K-9	32	30	40	円 形	オリーブ褐色土(Y3.1)		
168	K-9	26	20	8	円 形	灰小黄褐色土(10YR3/3)		
169	K-8	41	33	13	焼円形	暗オリーブ褐色土(2.5Y3/3)		
170	J-7	34	27	13	焼円形	灰小黄褐色土(10YR4/3)		
171	K-7	41	41	7	円 形	褐色土(10YR4/4)		
172	K-7	45	45	15	円 形	灰小黄褐色土(2.5Y6/3)		
173	K-7	30	30	13	円 形	褐色土(10YR4/4)		
174	K-7	30	30	24	円 形	暗褐色土(10YR3/4)		
175	K-7	50	46	9	円 形	暗黒褐色土(10YR4/2)		
176	K-7	47	30	20	焼円形	1:暗黃褐色土(10YR5/2); 2: 黑褐色土(10YR2/2)		
177	K-7	46	35	8	焼円形	灰小黄褐色土(10YR5/3)		
178	K-7	55	50	33	不规则	1:暗褐色土(7.5YR5/6); 2: オリーブ褐色土(7Y3/1)		
179	K-7	40	40	17	円 形	1:暗褐色土(7.5YR5/6); 2: 暗灰褐色土(2.5Y5/2)		

番号	位置	規 格 (cm)	幅 度 (cm)	土 質	層	出 土 遺 物		備考
						長	短	
P 130	K-7	46	40	16	円 形	1:明褐色土(7.5YR5/6) 2:暗灰褐色土(2.5Y5/2)		
181	K-7	52	49	26	円 形	灰黃褐色土(10YR4/2)	>SD11	
182	M-10	40	40	39	円 形	暗灰黃褐色土(2.5Y4/2) 鹽化合		
183	M-10	26	25	23	円 形	暗灰黃褐色土(2.5Y4/2)		
184	M-10	53	45	18	円 形	灰褐色土(5Y5/2)		
185	M-10	51	43	17	円 形	灰褐色土(5Y5/2)		
186	M-10	24	24	17	円 形	暗灰黃褐色土(2.5Y4/2)		
187	M-10	45	42	24	円 形	暗灰黃褐色土(2.5Y5/2)		
188	M-10	50	46	26	円 形	暗灰黃褐色土(2.5Y5/2)		
189	M-10	56	55	14	円 形	黃褐色土(2.5Y5/3)		
190	M-9	30	29	16	円 形	黑褐色土(10YR2/2)		
191	M-10	54	46	25	円 形	1:褐色土(10YR4/4) 2:黑色土(10YR2/1) 砂質		
192	M-10	32	30	15	円 形	1:暗灰黃褐色土(2.5Y5/2) 2:黑褐色土(2.5Y3/1)		
193	M-10	26	26	21	円 形	黑褐色土(2.5Y3/1)		
194	M-10	36	34	30	円 形	黑褐色土(2.5Y3/1)		
195	M-9	36	35	28	円 形	黑褐色土(2.5Y3/1)		
196	M-9	35	24	40	橢円形	黑褐色土(10YR2/2)		
197	M-9	36	35	34	円 形	黑褐色土(2.5Y3/1)		
198	M-9	28	25	30	円 形	暗灰黃褐色土(2.5Y3/2)		
199	N-10	39	32	29	円 形	黑褐色土(10YR3/2)		
200	M-10	31	30	30	円 形	黑褐色土(2.5Y3/1)		
201	N-10	25	24	15	円 形	黑褐色土(2.5Y3/2)		
202	N-9	55	45	55	円 形	明灰黃褐色土(2.5Y4/2)		
203	N-9	36	33	20	円 形	暗灰黃褐色土(10YR3/3)		
204	N-9	39	38	17	円 形	灰黃褐色土(10YR4/2)		
205	L-8	30	25	35	円 形	1:灰褐色土(10YR4/1)		
206	L-8	31	28	26	円 形	1:灰褐色土(10YR4/3)		
207	L-8	38	28	16	橢円形	1:灰褐色土(10YR4/3)		
208	L-9	57	42	20	橢円形	1:深褐色土(10YR6/2) 2:暗褐色土(10YR3/4)		
209	K-7	50	50	13	円 形	1:灰褐色土(10YR5/3)	かわらけ	

番号	位置	規格(cm)	長	幅	規格(cm)	深さ	土質	層	出土地	遺物	備考
P 210	L-7	56	56	15	円 形	暗灰黄色土(2.5Y5/2)					>SD11
211	L-8	47	40	17	楕円形	暗灰黄色土(2.5Y5/2)					
212	M-8	40	40	15	円 形	暗灰黄色土(2.5Y5/2)					
213	M-9	38	36	18	円 形	オリーブ褐色土(2.5Y4/4)					
214	M-9	31	30	40	円 形	黒褐色土(10YR2/2)					
215	M-8	31	30	5	円 形	にぶい黄色土(2.5Y6/3)					
216	L-7	58	56	18	円 形	暗灰黄色土(2.5Y4/2)					
217	L-7	42	31	19	楕円形	1.1:1.5:1.5褐色土(10YR4/2)、2.1:2.5:2.5黄褐色土(10Y5/4)、上層褐色土(10Y3/4)					>SK30
218	L-7	50	50	15	円 形	暗灰黄色土(2.5Y4/2)					>SD11
219	M-7	45	40	7	円 形	褐色土(10YR 4/4)					
220	M-7	40	42	42	円 形	1:1:1:1:1褐色土(10YR4/4)、2:2:2:2:2褐色土(10YR5/3)、2:2:2:2:2褐色土(10YR4/4)					
221	N-7	65	53	8	楕円形	1:1:1:1:1褐色土(10YR4/4)、2:2:2:2:2褐色土(10YR4/4)					
222	M-7	61	52	26	円 形	暗褐色土(7.5YR3/4)					
223	M-7	60	51	20	円 形	暗褐色土(7.5YR4/4)					
224	M-7	37	35	22	円 形	暗灰褐色土(7.5YR6/1)					
225	M-7	71	52	21	不规则	茶オリーブ色土(5Y4/2)					
226	M-7	43	40	11	円 形	暗褐色土(7.5YR4/4)					
227	M-7	50	48	7	円 形	暗褐色土(2.5Y5/3)					
228	M-7	45	40	20	円 形	暗褐色土(2.5Y5/3)					
229	M-7	47	38	8	円 形	灰褐色土(2.5Y6/2)					
230	M-7	60	60	18	円 形	にぶい黃褐色土(10YR6/4)					
231	M-7	55	—	10	円 形	深灰褐色土(10YR5/2)					
232	B-11	55	41	8	楕円形	灰褐色土(10YR5/2)					
233	C-12	48	40	11	円 形	黑褐色土(10YR3/2)					
234	A-11	51	48	15	円 形	暗灰褐色土(2.5Y4/2)					
235	A-11	42	31	8	楕円形	にぶい黃褐色土(10YR5/3)					
236	A-11	42	38	20	円 形	黑褐色土(10YR2/3)					
237	C-12	56	55	26	円 形	黑褐色土(10YR3/1)					

SB1出土土器観察表

土器の種類	器形の種類	番号	法量			形態の特徴	技法の特徴	備考
			口径	底径	厚高			
灰釉陶器	壺	1	13.5	6.3	2.8	*口縁端部が強く外反する。	*内外ヨコナデ。底部削板へラ削り。 *高台貼りつけ。施釉濁け剥げ。	
	碗	2	15.5			*口縁端部が弱く外反する。	*内外ヨコナデ。	
	小瓶	3	2.0	5.0	7.0		*内外ヨコナデ。底部削板糸切り。	*欠損部(底部)加工。
須恵器	环	4	11.9	5.5	3.5	*面は底部周囲に明瞭な縁を作らず 縁部から立ち上がる。 *7は全体が直線的に開き、内面に 明瞭な縁を作る。	*内外ヨコナデ。 *底部削板糸切り。	*軟質。
		5	13.2	5.8	3.4			*軟質。
		6	13.2	7.1	3.5			*軟質。
		7	14.1	5.8	4.1			*軟質。
		8	13.3	6.0	4.1			*軟質。
	長颈壺	9	7.7	6.4		*口縁部は強く外反し、腹部をつまみあげる。 *鋸凹部は上半が弱く張る。	*内外ヨコナデ。 *底部削板糸切り。高台貼りつけ。 *口縁部と肩部の接合は二段。	
	短頸壺	10				*大形で、肩部が強く張る。	*内外ヨコナデ。	
	环	11	13.0	5.9	3.5	*大形のもの(13)と小形のもの(11-12)がある。 *腹部は底部周囲に作らずやかに弧を引き立ち上がる。	*内外ヨコナデ。底部削板糸切り。 *内面へラ晒き、黒色処理。	
		12			5.0			
		13	18.3	8.0	5.5			
黑色土器	壺	14	13.2	7.5	5.6	*身が強く丸みをもった底盤が直立 気味に立ち上がる。 *全体は直線気味に開くもの(17-19) と丸みをもって開くもの(15-18) とがある。 *高台は高く高いもの(14-16)、断面 三角形のもの(17)、台形のもの(19) とがある。 *19は大形。	*内外ヨコナデ。 *底部削板糸切り。高台貼りつけ。 *内面へラ晒き、黒色処理。	
		15	14.2					
		16			7.2			
		17	13.8	5.9	3.7			
		18	12.5					
		19			7.2			
	鉢	20	24.2	9.9	10.3	*体部は丸みを持ちながら立ち上がり、 口縁端部を強く外反させる。 *体部外縁に明瞭な縁を残す。	*内外ヨコナデ。 *内面へラ晒き。黒色処理。	
	小形鉢	21	15.5			*胴部に最大径を有し、口縁部は「」 字状に外反する。	*内外ヨコナデ。 *胴部カキ目模様。	
		22	11.7					
		23		7.0				
上部器	碗	24		10.6		*口縁部が直立気味に弱く立ち上がり、 端部で面を作る。	*内外ナデ(回転利用)。 *胴部外面上位カキ目。	
		25	20.8					
	鉢	26	27.8			*大きく開いた体部から口縁部がさ らに弱く外反する。		

SK15出土土器観察表

土器の種類	器形の種類	番号	法量			形態の特徴	技法の特徴	備考
			口径	底径	厚高			
灰釉陶器	壺	27		8.5		*高台の中央に棱を有する。	*内外ヨコナデ。 *底部削板へラ削り、高台貼りつけ。	

SK26出土土器・陶磁器観察表

焼き物・器形の種類	番号	法 量			形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	備 考
		口径	底径	高さ			
かわらけ	28	9.5	7.2	2.3	*大きい底部から体部が直立気味に立ち上がる。 *内面は丸みを有する。	*内外ヨコナデ。 *底部回転糸切り。	

SK27出土土器・陶磁器観察表

焼き物・器形の種類	番号	法 量			形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	備 考
		口径	底径	高さ			
かわらけ	29	10.2	5.4	2.6	*体部は厚さを減しながら直線的に立ち上がる。	*内外ヨコナデ。 *底部回転糸切り。	*灯明皿。
内耳土器・鍋	30		24.2		*体部が直立気味に立ち上がる。	*内外ナデ。	

SK33出土土器・陶磁器観察表

焼き物・器形の種類	番号	法 量			形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	備 考
		口径	底径	高さ			
かわらけ	31	8.2	5.8	3.6	*身が深く、体部がほぼまっすぐに立ち上がる。	*内外ヨコナデ。	
	32	8.2	5.1	2.3	*体部はやや丸みを持ちながら外反し、口縁直下で厚みを増す。		
	33	9.3	4.9	2.4			

SK34出土土器・陶磁器観察表

焼き物・器形の種類	番号	法 量			形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	備 考
		口径	底径	高さ			
かわらけ	34	9.6	5.1	2.8	*体部は厚さを減しながら聞く。	*内外ヨコナデ。底部回転糸切り。	

SK36出土土器・陶磁器観察表

焼き物・器形の種類	番号	法 量			形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	備 考
		口径	底径	高さ			
かわらけ	35	7.7	6.0	2.1	*体部は中位で厚みを増すもの(35・36)と、薄く直線的に細くなるもの(38)がある。 *38は厚い体部が短く立ち上がる。	*内外ヨコナデ。	
	36	10.0	4.9	2.8		*底部回転糸切り。	
	37	9.0	5.0	2.8			
	38	10.5	5.3	2.7			
	39	8.4					

SK39出土土器観察表

土 器 の 種 類	器 形 の 種 類	番 号	法 量			形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	備 考
			口径	底径	高さ			
灰陶陶器	壺	40	17.5			*口縁部が弱く外反する。	*内外ヨコナデ。 *体部外由下位回転へラ制り。	

SK41出土土器・陶磁器観察表

土 器 の 種 類	器 形 の 種 類	番 号	法 量			形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	備 考
			口径	底径	高さ			
灰陶陶器	段 盆	41	14.5	6.0	2.6	*口縁部が弱く外反する。 *高さは低く、中位に弱い腰を有す。	*内外ヨコナデ。 *高さ筋りつけ。	

発き物・器形の種類	番号	法 量			形態の特徴	技法の特徴	備考
		口径	底径	器高			
かわらけ	42	10.2	6.4	2.4	*体部が腰をもち外側する。	*内外ヨコナデ。 *底部回転糸切り。	
	43	9.0	4.5	2.4	*体部は中位やや上で厚みを増す。		
	44	8.6	4.9	2.1			
灰釉・皿	45	10.3	5.5	2.9	*体部は丸みをもって立ち上がる。	*内外ヨコナデ。	*瀬戸美濃 大底。
	46	9.4			*体部は後を有し、口縁端部は外反する。	*内外ヨコナデ。	*瀬戸美濃 大底。

SK42出土土器・陶磁器観察表

発き物・器形の種類	番号	法 量			形態の特徴	技法の特徴	備考
		口径	底径	器高			
灰釉・丸皿	47	10.7			*口縁部はいったん外反し、底部をつまみあげる。	*内外ヨコナデ。 *捺花スランプ。	*瀬戸美濃系。

SK43出土土器・陶磁器観察表

土器の器形の種類	番号	法 量			形態の特徴	技法の特徴	備考
		口径	底径	器高			
須恵器 壺	48		6.0		*体部は内面に明瞭な模を作らず立ち上がる。	*内外ヨコナデ。 *底部回転糸切り。	*軟質。
灰釉・瓶子	49		12.0		*体部はやや急に立ち上がる。	*底部回転ヘラ削り。	*古瀬戸。

SK48出土土器・陶磁器観察表

発き物・器形の種類	番号	法 量			形態の特徴	技法の特徴	備考
		口径	底径	器高			
提鉢	50	30.7			*体部は直線的に外側し、端部はそのまま面を作る。	*内外ヨコナデ。	*無輪。 *灰陶系。

SK60出土土器・陶磁器観察表

土器の器形の種類	番号	法 量			形態の特徴	技法の特徴	備考
		口径	底径	器高			
灰釉陶器 壺	51	10.9			*体部は丸みを持ちながら立ち上がり、口縁端部が外反する。	*内外ヨコナデ。	
かわらけ	52	9.1	5.7	2.1	*体部は中位で強い棱を有す。	*内外ヨコナデ。底部回転糸切り。	
灰釉・皿	53	10.1	5.8	2.1	*体部が大きく開き、中位で傾い棱を有す。	*内外ヨコナデ。	*瀬戸美濃系。

SK61出土土器・陶磁器観察表

土器の器形の種類	番号	法 量			形態の特徴	技法の特徴	備考
		口径	底径	器高			
灰釉陶器 盆	54	12.9	—	2.5	*口縁端部をまっすぐ下方へ折り返す。 *リング状のつまみを持す。	*内外ヨコナデ。 *つまみ筋りつけ。	

種類・器形の種類	番号	法 量			形態の特徴	技法の特徴	備考
		口径	底径	器高			
青磁・碗	55	11.6				*相違弁文を施す。	
かわらけ	56	10.4	7.0	2.3	*体部は中位で窓く外反する。	*内外ヨコナデ。	
	57	8.8	7.2	2.4	*厚い体部が弱く外反してからまつすぐ上に立ち上がる。	*底部回転糸切り。	

SK63出土土器・陶磁器観察表

種類・器形の種類	番号	法 量			形態の特徴	技法の特徴	備考
		口径	底径	器高			
かわらけ	58	9.7	5.4	3.0	*体部は丸みをもちらながら立ち上がり、体部中位もしくは口縁直下で厚みを増す。	*内外ヨコナデ。	
	59	9.6	5.8	3.0		*底部回転糸切り。	
	60	10.2	5.0	2.4			

P203出土土器・陶磁器観察表

土器の器形の種類	番号	法 量			形態の特徴	技法の特徴	備考
		口径	底径	器高			
灰釉陶器	塊	61	15.8		*口縁端部が弱く外反する。	*内外ヨコナデ。	

SDII出土土器・陶磁器観察表

土器の器形の種類	番号	法 量			形態の特徴	技法の特徴	備考
		口径	底径	器高			
灰釉器	62	12.9			*体部薄く外側に弱い棱をもつ。 *底部内面に窓を作らず、体部が緩やかな弧を描き立ち上がる。	*内外ヨコナデ。 *底部回転糸切り。	*款質。
	63		4.8				*款質。
	64		5.0				*款質。
	65		5.6				*款質。
灰釉陶器	66		9.4		*断面方形の短い高台を付す。 *体部・底部とも厚い。	*内外ヨコナデ。 *窓内貼りつけ。	
	67		9.2		*長い高台を付す。		
土師器	盤	68	25.0		*端部を下方へ延び引き出す。	*内外ヨコナデ。	

種類・器形の種類	番号	法 量			形態の特徴	技法の特徴	備考
		口径	底径	器高			
灰磁・皿	69	10.2			*体部中位に棱を作る。	*内外ヨコナデ。	*窓内美濃系。
白磁・碗	70	10.0	1.8		*断面長方形の高台を付す。	*底部削り調整。	

SD13出土土器・陶磁器観察表

種類・器形の種類	番号	法 量			形態の特徴	技法の特徴	備考
		口径	底径	器高			
青磁・碗	71	15.4				*外面裏面弁文を施す。	*龍泉窯系。
かわらけ	72	10.0	7.1	2.4	*体部中位で厚さを増し、外面に棱を有する。	*内外ヨコナデ。 *底部回転糸切り。	

SD16 出土土器観察表

土器の種類	器形の種類	番号	法量			形態の特徴	技法の特徴	備考
			口径	底径	器高			
灰陶壺	壺	73		8.4		*下部に縦を有する長い高台を付す。	*底部回転ヘラ削り。高台貼りつけ。	

SD18 出土土器観察表

土器の種類	器形の種類	番号	法量			形態の特徴	技法の特徴	備考
			口径	底径	器高			
黑色土器	壺	74	16.8	6.7	5.6	*体部は丸みを持ちながら立ち上がる。	*内外ヨコナギ。底部回転糸切り。 *内面ヘラ磨き。黑色処理。	

I 地区遺構出土土器観察表

土器の種類	器形の種類	番号	法量			形態の特徴	技法の特徴	備考
			口径	底径	器高			
土師壺	壺	75	13.6	7.9	3.1	*口縁端部を丸くおさめる。	*内外ヨコナギ。底部回転糸切り。	
灰陶壺	段	76	14.8			*口縁端部は丸くおさめ、小さい輪花を施す。	*内外ヨコナギ。底部回転糸切り。	
		77	13.5			*口縁端部を弱く外反させる。	*内外ヨコナギ。体部下位回転ヘラ削り。	
	段	78		6.8		*低い高台を付す。	*体部下位回転ヘラ削り。 高台貼りつけ。	
	壺	79		5.2		*断面弧状の低い高台を付す。	*内外ヨコナギ。高台貼りつけ。	

II 地区遺構出土土器・陶磁器観察表

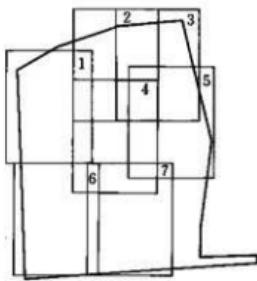
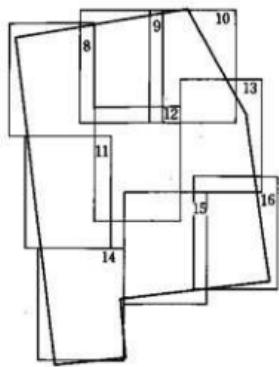
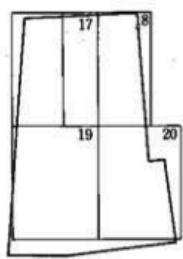
土器の種類	器形の種類	番号	法量			形態の特徴	技法の特徴	備考
			口径	底径	器高			
灰陶壺	壺	80	14.0			*口縁端部を外反させる。	*内外ヨコナギ。 *体部下位回転ヘラ削り。 *高台貼りつけ。	
		81		7.1				
		82		7.6		*中段に縫を有する高台を付す。	*内外ヨコナギ。 *底部回転ヘラ削り。高台貼りつけ。	
		83		6.8				
		84		6.3				
		85		8.0				
	長頸瓶	86		6.0		*高台は外側で鍛造する。	*内外ヨコナギ。高台貼りつけ。	
		87	12.2	5.4	3.8	*体部は斜めに大きく聞く。	*内外ヨコナギ。 *内面ヘラ磨き。黑色処理。	*墨書きあり。
		88	11.9	5.8	4.8	*体部は丸みをもって立ち上がる。	*底部回転糸切り。	
		89	12.9	5.8	4.8	*縫を有しない体部が丸みをもって立ち上がり、縫部は外反する。	*内外ヨコナギ。 *底部回転糸切り。高台貼りつけ。	
		90		6.0		*断面三角形のしっかりした高台を付す。	*内外ヨコナギ。 *底部回転糸切り。	
黑色土器	壺	91	13.2	6.1	3.5	*内面に鋸歯状の縫を作らず、体部が立ち上がる。	*内外ヨコナギ。 *底部回転糸切り。	*灰質。
		92	13.3	6.1	3.5			
	甕	93	49.7			*口縁端部を上方につまみあげ、縫を有する。	*内外ヨコナギ。 *底面文様。	

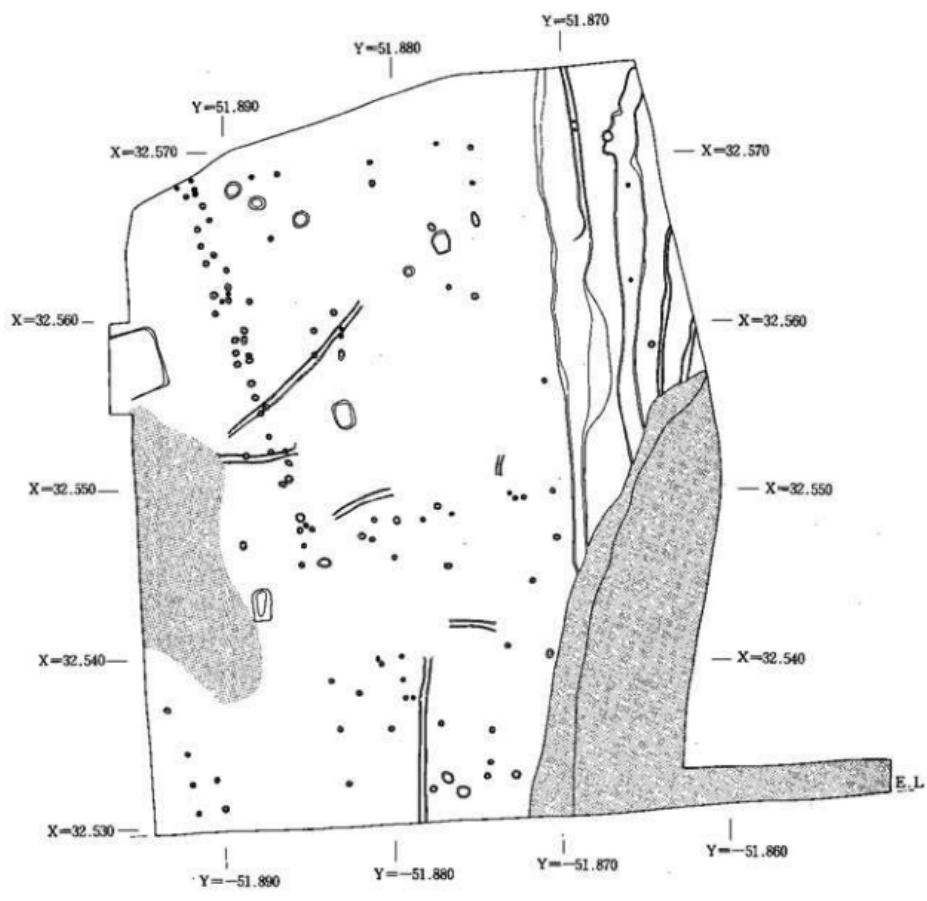
巻き物・器形の種類	番号	法 量			形態の特徴	技法の特徴	備考
		口径	底径	器高			
青磁・碗	94	4.8			*断面方形の高台を付す。	*底部削りへラ削り。	*直角底系。
かわらけ	95	7.4	4.9	1.9	*体部はえみを持ちながら立ち上がり、体部中位もしくは口縁度下で厚みを増す。	*内外ヨコナデ。	
	96	9.0	5.5	1.9	*器は体部が一旦開いてから上に立ち上がる。	*底部削り糸切り。	
	97	9.0	5.0	1.8	*95-101は体部が直線的に外側する		
	98	9.7	5.7	2.1			
	99	10.0	6.0	2.2			
	100	11.1	6.0	2.4			*底部中央穿孔。
	101	11.3	7.2	2.9			
志野・丸皿	102	10.8			*口縁部が外反し面をなす。	*内外ヨコナデ。	
	103		6.6		*断面台形の低い高台を付す。		
灰釉・菊皿	104	9.0	4.7	2.3	*断面三角形の高台を付す。 *口縁部は丸くおさめる。	*内外ヨコナデ。	*原戸美濃系。
铁釉・梅	105	9.2	3.3	4.4	*大小二法量がある。 *底部邊がしっかりした棱をもつ。	*内外ヨコナデ。 *底部削り調整。	*瀬戸美濃系。
	106	11.6					
染付・鉢	107	7.8	4.7	3.9	*直立気味の体部から口縁部にかけて大きく外反する。		
銷釉・梅鉢	108	31.9			*口縁端部をまるめて上下へ引き出す。 *弱くつまんで口をつける。	*内外ナデ。	*瀬戸美濃・大窯。
塔 鉢	109		10.0			*内外ナデ。	*瓦質。
内耳鍋	110	28.0			*体部がまっすぐ上に立ち上がる。	*内外ナデ。 *底削砂粒。	
	111	20.6					
	112	27.3					
	113		21.2				

出土錢貨一覽表

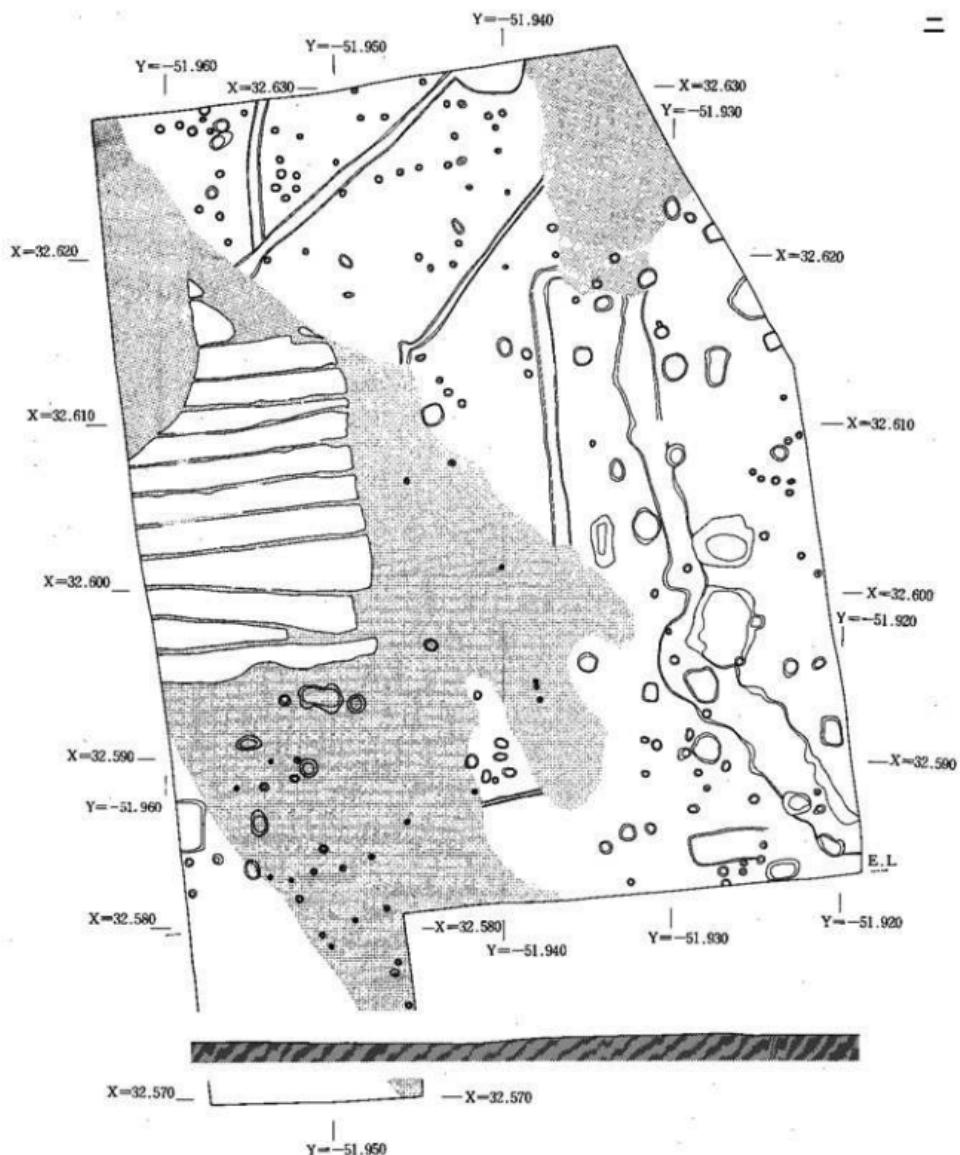
遺構名	国番号	錢貨名	初鑄造年		備考	遺構名	国番号	錢貨名	初鑄造年		備考
			王朝名	年代					王朝名	年代	
SK21	135	洪武通寶	明	1368年	中國	SK43	154	祥符元寶	宋	1008年	中國
SK25	136	元祐通寶	宋	1086年	中國	"	155	天聖元寶	宋	1023年	中國
"	(不 明)					SK61	156	皇宋通寶	宋	1039年	中國
"	(不 明)					P 142	157	景德元寶	宋	1004年	中國
"	(不 明)					"	158	皇宋通寶	宋	1039年	中國
SK27	137	政和通寶	宋	1111年	中國	"	159	皇宋通寶	宋	1039年	中國
SK28		(不 明)				"	160	元祐通寶	宋	1086年	中國
SK29	138	洪武通寶	明	1368年	中國	"	161	聖宋元宝	宋	1101年	中國
"	(不 明)					"	(不 明)				
SK30		(不 明)				SD11	162	太平通寶	宋	976年	中國
SK33	139	開元通寶	唐	621年	中國	"	163	景德元寶	宋	1004年	中國
"	140	天聖元寶	宋	1023年	中國	"	164	皇宋通寶	宋	1039年	中國
"	141	皇宋通寶	宋	1039年	中國	"	165	紹聖元寶	宋	1094年	中國
"		皇宋通寶	宋	1039年	中國	"	166	洪武通寶	明	1368年	中國
"	142	嘉祐元寶	宋	1056年	中國	"	167	世高通寶	琉球	1461～1469年	琉球
"	143	嘉祐通寶	宋	1056年	中國	"	(不 明)				
"	144	治平元寶	宋	1064年	中國	SD15	(不 明)				
"	145	熙寧元寶	宋	1068年	中國	遺構外	168	景德元寶	宋	1004年	中國
"	146	元豐通寶	宋	1078年	中國		169	天聖元寶	宋	1023年	中國
"	147	元豐通寶	宋	1078年	中國		170	皇宋通寶	宋	1039年	中國
"	148	元祐通寶	宋	1086年	中國		171	嘉祐通寶	宋	1056年	中國
"	149	元祐通寶	宋	1086年	中國		172	紹聖元寶	宋	1094年	中國
"	150	紹聖元寶	宋	1094年	中國		173	政和通寶	宋	1111年	中國
"	151	紹聖元寶	宋	1094年	中國		174	洪武通寶	明	1368年	中國
"		紹聖元寶？	宋	1094年	中國		(不 明)				
"		聖宋元宝？	宋	1101年	中國		(不 明)				
"	152	洪武通寶	明	1368年	中國		(不 明)				
"	153	天正通寶	後柏原	1577年	日本		(不 明)				
"		(不 明)				計 59 点 参考文献 松原典明編「古錢一覽表」(『日本考古学小辞典』1983年 ニュー・サイエンス社)					
"		(不 明)									
"		(不 明)									

# 図 版

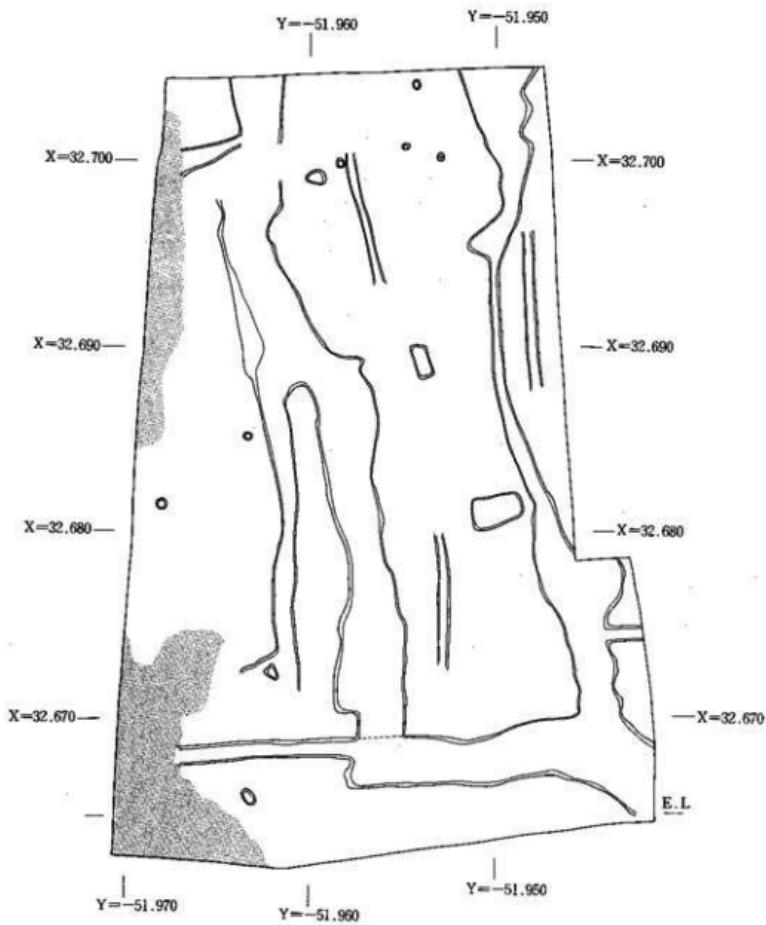




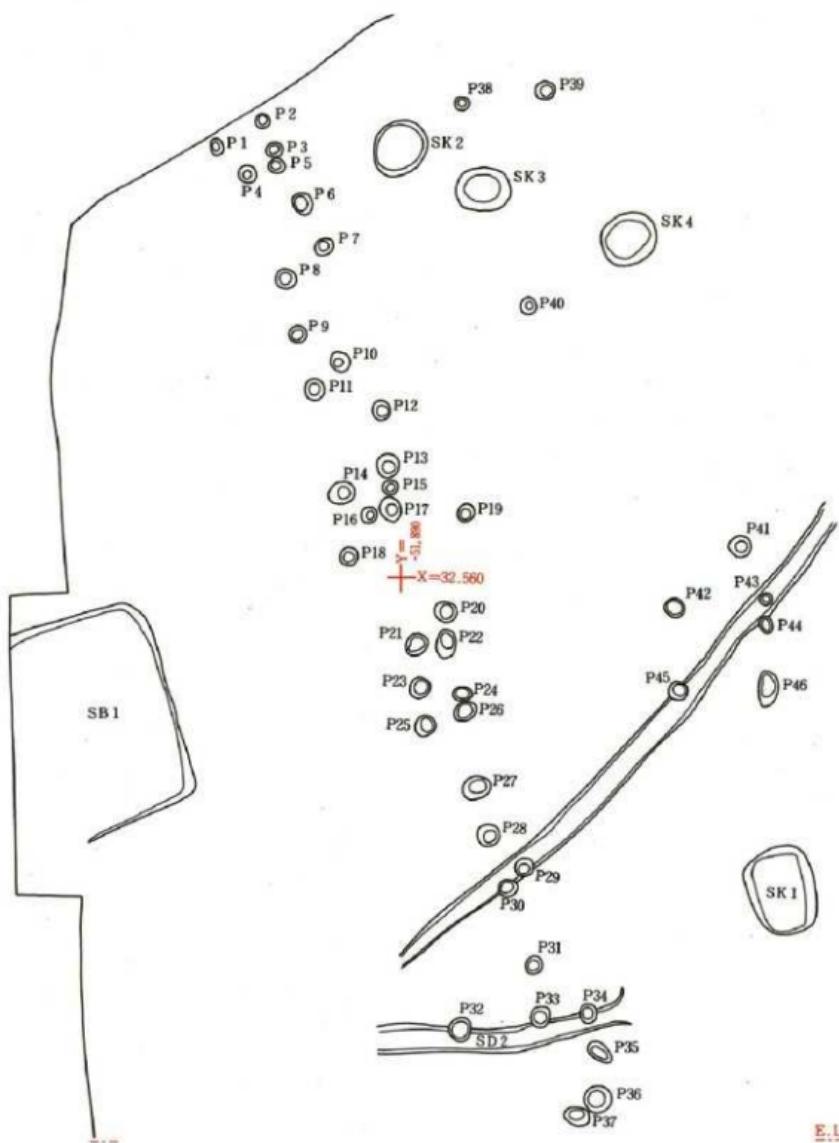
I 地区全体図



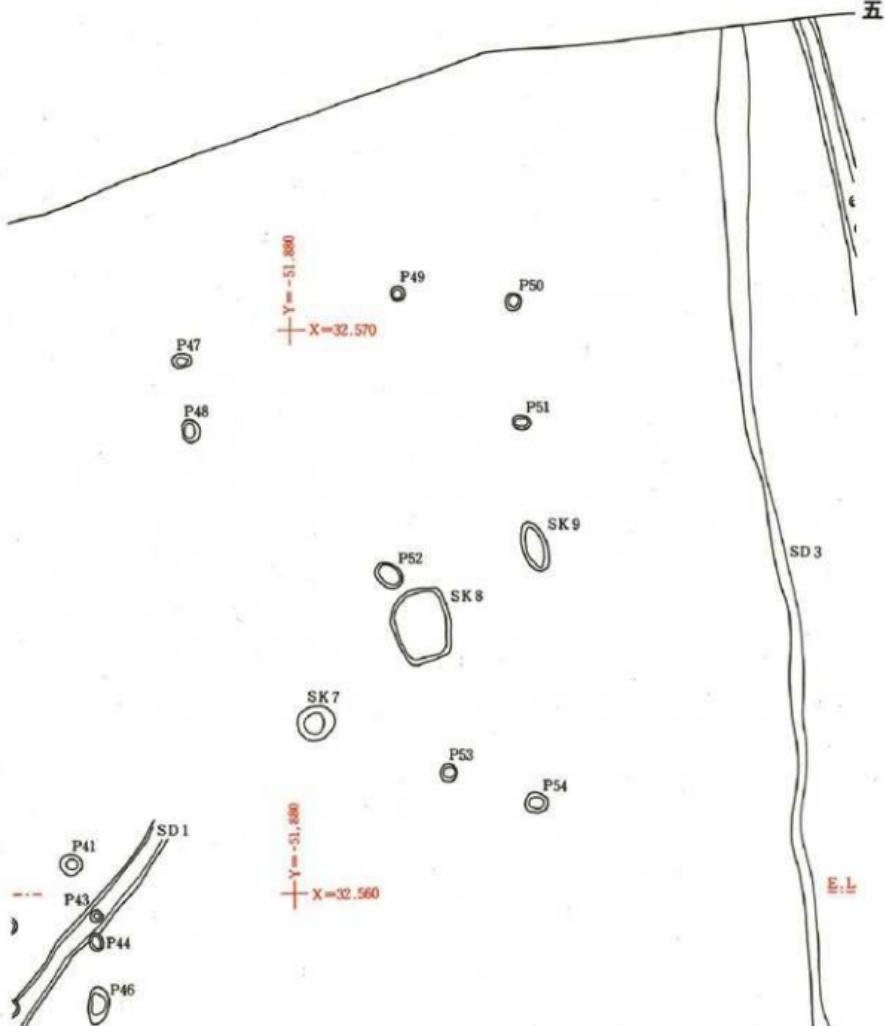
II 地区全体図



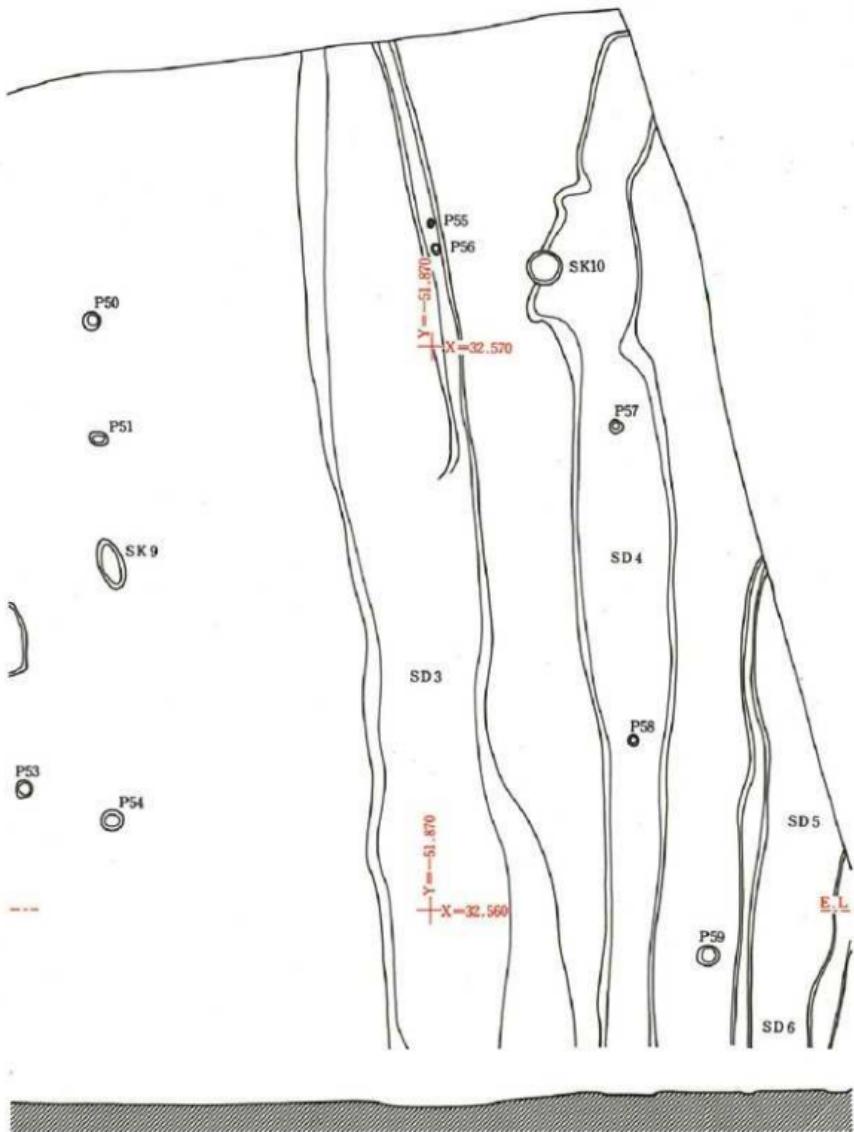
Ⅲ地区全体図



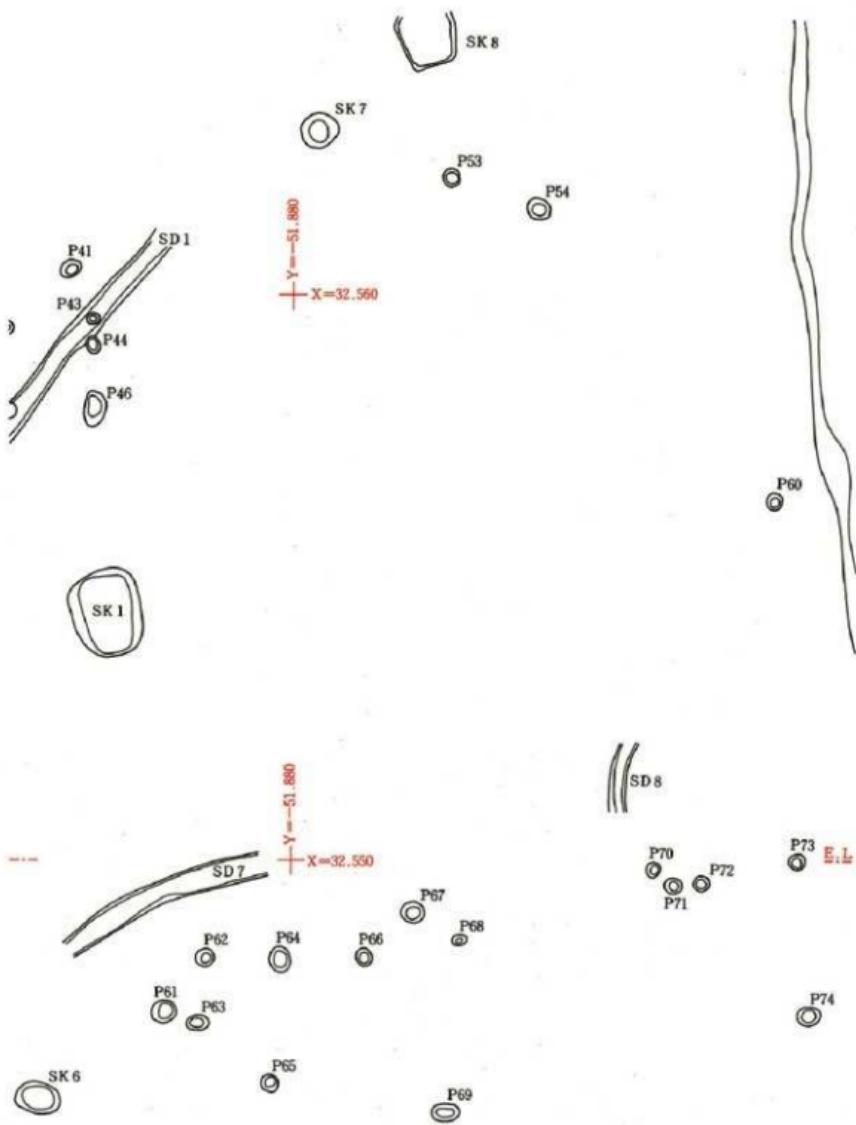
造構図 (1)



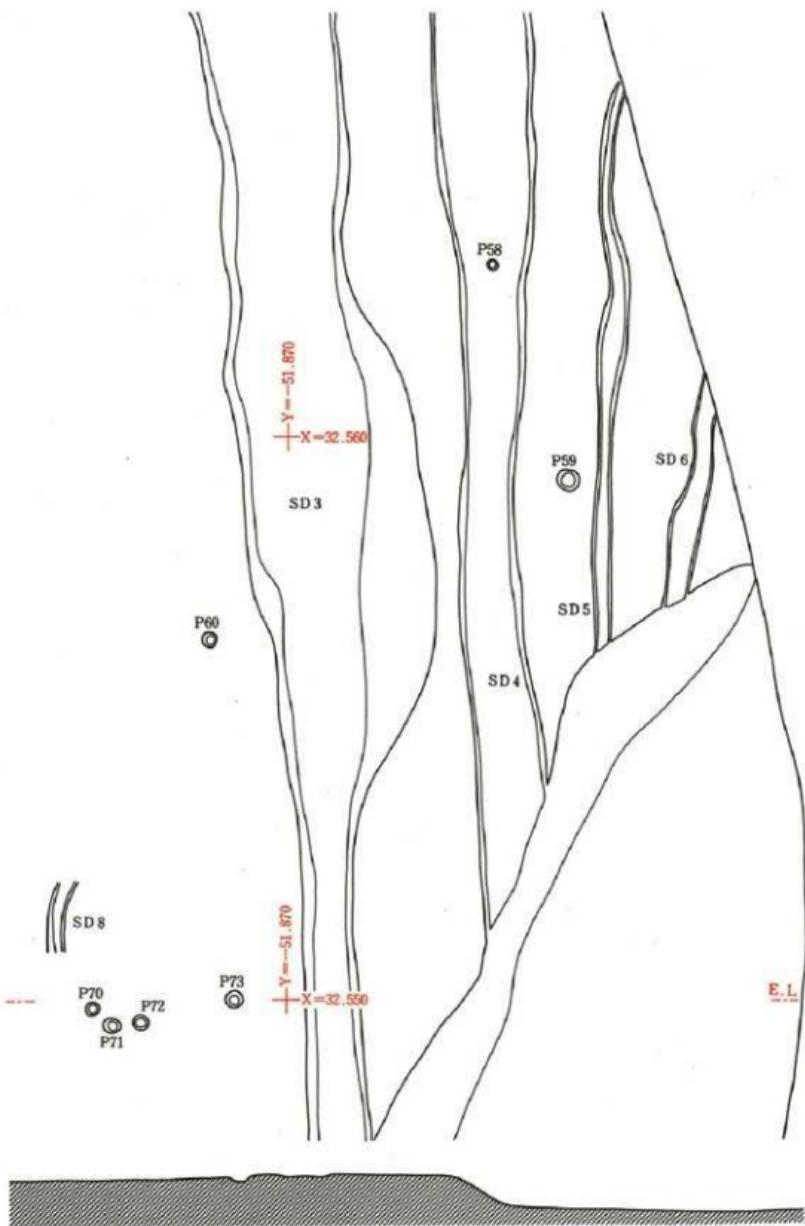
遺構図 (2)



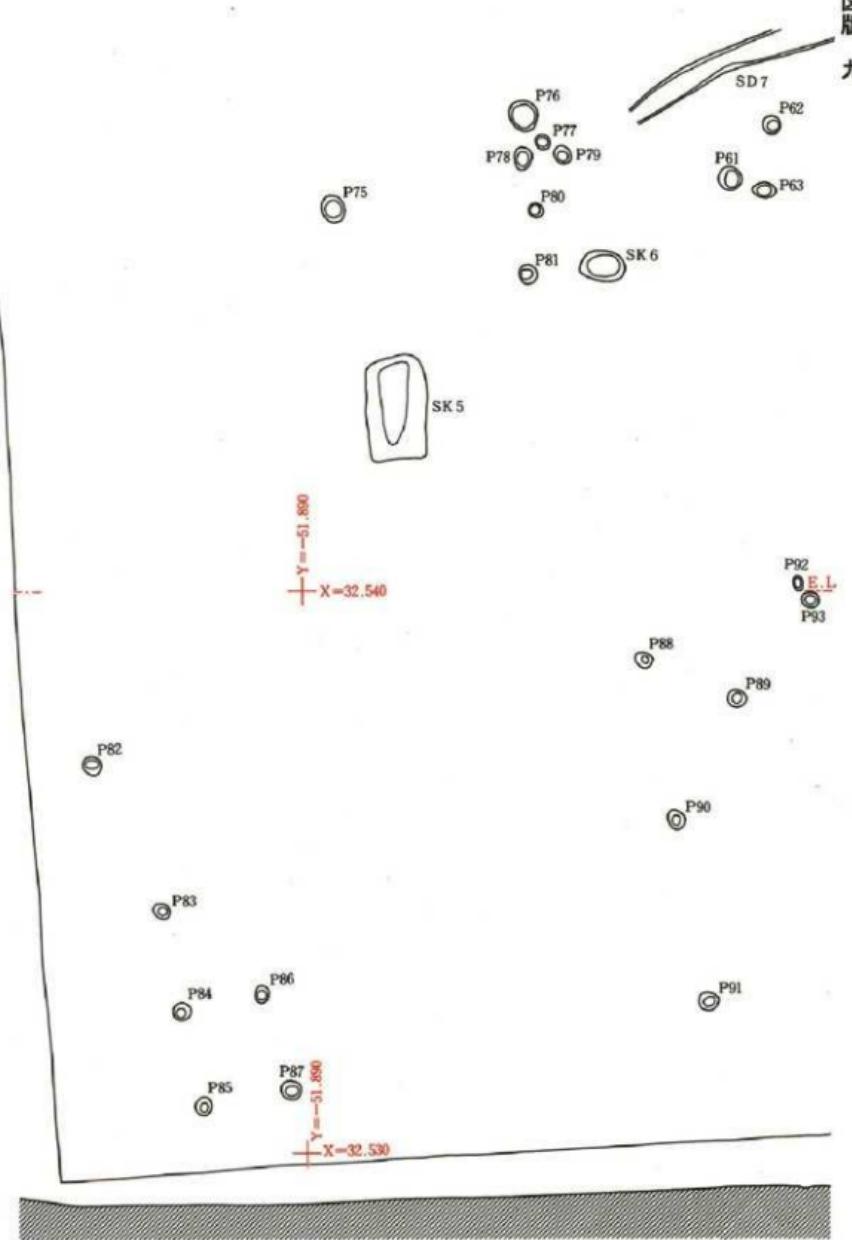
造構図 (3)



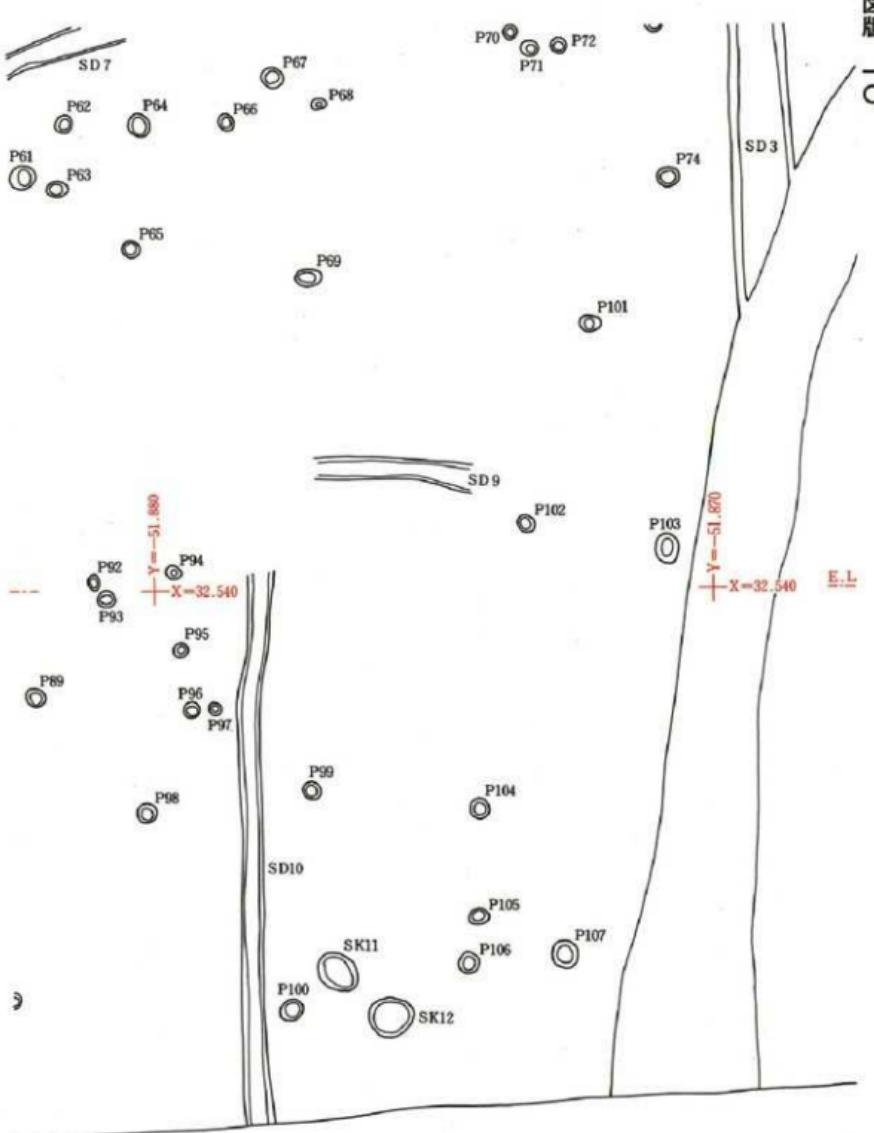
造構図 (4)



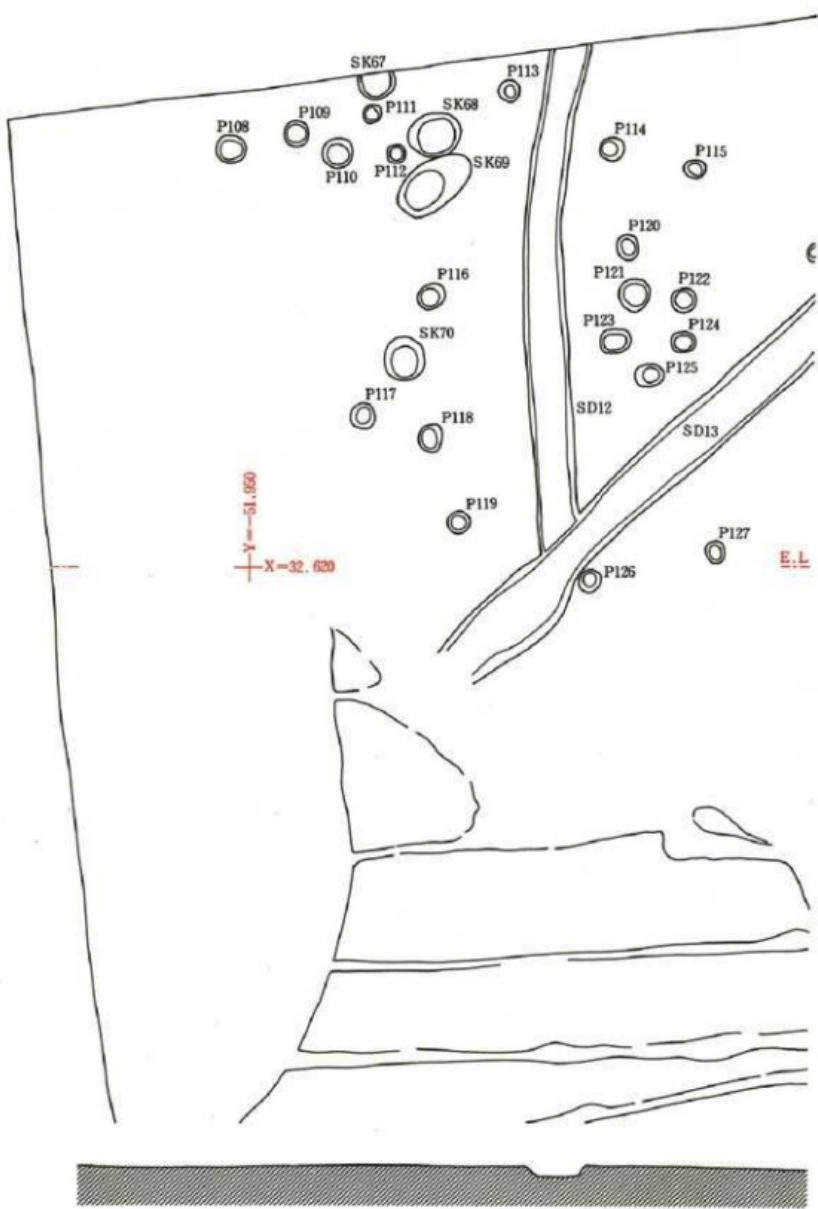
造構図 (5)



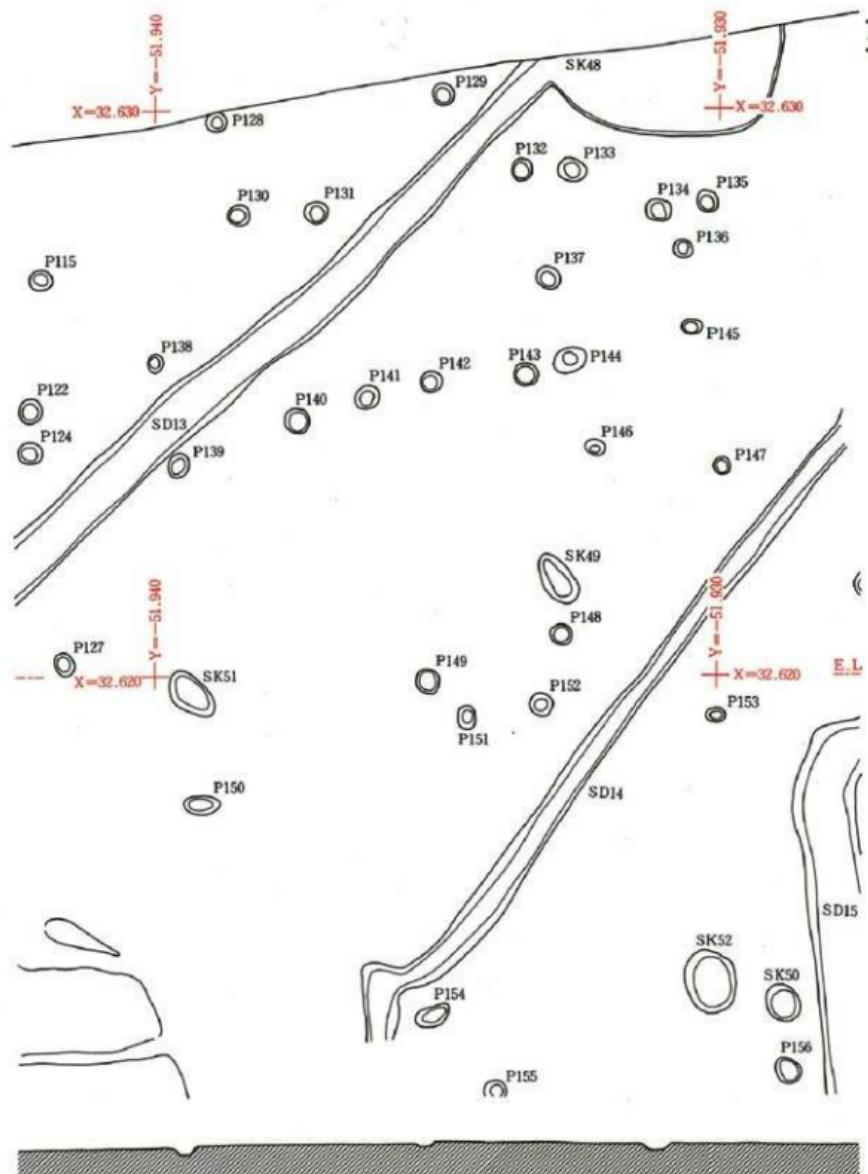
造構図 (6)



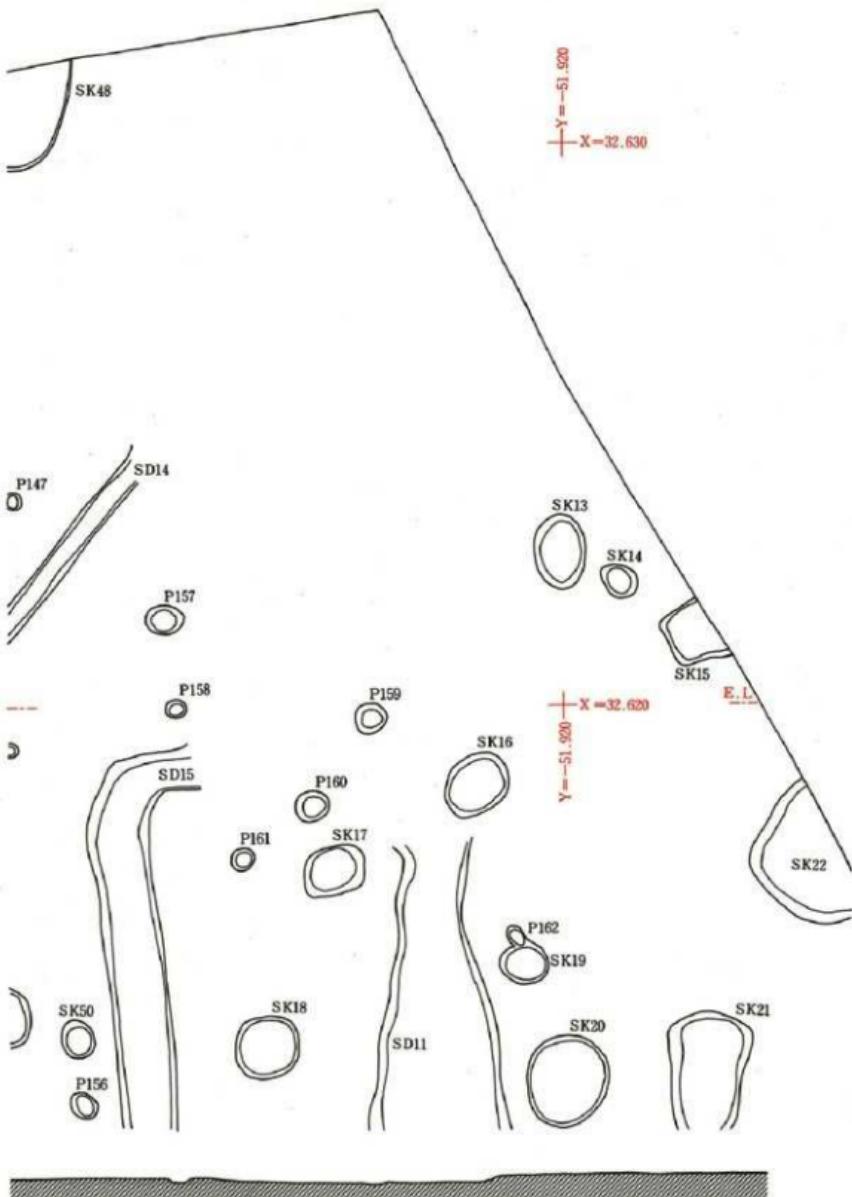
遺構図 (7)



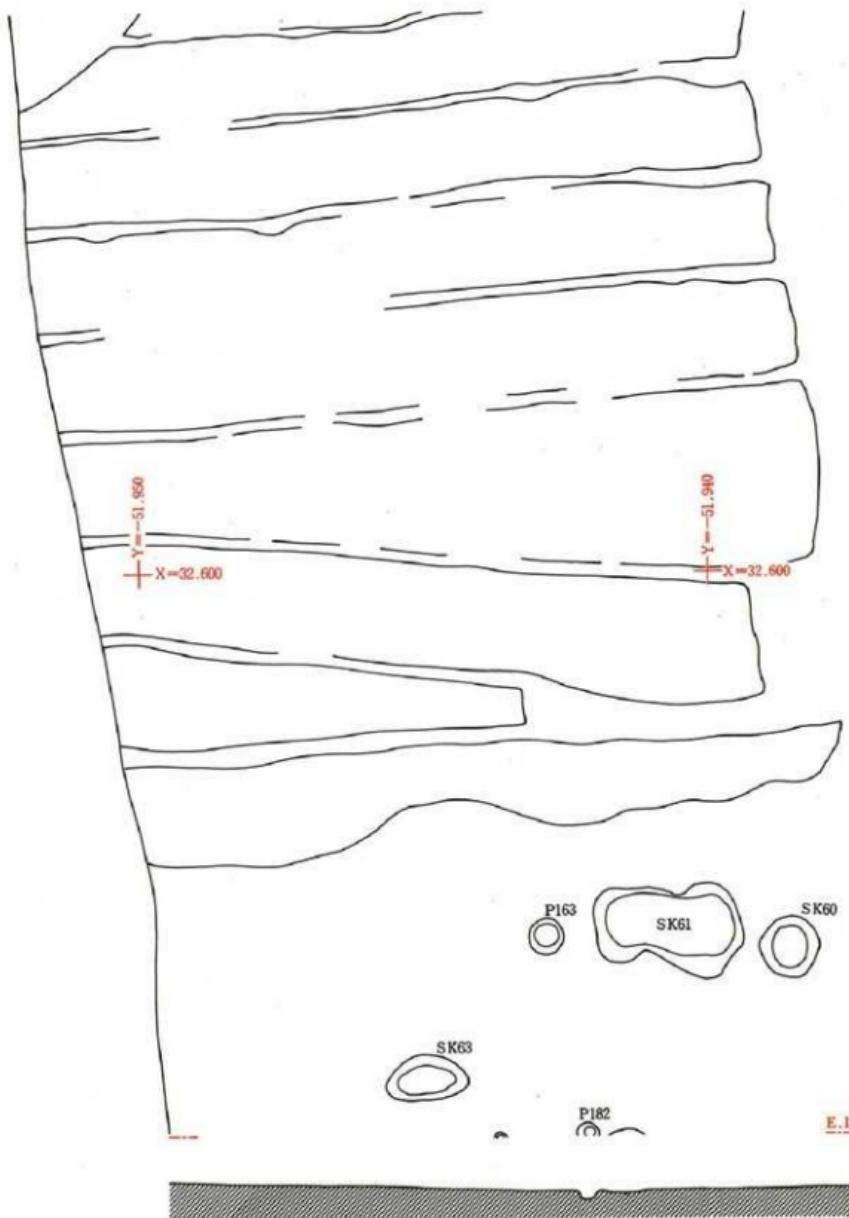
造構図 (8)



遺構図 (9)

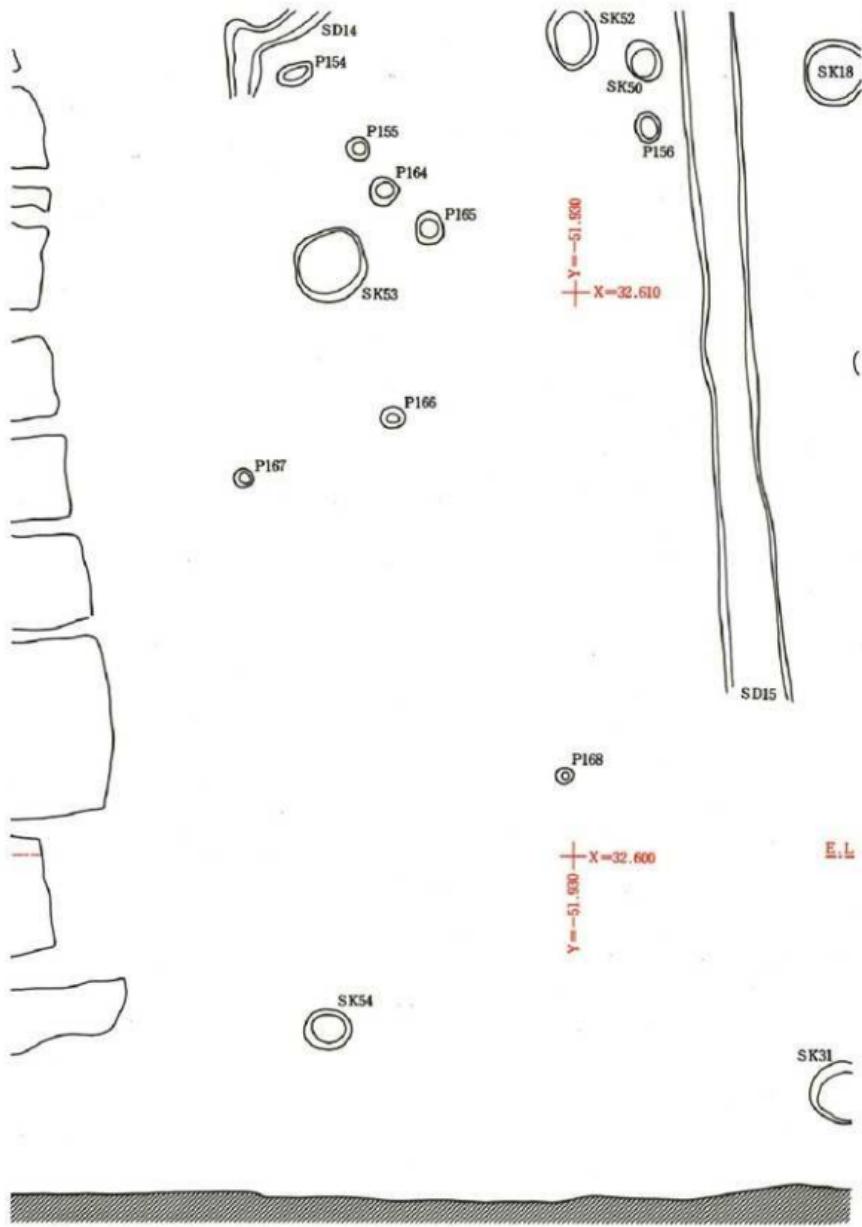


遺構図 (10)

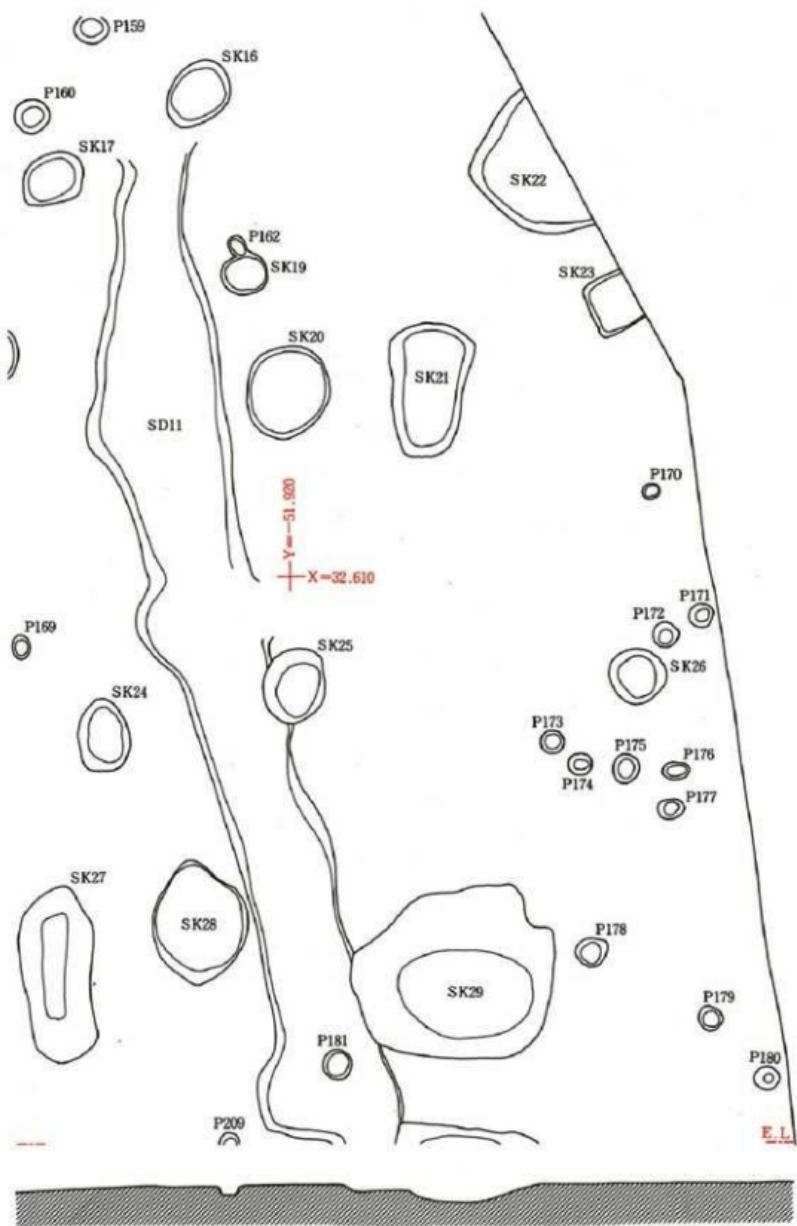


造構図 (11)

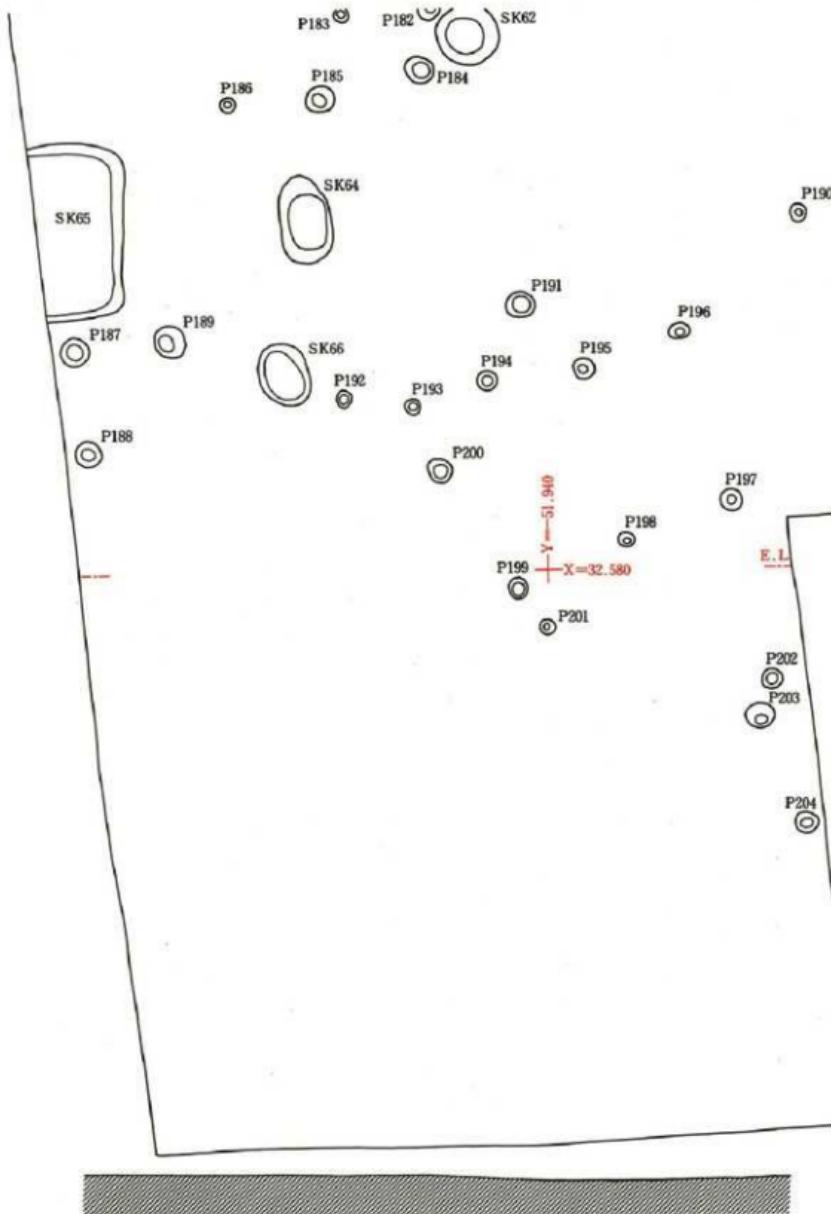
一五



造構図 (12)



遺構図 (13)



造構図 (14)

P209

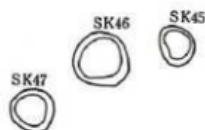
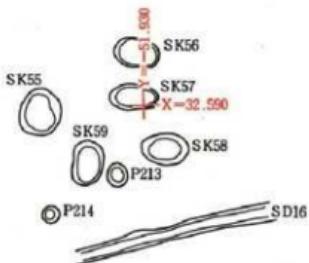
一八



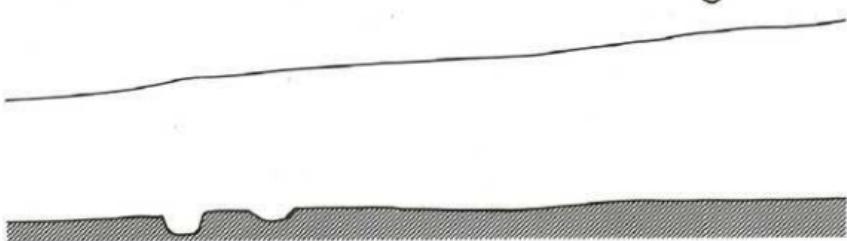
P208

P205  
P206  
P207

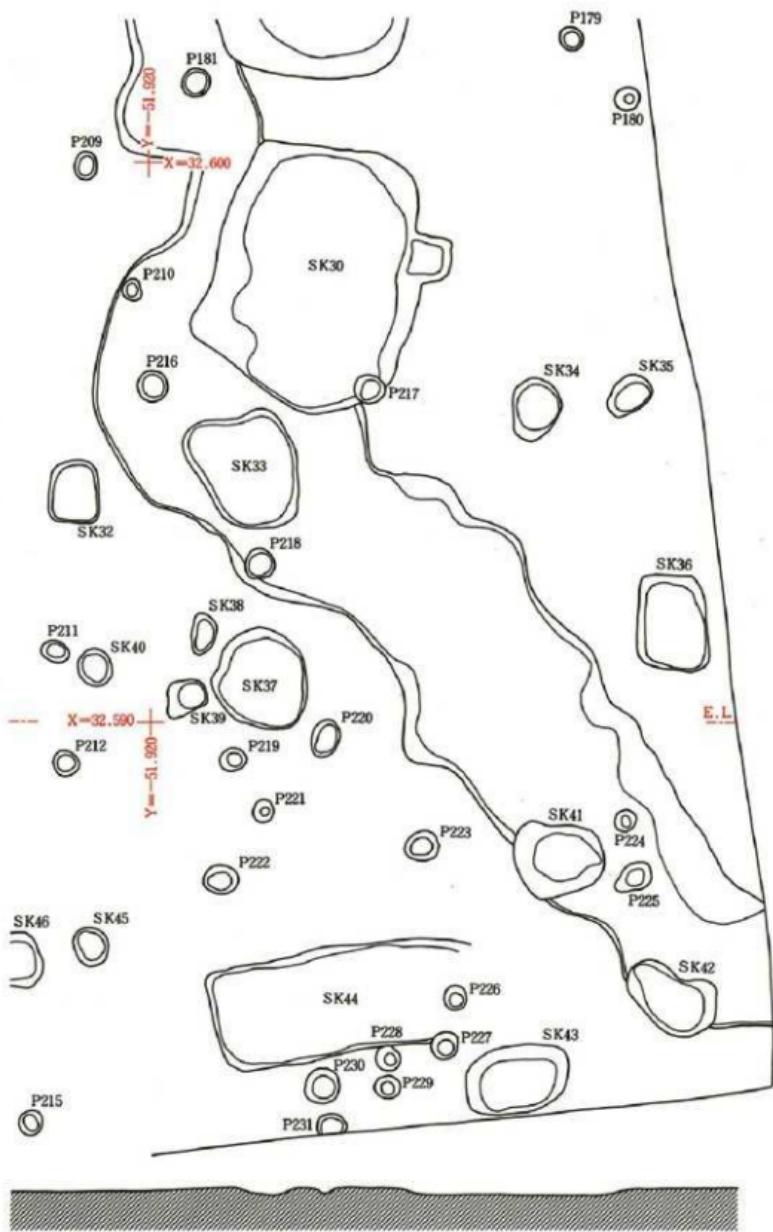
---



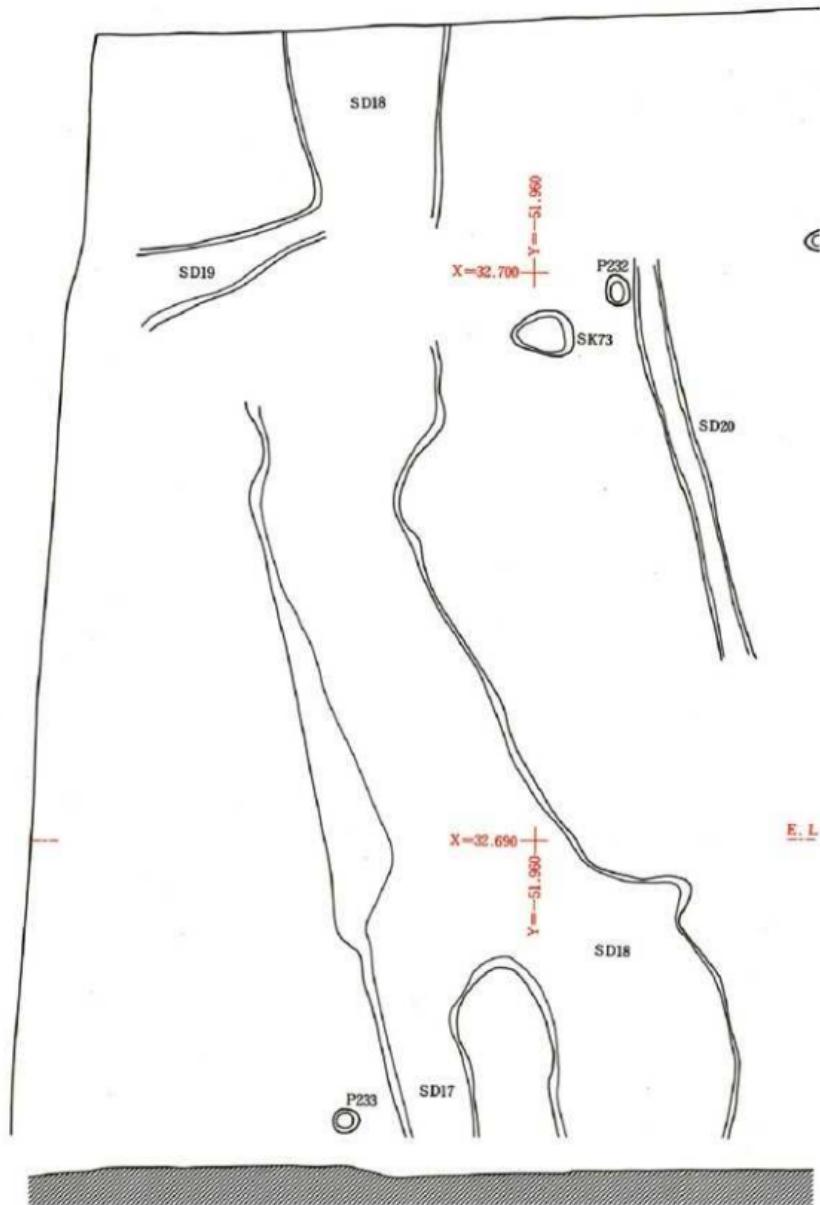
P215



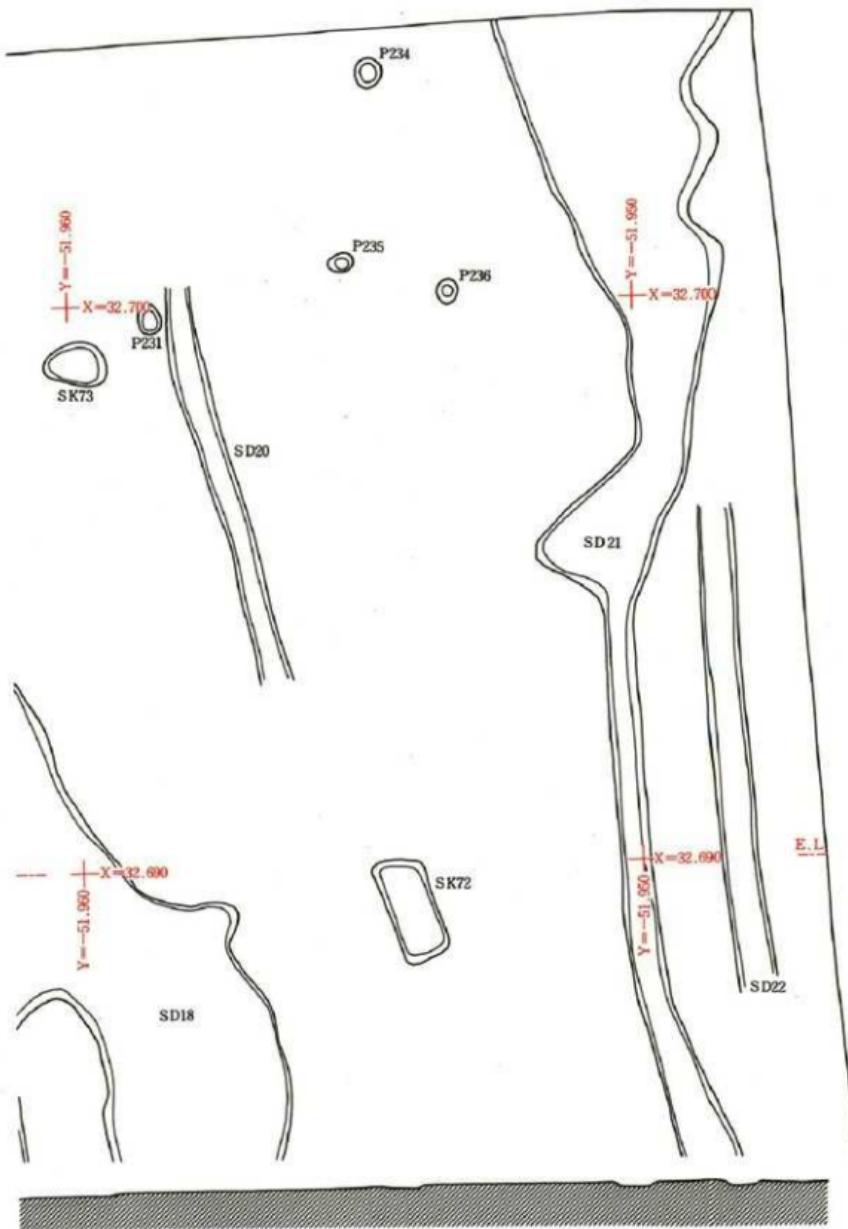
遺構図 (15)



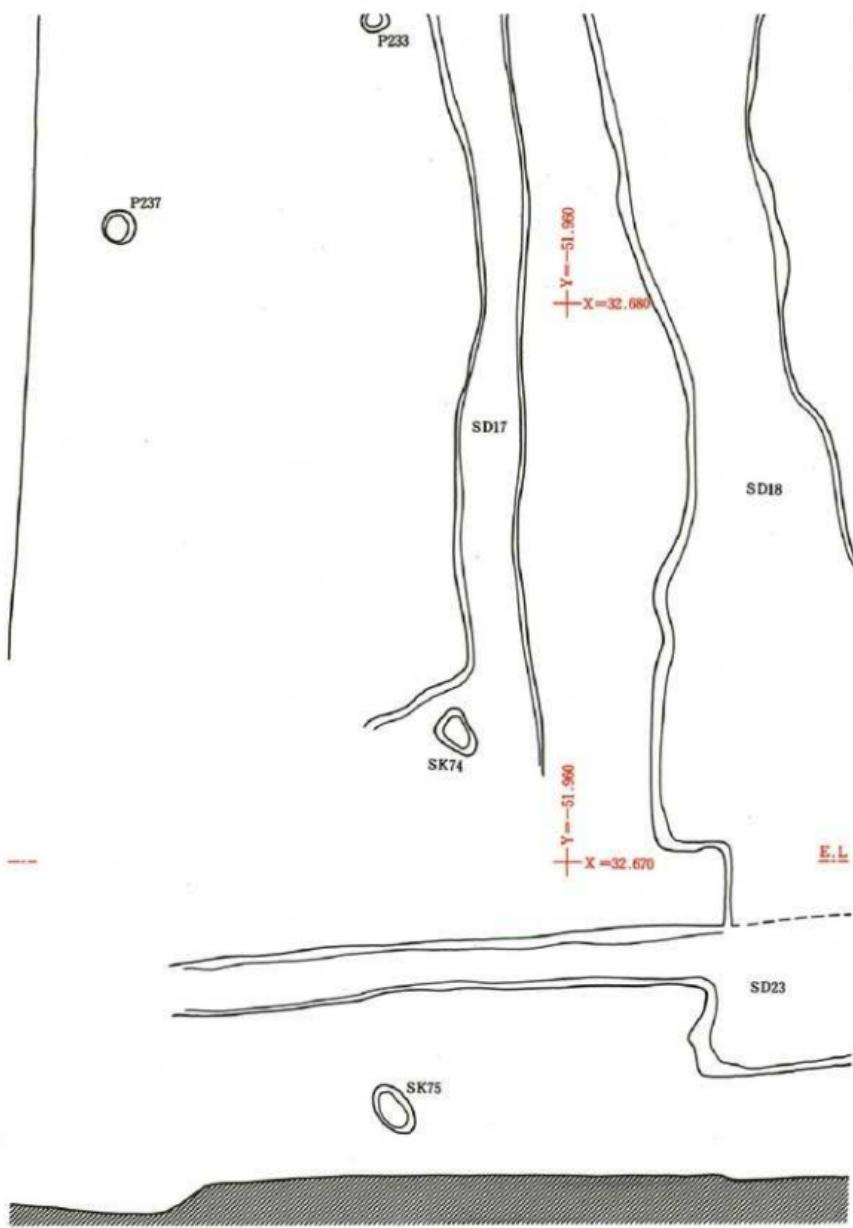
遺構図 (16)



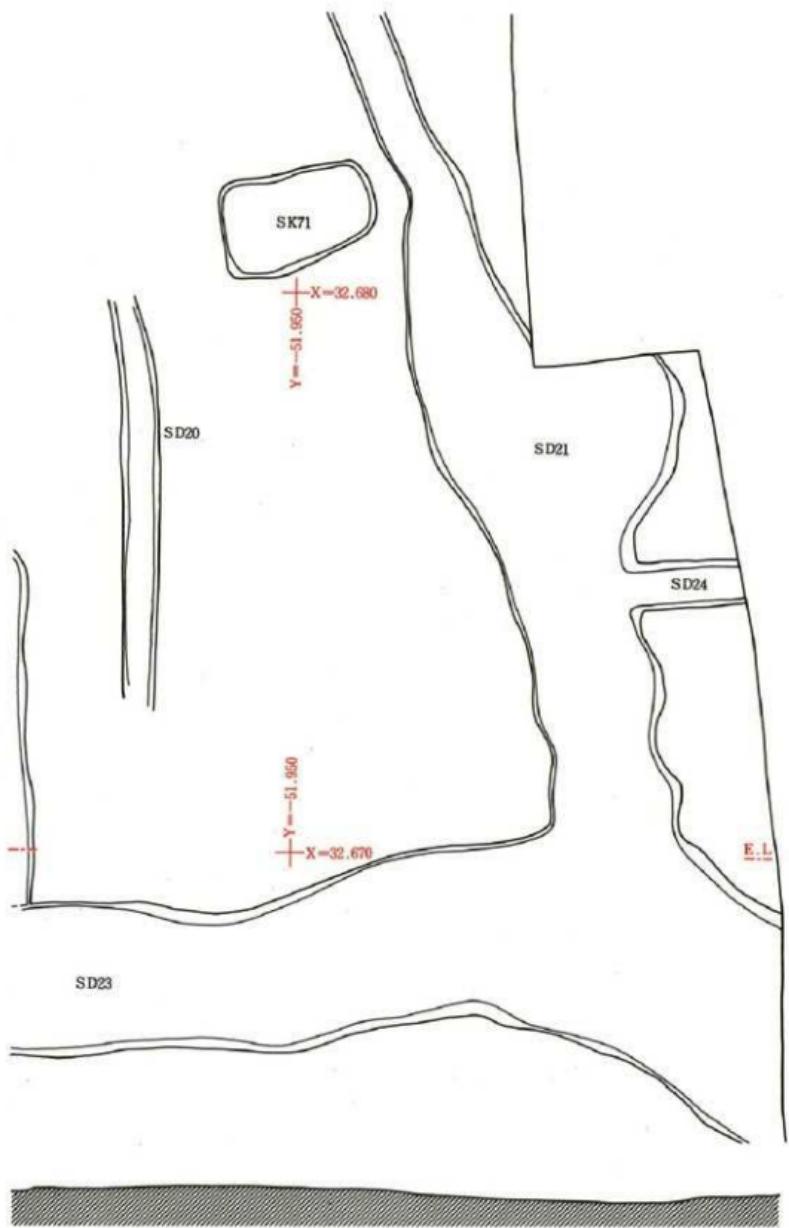
遺構図 (17)



造構図 (18)

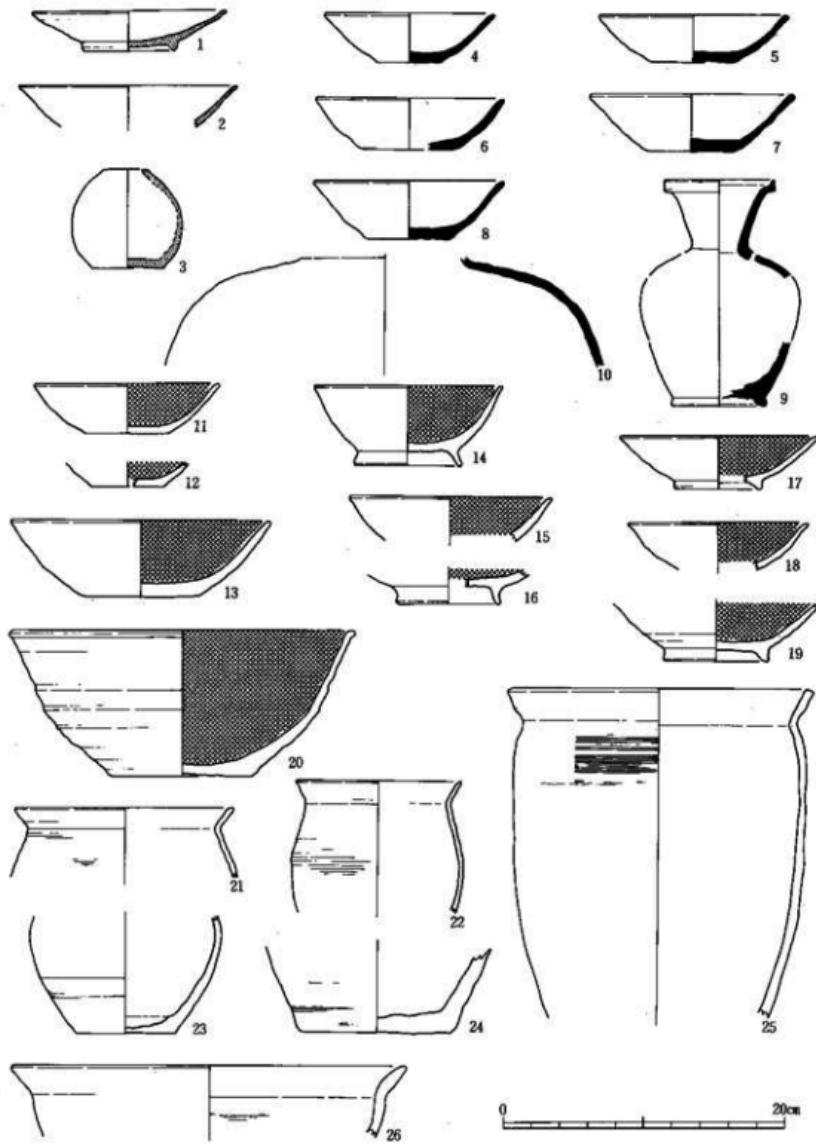


遺構図 (19)

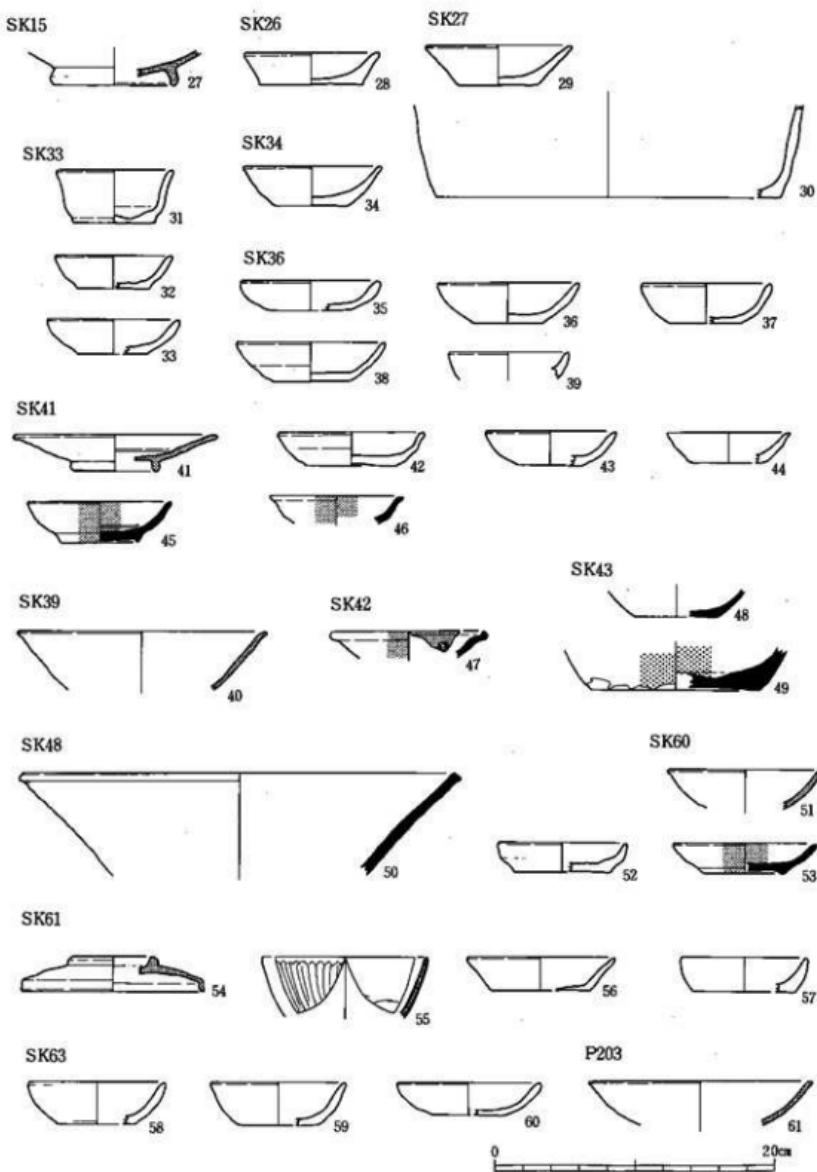


遺構図 (20)

SB 1

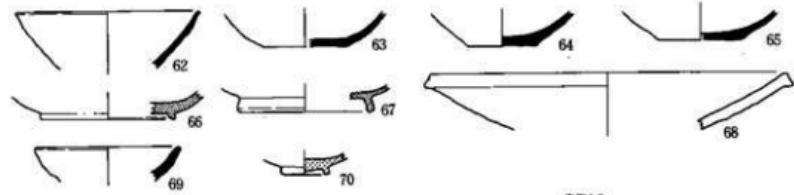


遺物実測図（土器：SB 1）



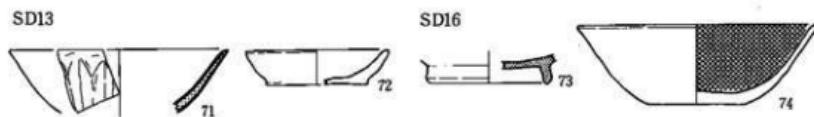
遺物実測図（土器・陶磁器：SK15、SK26、SK27、SK33、SK34、SK36、SK39、SK41、SK42、SK43、SK48、SK60、SK61、SK63、P203）

SD11

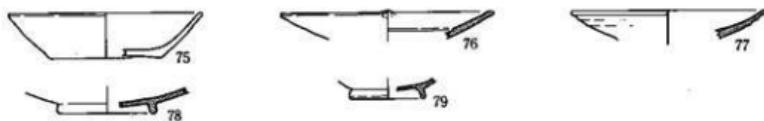


SD18

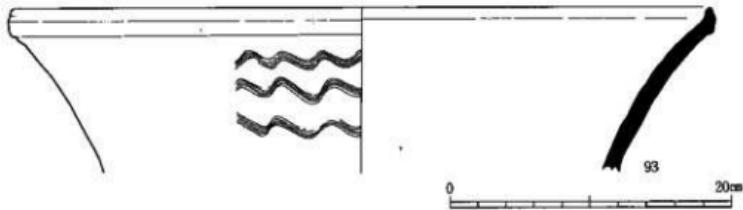
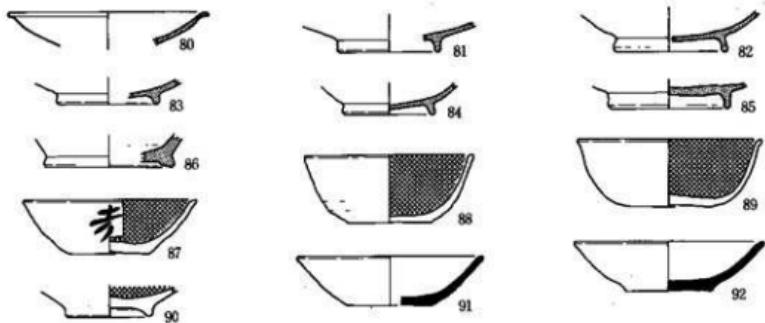
SD16



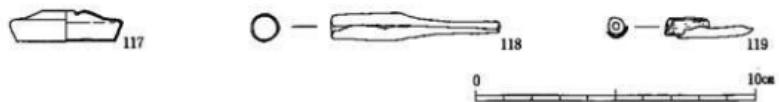
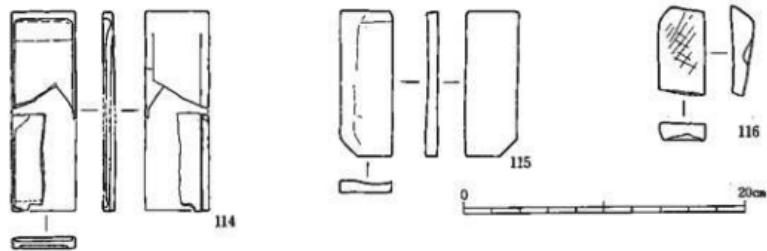
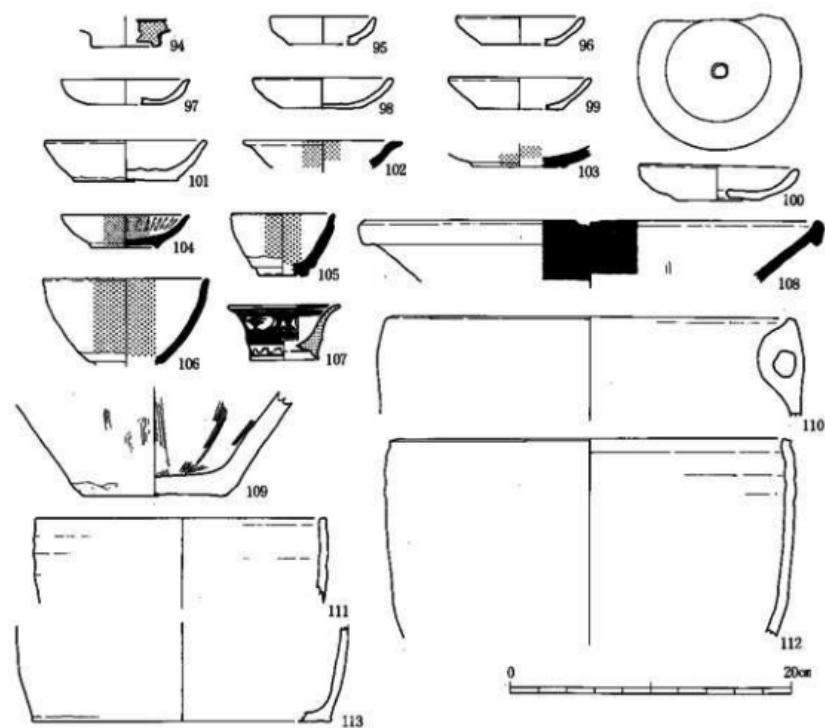
遺構外（I 地區）



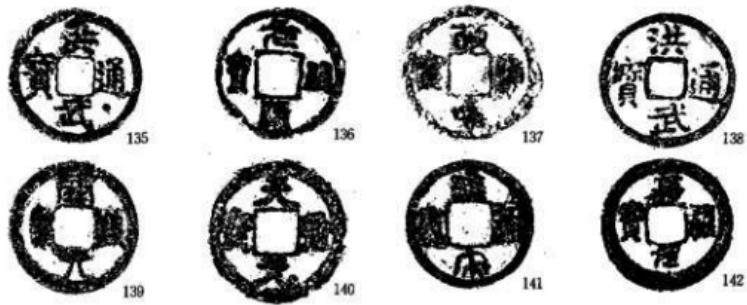
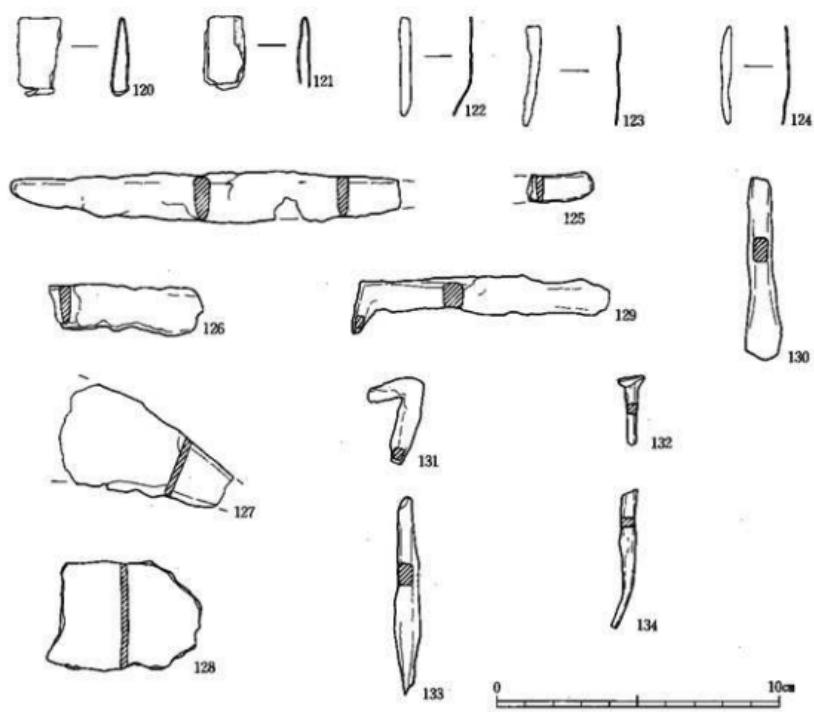
遺構外（II 地區）



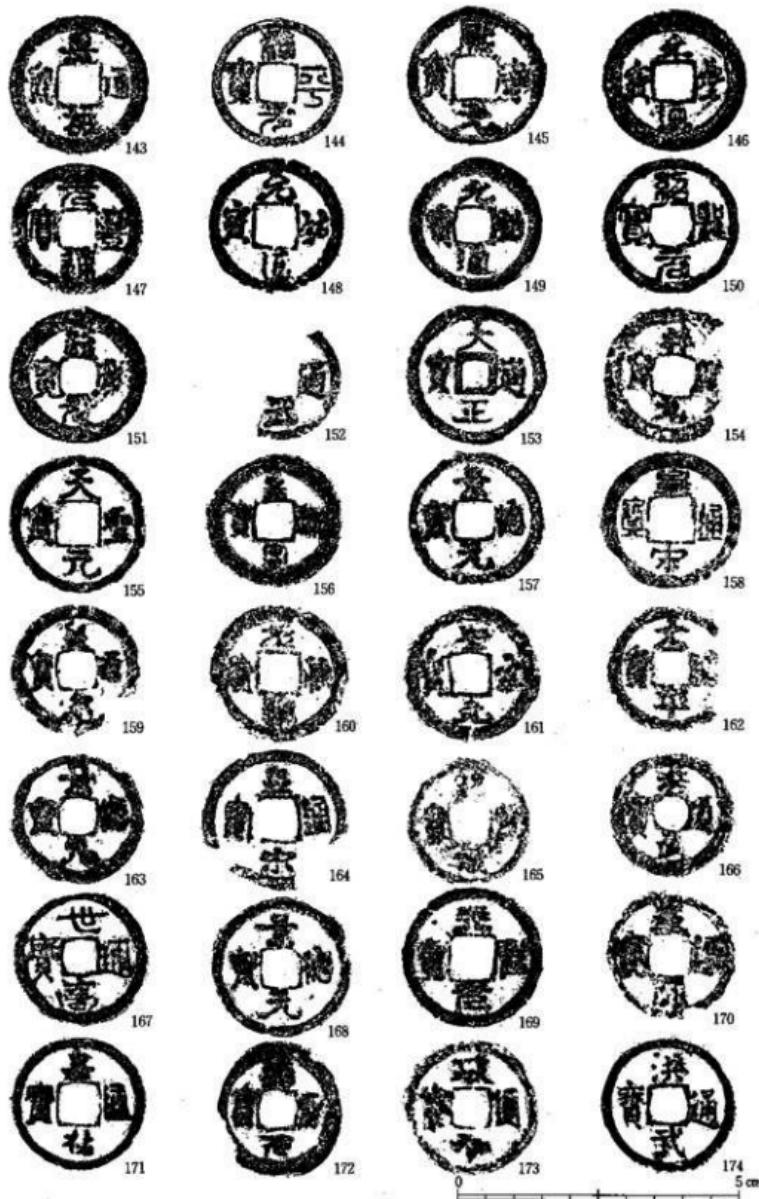
遺物実測図（土器・陶磁器：SD11、SD13、SD16、SD18、遺構外）



遺物実測図（土器・陶磁器：遺構外、石製品、金属製品）



遺物実測図（金属製品、錢貨）



遺物実測図（錢貨）



SB 1 遺物等出土狀況



SB 1



SK 1 (南より)



SK 1 (西より)



SK20



SK27



SK21



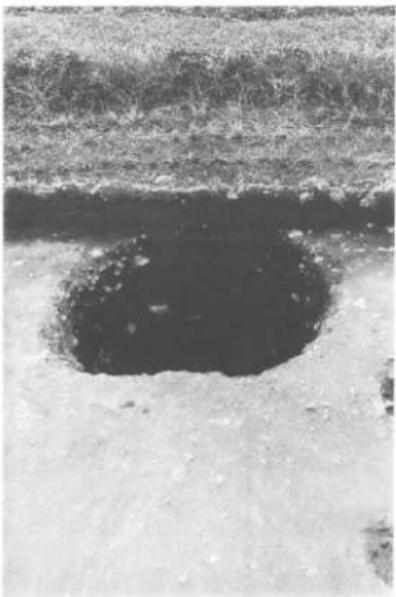
SK31



SK30



SK41・42



SK43



SK48



SK53



SK60-61



SD 1・2・7



SD 3～6 ・自然流路



SD11



SD14



I 地区横列



1



11



3



13



7



20



8



22



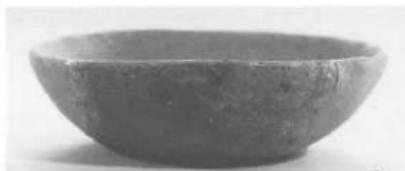
9



25



28



43



29



45



34



52



36



54



38



60



42



72

土坑·溝出土土器·陶磁器



74



100



87



101



88



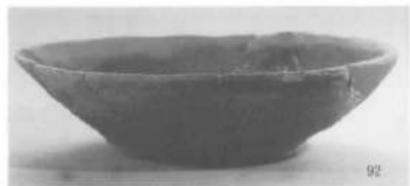
104



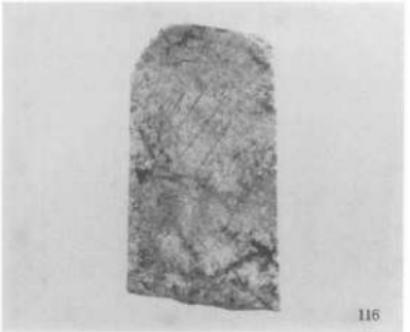
89



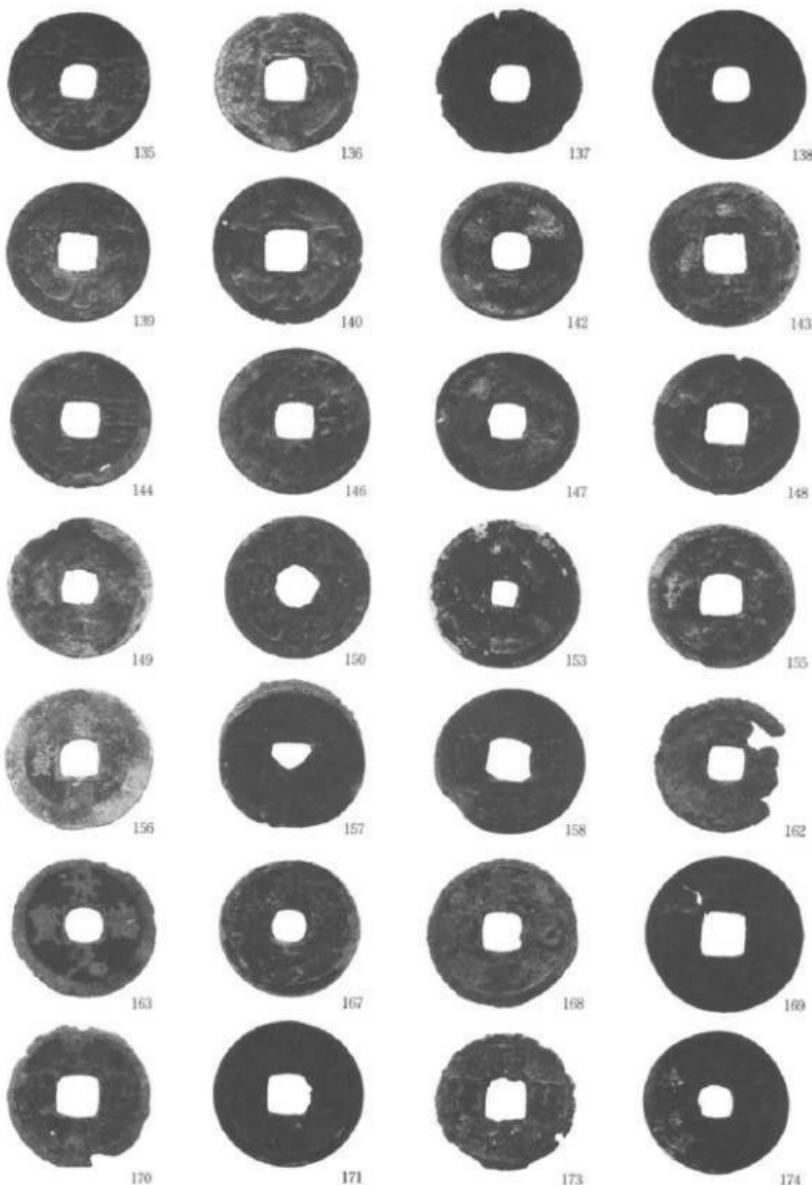
105



92



116





調査スナップ (1)



調査スナップ (3)



調査スナップ (2)



調査スナップ (4)

## 梶 海 渡 遺 跡

豊野町場整備事業豊科南部地区に係る  
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成5年3月20日 印刷  
平成5年3月25日 発行

発行 豊科町教育委員会  
長野県南安曇郡豊科町  
大字豊科4289-1

印刷 烏羽印刷株式会社  
豊科町大字豊科4658-1

